

---

# ニューキーツ

奈備 光

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

# 【小説タイトル】

ニユーキーツ

〔二二一〕

N 8460 J

【作者名】

奈備光

【めりや】

20111013

SFミステリー。

作者はあくまでミステリーのつもりです。

- - - - -

それなりに先の未来。

人々は不自由な暮らしを送っていた。失われたものがたくさんある。

自由、希望、平等、平穏……。

残されたものは友情と愛。

しかしそれらの意味も、変質していた。

人類と人造人間の葛藤。そこに宇宙から帰還した者たち。  
もう戦いは避けられない。

数世紀を貫く「愛」の行方は。

それはすでに「愛した記憶」なのか。はたまた現実を生きている愛  
なのか。

そう、まだ君を、これからももっと愛せるのか。

一人の女性兵士が殺された……。

ひとつ物語が動き始める。

- - - - -

「生駒&優 長編ミステリー小説シリーズ5」

同シリーズ「ノブ、ずるいやん」を先にお読みくださると、「ニコ  
ーキーツ」の心的背景が少しあかります。

でも、「ニコーキーツ」からお読みくださっても、それほどハンデ  
はありません。

では、よろしくお願ひします。

(目標完結時期  
2012早春です)

## プロローグ　冷静におなり

兵士が街を駆け抜けていく。

しなやかで光沢のあるピンクのバトルスーツを身につけ、女性が好んで使用する軽くて機動性の高いショットガンをわき腹にさげている。

動きが若々しい。

兵士はコンフェッションボックスに駆け込み、ドアノブをガシャリとロックすると、緑色のランプを睨みつけた。

所詮ちやちなセキュリティ。作動に、なぜこんなに時間がかかるんだ！と。

きつかり一秒後にランプが緑に変わり、それを待ちかねたように、兵士はヘッドギアからゴーグルをはずした。

エメラルド色の瞳を生体認証にかけ、29桁のアイディーを一瞬のうちに打ち込む。

コンマ三秒後にコンフェッションボックスのコンソールは内壁もろとも消えさせ、五、六十平方メートルほどの部屋に立っていた。

「パパ！ 大変！ サリが死んだ！！」

部屋の中央に男がいた。

「さ、どこにでもお座り」

女性兵士の言葉を無視したわけではないだろうが、にこやかな表情のまま、男はいつものように泰然と座っていた。

「おかしいのよ。殺されてからもう一週間も経つのに、再生しない

のよー」「

部屋には、至るところに様々な椅子が置かれてあった。  
女はいつものように、お気に入りの紫色のベルベットの小さなチ  
エアに腰掛けた。

「今日は珍しくバトルスーツのままかい?」

「あーん、そんなことよつ

「サリが死んだつて?」

「パパ」の部屋には様々な二十脚くらいの椅子が置かれてあるが、  
その配置は毎回違う。

女がいつも座るスツールは、今日は「パパ」の真正面に置かれて  
あり、まるで面談用の椅子に座ったような気分だった。

「つむ」

「ウンじゅないわよ。こんなことつてある? 一体どうしたつてい  
うのよー!」

男が静かな微笑を消した。

「サリって、だれだい? 急がないのなら、詳しく話してじらん」

「サリがやられた!」  
ゴーグルに流れた緑色の文字は、ンドペキが発したものだった。  
チョットマは、その言葉を記憶に留めただけで、作業に没頭して  
いた。

先ほどから、執拗に攻撃していく自動殺傷装置系ロボが放つ電流  
系エネルギー弾を、ハンディシールドで受け流しながら、小さな箱  
を地面に据えた。

箱は超密度の金属でできており、上部にふたつのスイッチが付いている。手の平に軽々と乗るシンプルなものだ。

スイッチを押すと、チョットマは振り返り返りざまにショットガンの引き金を引き、装置系ロボを粉碎すると、ゴーグルのモードを切り替えた。

小箱からは既に大量の髪が伸びていた。箱の金属そのものが目に見えない程のじく微細な糸となつて周辺の希少金属を採取していくのだ。

周りはありとあらゆる瓦礫で埋め尽くされていた。  
見慣れた光景である。

といつより、チョットマはこんな光景しか見たことがなかつた。  
じこまで行けども、コンクリートと金属と樹脂系のゴミの山と砂塵舞うばかりの原野。

これが地球の光景なのだと思つていた。

もつとも、チョットマの移動能力は高くはない。  
ねぐらとしている街から遠出をしたとしても、距離にしてせいぜい数百キロメートルほどだらう。

その向こうに何があるのか、チョットマは知らなかつたし、知りたいとも思わなかつた。少なくともこの瓦礫の山より、いいものが待つてゐるとは想像さえしなかつたからである。

誰かがやられる。

これは、それほど珍しいことではなかつた。

毎日のように起つくるかといふと、それでもないが、チョットマ自身もつひとつもまだ前に、手に負えない相手に挟まれてしまい、命を落とした。

政府が管轄する再生機構によつて、わずか三日後にはほととぎ川

のような体となつて、街に出て行くことができ、その一日後には小箱を抱えて瓦礫の山に突入したのだった。

甦つたのかといつとそつではない。  
再生されたのである。

通常は五日以内に再生される。  
しかし、サリが死んでから、既に七日も経つていた。

「ね、パパ。仲間のみんなは、サリは政府に殺されたんだつて騒いでる。ね、こんなことつてあるの？」  
男は迷つたような表情を見せ、しばらく黙つていた。  
「みんなは、どんなことを言つてるんだい？」  
男の聲音に、女は苛立ちを隠そつともせず、  
「知つてることがあるのなら、教えてよー！」  
と、叫ぶように言つた。

サリ、そしてチョットマの仲間達は、サリが政府によつて処分されたと騒いでいた。

なんらかのペナルティを課されたのだと。

ただ、どんな違反行為によるペナルティなのかといつと、全く見当もつかないのだった。

半ば愚連隊にも劣る墮落したものたちが多い中で、サリは規律を守り、成績も優秀な第一級の兵士なのである。

ただ、表向きは兵士といつてゐるが、實際は軍隊としての行動は既に無くなつて久しい。

戦争ないし紛争らしきものは、じつと百年以上も起つていない。

ただ、連日、瓦礫ヶ原に巣くう先時代の殺傷兵器の処理と有用金属の回収という「任務」をこなすだけの毎日である。

そんな日々の中での、サリは、再生不可処分になるほどの、どうな不始末をしでかしたといつだらけ。

「サリという子の処分について、僕は知らない。ただ、言えることは、ペナルティによる再生不可処分しか考えられないかといふと、そうでもない」

「どういうことなの？」

男がかすかに笑つたようだつた。

「チョットマ、君は勉強をしなかつたのかい？」

女は肩を落とした。

「私さ……」

「『メン。傷つけるつもりはないんだ。』ちょっと冷静におなり」「うん……」

再生不可処分は、必ずしも再生拒否ではない。

むしろ、より良いステージに上がるために、同等、あるいは類似系の再生ではなく、人としての多くの才能を付加した再生も現に行われているのだ。

そんなとき、元いた仲間達の元に返るといつことはまずない。当然ながら、新たな使命が与えられるからである。

また、本人が望んで、別の人格として再生することもできる。この場合も、通常は元の仲間達とは疎遠になるだらけ。

「分つているんだろ。サリという子が、必ずしもペナルティによつて再生拒否されたわけではないことを

女は黙つて下を向いていた。

チョットマにしてみれば、いや、毎日を精一杯生きている仲間たちにしてみれば、サリがなんらかの形で、つまり政府のお声掛けによつて、あるいは自らの意思で「抜けた」のかもしれないことを、認めたくないのだ。

サリの成績が優秀であればあるほど、品行が正しければ正しいほど、ペナルティによる再生拒否ではなく、その可能性は高いこと、ことも分かつてはいるが。

「でも、パパ…」  
「なんだい？」  
「サリは、私たちを出し抜くような人じやない…」  
「うん」  
「それに…」

男は、記憶の中から、サリという女性の輪郭を思い出していた。

目の前にいるチョットマより背丈はかなり高い。体にフィットする柔らかいカーボン纖維のバトルスーツではなく、硬い装甲に身を包んでいた。

ボディースーツにもヘッズギアにも、ハードな戦闘を潜り抜けてきたものが持つ、容赦ない傷が無数に入つていた。

ただひとつ、ブーツに金糸がバラの花を描くように使われていて、女性であることを物語つていた。

その女性の名がサリであると知ったのは、気まぐれで彼らの会話を傍受したからである。

男はたまたま送られてきた、送信者不明の情報に記された方法によつて、街の人々の会話を傍受するスキルを身に着けていた。

システムの不備なのか、あるいは最初から組み込まれた機能なのかは分らなかつたが、試してみると、いつも簡単に内容を把握することができた。

盗み聞きの後ろめたさで、気持ちのいいものではなかつたし、娛樂としては低俗過ぎて、すぐにやめてしまつたが、男は、一度でも脳に収められた記憶を忘れることがない。

サリとこう名を聞いたその時から、すぐにそんな記憶を呼び出していたのだった。

「パパ、私たち、どうしたらいい？」

女は、涙を流していた。

「生き返らせたいのか？」

「……」

この女は、サリを愛しているのだ、と男は思つた  
「今、どうしているのか、知りたいのかい？」

男はサリの消息を知らない。

ただ、調べることはできるかも知れない。

政府が取つた処置を調べることは、不法行為でもなんでもない。

意図して隠されていなかつた場合は。

「うん」

女は頷いた。

そして涙を拭つた。

男はいとおしい目で女を見つめた。

自分の記憶量に比べて、チョットマの記憶量は一万分の一にも満たないだろう。

しかし男は、チョットマが、世間の簡単な仕組みさえ勉強しなかつたのだ、とは思つていなかつた。

現実に田の前にあるものを激しく吸収するあまりに、少し前に仕入れた知識、むしろ常識といえるような事柄までも次々に捨てていくタイプの人であることを知っていた。

チョットマが出て行つてから、生駒は知人に連絡を取つた。サリという女性兵士について、詳しく知りたいと思つたのだった。

「わかるかい」

「ん？ 成功報酬だ。金額は内容による。その時点で、こちらの言い値を支払つてもらう」

相手は、いつものようにぶつきらぼうに言つたが、探してくれるだけでも儲けものだ。

サイバー空間で調査会社をやつている男で、生駒は勝手に、単に探偵さんと呼んでいる。

生駒が入り込めない政府のデータベースにアクセスできるのか、あるいは性能のよいネットワークを構築しているのかわからないが、たいていは数日後にはそれなりの報告をしてくれる。

生駒が普段頼む調査は、探し人のようなことではない。趣味の世界のようなことで、たとえば西暦一千三十一年八月八日の大阪梅田付近の航空写真のありかなどだ。

探せば生駒自身でも、いざれ見つけることはできるのだろうが、サイバー空間に溢れているデータ量が膨大すぎて、簡単なことほど見つけにくいのである。

年齢は。性別は。本名は。出身地は。瞳の色は。人種は。などと探偵は聞いてくるが、どれも知らないと答えるしかない。ニユーキーンの街に住んでいる兵士で、街の東部で消息を絶つたということだけ。

性別さえも、たぶん女だというだけだ。

人種という言葉は昔は肌の色で区別をしていたが、今は人間としての生まれ方で区別をしている。兵士であるということは、再生人

間か再生人間から生まれた子である可能性が高い。

「あまり期待するな」

という言葉を残して、探偵は通信を切った。

生駒は自分の意識を二つに分けた。

ひとつは人の姿をとつて面会者用にスタンバイさせ、ひとつは精神のまま移動用チューブに放つた。

出かけるときは必ず、意識を複数個用意しておかねばならないきまりだ。

移動用チューブの実態はビジュアルだけのもので、移動していることを実感する以外に用途はない。

生駒は移動用チューブを出ると、宇宙空間に伸びている光の柱に入つた。

数秒間はエレベーターのように上昇していくが、それも同じことだ。エレベーターの窓からは、みるみるうちに青い地球の輪郭が見え始め、宇宙の暗さを実感する。

上空には巨大な円盤の底が迫つてくる。

円盤はまるで光の柱に支えられているかのように浮かんでいる。この絶景もリアルタイムモニタだが、違和感はまったくない。

「英知の壺」と呼ばれる静止衛星。

それは、光と宇宙線のエネルギーを受けて、建造後六百年ほど経つた今も稼動し続けていた。

約十平方キロメートルの広さを持つ円盤。

人類の記憶を留めた無限の集合脳。

そして人類の食料生産基地の機能を併せ持つ。

地球人口三億人の命の源。

高度一千キロの地球周回軌道に散らばる四十八個のもうひとつの大地。

円盤下部は地球と光のエネルギーを交換する面で、びっしりと受光板が敷き詰められているが、上部は金属製の建物で埋め尽くされている。

以前、あらゆる食物はここで人工の水を使って生産されていた。現在、その重要度は低下したが、役割そのものに変化はない。

太陽の陽を浴びて光だけはふんだんに降り注いでいるが、それ以外はすべてここで作られたものだ。

かつて無重力体験を遊んだ観光客の姿はなく、守人たちの姿さえ消えた。

すでに生あるものはなにもいないといわれていた。

生駒は、その英知の壺のひとつ、ジョーピー・エヌの景観を眺めた。建物外に大気はなく、空は暗く星が瞬いている。

巨大な満月が、青白い光を放つて東の空に掛かっていた。隙間なく建ち並ぶ工場群の壁は、極寒の中で光を反射し白く硬い光を放つていた。

生駒はよくこの円盤にやつてくる。

地上にいても同じシーンを見ることはできる。同じように考えることもできる。

事実としての記憶と、それと対をなすその時の心の様相はデータ化され、古びることなくいつでも引き出してくることができる。

この円盤に来たからといって、自分の思考に変化があるわけでもないし、深まるわけでもない。

しかし、あらゐる記憶が本来はまとつてゐるだらつ感傷的ともいえる味覚や匂いが、自分の脳の機能そのものが保管されているこの場所だからこそ、強く感じじことができると思つからだ。

円盤の中央部、建物内のコロドールの先に、目的の泉はある。泉の水はどこまでも深く青く澄み、鏡のような水面に自分の顔がくっきりと映つていた。

生駒の意識は、泉をゆっくりと沈んでいく。まるで重力がそうさせるとかのように。

脳裏に浮かんだひとつの光景。  
それは生駒がかつて体験した光景。  
記憶に残る一片のフォトグラフィ。

見つめていると、たちまちその光景は脳裏を離れ、体を包み込む。意識は自我を離れ、その光景に誘われるよつに、記憶の元となつたその瞬間に立ち戻つていく。

あたかも生まれ変わったかのように、その体験を繰り返すのだ。寸分違わぬあの体験を。

生駒がこの円盤に来て見つめなおすことが習慣になつた記憶。それは、このシーンから始まる。

強い光が溢れていた。

昼なのか夜なのかも分らない。

巨大な光の束が大気を突き破り、宙に向かって突き立っていた。  
ならかだが石ころだらけの丘陵が続く、その先に。

光の束。

英知の壺が消費する膨大なエネルギーを、地上から送り込み続け  
ている。

その中心に向かって、グネグネと折れ曲がった小道が丘陵地帯を  
巡っていた。

人影が見えた。

ふたつの長い影。

岩肌を移動していく。

年老いた男に、数歩遅れて続く女性の姿。

それは、はるか昔の自分自身の姿。

車窓には単調な白い景色が広がっていた。

ここ数年、日本に雪が積もるということはなくなっていたが、今年は例外で、関西でも時折雪が舞つた。

この雪景色が隠しているもの。

大地の様子を、生駒は知っていた。

生駒が知つていただけではない。日本中の誰もが知つていいことだつた。

かつての豊かな田園地帯と陽光溢れる街々。多くの観光客を集めた著名な温泉地。

そういう郷愁を生む風土だけではなく、道路も信号機も、家々も、そして人々の姿も、何もかも、雪が覆つっていた。

サンダーバード号は、特急列車とはお世辞にもいえないギクシャクとした動きで、ノロノロと雪を搔き分けつつ北陸の地を進んでいた。

生駒は、前に座った綾の顎の辺りを見つめていた。  
横顔に夕陽が当たつていて。

痩せた頬。

美しい顔立ちに似合わない、がさついた肌。

長い髪は健在だが、少女の頃の艶やかさはもうすでにない。

「雪よね」

大阪から列車に乗り込んでから、はじめて口を開いた綾は、目の前に広げた食べかけの弁当に蓋をした。

「ああ、珍しいね」  
「おじさんとの旅行も、これが最後になるのかな」

生駒はなにも応えることができなかつた。

最後……。

そうかもしれない……。

「死にやしないよ」

「うん」

「何しろ相手は、女神なんだから」

女神という言い方に、綾は久しぶりに田を合わせて、少し笑つた。

もう、どれだけ話し合つたことだろう。

この旅は、自分が行かなくては。いや、自分のための旅なのだから、と主張し続けた生駒。

私の出した結論に、自分で決着をつけたいという綾……。

三ヶ月間、準備の傍ら、その議論は膠着し、こうして二人して日本海に沿つて北上している。

列車は加賀を過ぎた。

もう何年も前に無人化された列車に、到着駅のアナウンスはない。そもそも、このあたりになると、乗客は数えるほどしかいない。二人が乗る車両にも他の人影はない。

窓の外の景色が、微妙に変化し始めていた。

「ほら、見て」

綾が久しぶりに声をあげた。

「雪が」

深く降り積もり、白一色だつた雪原に変化が起き始めていた。家屋の残骸が垣間見えるようになつていて。時折、かつては田園であつたと思しき地形が見えたりする。

雪解けのよう、斑に。

山の縁が濃くなつたようにも感じる。

そして、陽の光が少し強くなつたようにも感じた。

「こつちは暖かいんだ」

終着駅、金沢まで後四十キロほどだらつか。

金沢駅。

日本中、どこの町もそつだが、しんと静まり返つていた。

プラットホームにもコンコースにも人影はない。改札さえも、無

人だ。

駅だけではない。

街中に、動くものの気配は感じられなかつた。

かつてはあれほど賑やかだつた大きな天蓋のある駅前広場には、崩れかけた数台のバスや車が放置されてまつ。

もてなしどームと呼ばれた門や、歩行者通路の屋根のガラスはすべて割れ落ち、骨組みだけとなつていた。

それさえも錆び付いて、薄暗くなりかけた空に白い残骸を晒すのみである。

店という店、ビルというビルはシャッターを降ろし、あるいは略奪の跡を残したまゝ、既に廃墟と化していた。

雪は全く積もつておらず、むしろ蒸し暑いとさえ感じた。

ただ、空だけは冬空らしくどんよりとして、今にも振り出しそうな雲行きだつた。

ただ天空の一点を除いて。

生駒は駅前広場への階段を下りようとせずに、街の様子を観察した。

大通りを遠く、ぼろをまとつた人間がふらふらと横切つていくのが見えた。

コンコースへ戻つた方がいいだらう。

自分は老人である。連れは女。

この街の住人に好奇の目で見られて、良いことが起こるとは思えなかつた。

今晩は、コンコースの人目につかないとこりで眠ることになるだらう。

「どこに行くのか」

唐突に呼びかけられて、生駒は思わず躊躇になつた。

綾が生駒のコートの影に身を隠そうとした。

そのまま逃げ出したい衝動に駆られたものの、体が自然と振り向いた。

「聞こえないのか。質問している！」

戦闘服に身を包み、武器を携えた男が一人立つていた。

「……」

若い兵士がゆっくりと軽機関銃を水平に構えるのを、上官らしき方が押し留めた。

「我々は、陸上自衛隊中部方面隊金沢駐屯地のものである。改めて聞く。どこに行こうとしているのか」

生駒は肩の力が抜けた。少なくとも、この男達は自分達に危害を加えるものではない。

しかし、生駒は嘘を言った。

「故郷なのでね」

この街の住人ではないことは、この自衛隊員の目に一目瞭然だ。自分達を誰何する目に、強い不信感が表れている。本当のことを話したところで、理解してくれるとは思えなかつた。むしろ、自分達の目的を阻まれることは目に見えていた。

「観光に」

この街に、なんと似つかわしくない言葉だろ。見え透いた嘘に自衛隊員が納得するとは思えなかつたが、それ以外にいい言い訳は思いつかなかつた。

### 3 記憶の街

若い兵士は、馬鹿にされたと感じたのだろう。明らかに怒りの表情を見せたが、上官の方は心なしか笑つたように見えた。

そして、言葉を和らげた。

「金沢によつて。と、歓迎したいところですが、ご覧の通りです。危険でさえあります」

都会の老人と女性が来るところではない、という。

「この駅から外には出ないよ。駅のコンコース周辺は我々が掌握していますから安全です。そろそろ暗くなります。街のほとんど のエリアには電気が来ていません。危険です」

次の大阪方面行きの列車は明日の朝までないといつ。

「それでお帰りください。それまでは、ここでお過ごしください。観光で来られた方をおもてなしすることは何もできませんが」

帰るわけにはいかなかつた。

しかし、今は彼らの言葉に従つておくしか手はないようだつた。

生駒は、綾を連れて駅のコンコースを歩き回つた。さも、観光客がみやげ物を探すかのように。

埃をかぶつた金沢の街の鳥瞰模型。ショーウィンドウの中のガラクタ。色あせたパンフレットの類。動かなくなつて久しい天井の大時計。至るところ欠けて無残な姿となつた大きなレリーフなどを見てまわつた。

若い兵士は姿を消し、上官だけが東口の階段の上に立つていた。街を警戒しているのだ。

生駒は迷った。

この自衛隊員の田を「まかして、どこから抜け出るか。あるいは、事情を話すか。

武装した自衛隊が掌握していると云ふことは、駅を抜け出るのはたやすいことではないということだ。ここは一晩を過ぐし、明日の田になつてから出で行くとしても同じことだった。

そしてもうひとつ。

この街の状況を見て、やはり綾は連れていけない、という意思を強くしていた。

彼女には、どうしても無事に大阪に帰つて欲しかった。

綾は思い詰めた表情をしている。  
眼を合わせようとはしない。

芯の強さは筋金入りであることは重々分つていて。  
街のこの状況を見ても、彼女ならひるむことはないだろう。むしろ、老人である生駒をここへ駆り立てた原因を自分が作ってしまったと考えるだろ。生駒を守らねばならないこと。

「ちょうど、お聞きしたい」とあるのですが

生駒は勝負に出た。

ここは、自衛隊員にやんわりと監視されながら朝を待つていても、勝機はめぐつてこない。そう判断したのだ。

「どこかで食べるものや飲むものを手に入れる」とはできるでしょうか

上官は、顔色も変えずに言った。

「あなた方が買い物に行くようなところはありません」

「でも、市民はどうしているのでしょうか。どこかにお店があるのではないですか」

「市民、ですか。彼らに對して市民といふ呼び方が正しいとは思いませんが、彼らには彼らなりの暮らしがあります。もちろん、こんな街でも商売をしている者がいます」

「では、そこに案内をしてもらえないですか。あるいは場所を教えてくれませんか」

「今も言いましたように、私は彼らを市民だとは思っていません。この街を見てください。日本中、どこかの街もよく似た有様だとは思いますが、彼らは既に暴徒と呼ぶにふさわしいでしょう。たびたびの退避勧告も聞き入れず、街中を略奪しつくした拳銃に殺し合いで始めています。普通の市民は、もう数年前に大阪や名古屋などの都會に避難して行きました。私はあなた方を、そんな連中のなかに連れするわけにはいきません」

上官は自分の思いをぶつけるように話した。

「現在、市の人口は三千程度です。中には、この街を離れたくないところ」と理由に留まつていてる市民も一部にはいますが。あの人のように」

市民という言い方は正しくないといいながら、この男の言葉の端々に、金沢という街を愛している気持ちが表れていた。

生駒は自衛隊員が指し示した方に目を向けた。

ロータリーにジープが入ってきた。この街に来てから、というより、北陸路に入つてからはじめて動いている車を見た。

降り立つたのは、背の曲がった老人だった。

運転手はついているようで、助手席から出てきた。

杖にすがりながら、ゆっくりと駅への階段を登つてくる。

自衛隊員はどうするのかと思えば、表情ひとつ変えない。かといつて、助けに行くわけでもない。

安心してよい相手だが、駅前広場を監視するという任務を一時放棄してまで、対応する相手ではないということだらうか。

老人が階段の半ばまで差し掛かつたとき、自衛隊員が小声で言った。

「北陸県の知事です。金沢市長も兼任しています。この街に人が住んでいる限り、ここを離れるわけにはいかない、とがんばっておられます」

老人がもうすぐそこまで来ていた。

ようやく顔を上げ、微笑んだ。

白髪と瘦身、そしてくたびれたジャンバーと杖のおかげで、この男を老け込ませて見せていたが、陽に焼け、なかなか健康そうだ。やけに白い歯が、薄い唇の間からのぞいていた。

「よつこそ、金沢へ。生駒先生」

「あ、ども」

意表を衝かれた。

「あ、驚かせてしまいましたか」

知事が、手を差し出してきた。

「山中と申します。北陸県の知事をしております。先生がお見えになることは分かつておりましたが、ちょっとした騒動がありまして、お迎えにあがるのが遅くなつてしましました」

知事は、生駒が金沢までの特急券を買ったという連絡があつたのだという。

生駒は知らなかつた。自分がそういう立場に選ばれているという

ことを。

日本の人口が三千万人を切った今、政府がなんらかの基準で選んだ主要人物の動向、つまり生存の有無を掴むために、情報網を張り巡らしていた。

対象者は、政界、官界、経済界、学者、医者、芸術家、各地の古い名家、芸能界、スポーツ界、技術者等、十万人とも、二十万人とも言われている。

生駒は、まさか自分がその中に含まれているとは思ってもみなかつた。

「私も最初びっくりしたものですよ。旅先で、同じようなことを言われたときには」

知事は朗らかに笑つてみせたが、顔には心なしか、皮肉めいたものが浮かんでいた。

政府はあくまで安否確認をしているというが、その対象者にしてみれば、監視されているも同然で、気持ちのいいものではない。

生駒は、自分が醒めてしまつていることに気がついた。

本来なら、怒りが沸いてもよいようなものだつたが、心にそれほど大きなさざなみは立たなかつた。

「こんな寒いところでお話をするのもなんですから、県庁まで、いかがでしょう。ぶしつけな言い方で恐縮ですが、温かいものもござります。もし、よろしければ、お泊りいただきましたら大変光榮です」

生駒にとつて、知事の申し入れは渡りに船だつた。

「県庁にはまだ職員が十数名、頑張ってくれています。市役所の方の建物は放棄しましたが」

熱い飲み物と簡単な食事をともにしながら、知事は金沢の街が、北陸の各地がどんな状況になつてているのかを話してくれた。

生駒たちがこの街に来た本当の目的が観光などであるはずがないことは、知事にもわかっているはずだ。しかし、それに触れることがせず、おつとりした表情を崩さない。

あれこれと話題を変えながら、大阪から来た老建築家を歓待してくれるのだった。

知事の口から、光の柱という言葉が飛び出した。

「あれがあるおかげで、この街は今年のような寒波でもなんとかやつていけます。この県庁舎もすでに暖房機能はほとんど壊れてしまつていますが、なんとか過ごしていけます」

知事は光の柱をこう評して、その存在をありがたがつたが、もともとの役割には触れなかつた。

光の柱プロジェクト。

稼働してからすでに十年以上が経つていたが、日本中にまだ賛否が渦巻いているからだろう。

目の前の建築家がわざわざ金沢まで来たというからには、強い賛同者か、あるいはその反対かである。

そこを測りかねていたからだろう。

だが、どんな取り上げ方でも生駒はうれしかつた。  
待つていた話題だった。

生駒は自分達がこの街に来た目的を話した。

いや、目的そのものではなく、そのプロセスの一部を。

知事は難色を示すかと思ひきや、顔をほほりぱせて即答した。

「おおつ、それはそれは！」

「お力添えをいただけますでしょうか」

「もちろんです。あれは、私共の宝です」

誘致の先頭に立つたのは、この知事自身だという。

観光の目玉になることを期待して。

田論見どおり、数年間はそれなりに効果はあったのだろう。新聞やテレビで大きく取り上げられていたことを、生駒も覚えていた。

「では、『案内しましょ』つ

「ありがとうございます」

生駒は深く頭を下げた。

「ですが、私は明日、朝から敦賀の方へ行かなければいけません。大変申し訳ないのですが……」

明後日なら同行できるといふ。

「いえ、急ぎたいので、『同行は結構です』

生駒は丁重に断つた。

「そうですか……。車も、あれ一台しかないものですから、お使いいただくわけには参りません。ですので、街外れまでお連れしますので、そこから眺めて帰られるのがよろしいのでは、と思います」  
それでは目的は達せない。

「そこから先へは行けないのでですか？」

「いえ、行けないことはありません。ただ、歩いていくのは相当にきついので」

翌朝、金沢の市街地がそろそろ終りつかといあたりまで来たとき、知事はジープを止めた。

街の中心部からどれほども来ていない。低い丘陵の中腹。光の柱はまだかなり先である。

その遠さに、生駒は驕されたようにさえ感じた。

しかし知事は、さっさと車を降り、旅行会社の添乗員よろしく解説しようとする。

「（こ）から（こ）覧になるのがよろしいでしょ」  
舗装道路は行き止まりになつていて、この先は石ころだらけの山道が細々と続いている。

「（こ）はかつて市民公園のあつた場所でしてね。展望台もあります。荒れ放題ですが」

付近は公園といつには似つかわしくなく、木がまばらに生えているだけだ。枯れてしまつた木々も多い。殺風景で荒涼としていた。

そして暑かつた。

とても一月とは思えない気温だった。

赤外線ストーブの前にいるよつて、コートの中にじわりと汗が出ていた。

光の柱。

数多の写真や映像で見ていた通り、光は力強く空に突き刺さつていた。

ただ、光は見えたが、山や木々が視界を遮って、その根元の辺りは見えない。というより、それが近くにあるのか、あるいはどれほど遠くにあるのかさえ、よく分らなかつた。

灰色の空に一筋の白い光。

とにかく、巨大な光であることは分つたが、遠近感がつかめず、生駒はもどかしい思いをした。

「この先へ行つてみます」

「この先は政府の指示によつて、一般人は立ち入り禁止区域になつていています」

知事は血相を変えて引きとめようとしていたが、生駒の信念が変わることを悟ると、親切心は薄れていき、やがて怒りの形相に変わつていつた。

「では、ここから徒步で県庁までお戻りいただくことになりますが、それでもよろしつづけていますか」

「もちろん。お手を煩わせまして、『親切をありがと』『やつこました』

認めるわけにはいかぬ、と知事はしつづく念押しをしたが、やがて諦めて、

「今日中に県庁にお戻りください」と、言い残して去つて行つた。

生駒と綾は、歩き難い山道を登り始めた。

そういうこともあるつかと、それなりの靴で来てはいたが、こんなに暑いとは。

想像をはるかに超えていた。

市街地からさほど距離はないはずだが、真夏かと思えるほどの気温だつた。しかも、暑さは一歩ごとに強くなつていく。

知事は、あれほど強く反対をしていたが、ジープに積んであった非常用の飲み水と食料を持たせてくれた。 からうじて一日分ほどだが、生駒は知事の好意がうれしかった。  
彼の立場上、反対をせざるを得なかつたのだろうが、内心は喜んでいたのかもしれない。

あるいは、すべてのことに諦観を抱いていたのかもしれない。

知事のあの様子では、救援のために自衛隊を遣こすかもしれない。生駒はそれはそれでよいと思った。

それに乘じて、綾だけは無事に帰ることができるかもしれない。これから向かう先が地獄か天国かは分らないが、この暑さである。少なくともまともに帰つてこれる場所でないことだけは確かだつた。

狂氣の行軍は自分ひとりで十分だつた。

この先で、どうしても確かめたいことがあるのは自分なのだから。

生駒と綾は、峠に差し掛かつた。

一步登るごとに、視界が開けてきた。

「あああっ！」

目の前に広がる光景に息を呑んだ。

この世とは思えないほどの、光が満ちていた。  
まぶしさが目を焼いた。

かううじて、まぶたの隙間から見えた光景。

一面の荒地だつた。

全くなにもなかつた。

ただ眼前にあるのは、乾ききつた白い大地だけ。

その数キロメートル先、白い荒野の中にコンクリートの大な建物がこつ然と建っていた。

空気中のあるとあらゆる微粒子が光を帯びているかのように、大気そのものが白く輝く中で、建物はおぼろに浮かんでいた。

光はその建物から、空に向かつて突き立つていた。

直径数十メートルのダイヤモンドが超高温で燃えているかのよくな色を帯びて。

大気を真つ二つに切り裂いている。

これほどまでに強い光を見たことがあつたろうか。

むしろそれはもう光ではなく、極めて高密度で白く硬い金属が、宇宙の果てまで伸びているように見えた。

そしてこの先の荒野には、風さえも吹かないのかと思えるほど、張りつめた大気だけがあつた。

「おじさん」

「うん？」

「わたし、ここから先は行かない。邪魔になると思つから」

「ああ、帰つてくれ」

短い会話。

生駒は、綾が恐れからそう言つだしたのではないことが理解できた。

彼女は、生駒が目的を全うするために、万一足手まといになることを恐れたのだ。

「後ろからついて来ちゃダメだよ」

「はい。ここで見ています」

綾の瞳が潤んでいる。

少女のこの、この瞳に生駒は魅せられた。子供を愛することと

……と。

そんなことをふと思つた。

綾の視線が、光の柱に移つていく。

今から生駒が歩いていく道筋を確かめるように、荒野をなぞつていいく。

「綾ちゃん、今までありがとう。僕と一緒にいてくれて。たいしたことをしてあげられなかつたね」

「やめて、そういうことを言うのは」

綾が目を強く閉じた。

「おじさんはちゃんと無事に帰つてくれる」

「安心して。僕も諦めてないよ」

「おじさんはきっと帰つてくる。それは確かなこと。私には分る」「この光の中だ。僕の姿はすぐに見えなくなるだらう。そうしたらさつとと帰るんだ。とりあえず、県庁まで無事に」

「……」

「いい?」

「はい……。大丈夫……」

「こんなことを言つのはなんだけど、大阪のマンションは綾ちゃんが自由にしていいよ」

「わたしは、大阪で待つてします」

頓珍漢でかみ合わない会話になつた。

「……」  
「うううシーンで、愛する相手にどんな言葉をかけばいいのか、生駒は知らない。

「なんだか、うまく言えないけど……」

綾が生駒に抱きついた。

生駒は思い切り強く抱きしめた。

綾と知り合つたころ、綾の瞳に自分の娘に対するような感情を抱いた記憶……。

そんな自分に驚いたことを、また思い出した。

あのとき、川の字になつて眠つたあのとき、綾の向こうには優がいた。

思えば、あの日。

それが、三人の素敵な暮らしの始まりだったのだ。  
遠い過去のことだつた。

生駒は歩き出した。  
上着を脱ぎ捨てた。

帽子を田深にかぶり、視線を足元に落として。

進むほどに、田の前に巨大な圧を感じた。  
重くて熱い幕を押しながら歩いてゆくよつ。

十分ほども歩いたるうか。

振り返つてみると、田一面の世界の中に、自分の影がぼんやりと立つてゐるだけだつた。

そこにあるはずの綾の姿はおうか、丘陵も空も何もかもが消え失せていた。

歩を進めるたびに、いよいよ気温は高くなつていつた。

遠くから見たときには建物が見えていたが、もうそれもわからな  
い。

白い光そのものの位置もわからなくなつていた。

ただ、巨大な水流のような光の圧力を押し返しながら、前へ前へ  
と進んでいった。

光の粒子が岩や石ころを粉々に碎いたのだろうか。

足元はいつしか、一面の細かい粒子で覆われていた。  
その粒子がパウダー状になり、生駒の歩みはますます遅くなつて  
いった。

生駒は「優に余つ」という言葉を呪文のように繰り返した。  
何度も意識を失いかけては、呪文を大声で唱え、また一步を踏み  
出した。  
すでに足元をえ、白く光つて見えなくなつていた。

「ノブ、馬鹿だなあ」

夢の中で、女の声を聴いた。

「私を信じてつて、書いておいたの。」こんなとこりまで来て  
女の声がまた聞こえた。

生駒の意識はその声を聴いた。  
と同時に、目を開けようとした。

夢ではなく、これが現実だということを確かめようと。  
目の前にいる女性の姿を見ようと。

しかし、やわらかく暖かい指が生駒のまぶたに触れた。

「目は閉じたまま」

声が言った。

「また、会える日があるんだから、こんなとこりまで来なくともよ  
かつたのに」

やさしい聲音だった。

生駒の閉じたまぶたから涙が零れ落ちた。

「コウ

生駒は、女の名を繰り返し呟いた。

「ねえ、ノブ。約束は覚えている?」

「うん。でも体が動かない」

生駒の唇に、優の唇が触れた。  
意識は再び急速に薄れていった。

「一度と来ちやだめよ」

優の声がかるうじて生駒の脳に届いた。

「送つていくな」

それだけ聞くと、生駒の意識は途切れた。

「驚いた！ 朝起きたら、おじさんが寝てるんだもの」

生駒は、まだ夢うつつから抜け出せないでいたが、綾が唇を近づけてきた。

「おねえさんに叱られるけど」

「あっ」

綾との始めてのキス。

「無事生還のお祝い」

柔らかくて温かいキスだった。

「優も焼餅なんて焼かないわ」

「どうして？」

「どうしてって、僕らは家族だから」

「だよね！」

ひと足先に大阪に帰った綾は、生駒の帰りを待ちわびる日々が続くことを覚悟していたと言つ。

「でも、驚いた。わずか一日で帰つてくるとは思つてもみなかつた。案外早く、おねえさんに会つたのね！」

金沢市街のはずれの稜線で綾と別れて、翌々日の朝には生駒は大阪に帰つてきたことになる。

「ユウに会つた……」

「聞かせて！」

あの白い世界で、確かに優の声を聴いた。

彼女の体が触れるのを感じた。

まるで意識はなかつたと同然の状態だったが、あの声は確かに……。

「よかつた……」

綾の目に涙が溢れ出した。

「ああ」

生駒の目的は達成されたのだ。  
あの光の柱に優が住んでいる。  
それを確かめることができた。そして、会うことことができた。

綾の指摘が正しかつたのだ。

「本当によかつた……」

優と会えて。

居場所を知りたい。

会いたい。

ここ数十年、生駒の望みはそれだけだつた。

優を愛している。

今までその気持ちは揺るがなかつたが、身近にいなくなるまで、  
こんなに胸を焦がしたことはなかつた。

生駒は田覓めた後も、金縛りにあつたようにな動くことができなかつた。

綾が体を摩つてくれた。

「へえ！ お姉さんも自由に動き回れるんだ」

生駒はその時のことと綾に話して聞かせた。

「お姉さんがここまで送つてきてくれたんだね

表現が的確ではないことを綾も理解していただろうが、そういう  
より他の言い方がない。

「光の束が物質を輸送できるって聞いたことがあるけど、まさか人  
間を動かすことができるなんて」

綾の手が体を撫でていく。

頭部から胸へ腕へ。

生駒は確かに、送つていくな、という優の声を聞いた。

しかし、その後の記憶はない。もちろん列車に乗つて返つて来た  
といつ実感はまるでない。

「よく分らないけど、自然にここに帰つてきたんだ。といつか、気がついたら、ここで寝ていた」

生駒は綾と話しながら、体力が戻つてきたことを実感していた。  
綾が触れた部分の細胞が生き返るような感触。

腕を少し動かしてみた。何の問題もない。

「無理しないで」

「うん」

両腕を持ち上げてみた。

軽々とした感覚。

「大丈夫？」

それどころか、ここ十年ほど感じたことのないほど、腕の筋肉に力が溢れていることを感じた。

「ちょっとこれは、すごいかも」

「なにが？」

「若返つたかも」

「へえ！ でも、無理しないで」

「じゃ、ちょっと手を貸して」

明らかに生駒の体は若返つていた。

青年の頃に戻つたとは言えないまでも、体中に力がみなぎつているように感じた。

「うーん、昔風の言い方をすれば、転送されたという感じかな」

光の束が人間を移動することができるとしても、大阪の福島のこのマンションに光の束が降り注いだという事実はない。

光が生駒を動かしたのではない。

しかし生駒は現にここにいる。

「やっぱり、本当にお姉さんは神様になつたのかも」

「何はともあれ、よかつた」

うれしさがこみ上りてきた。

あの砂漠で、朦朧とした意識の中ではあれど、確かに優の声を聞けたこと。

優が生きていて、居場所が分かつたこと。

そして何より、世に女神と呼ばれる存在となつた今でも、生駒や綾をあの頃と同じように思つてくれていてることが分かつたこと。

優が置手紙を残してこの部屋を出て行つてから三十年間。

生駒と綾は優が生きているとは信じつつも、どんなに心細く、ある時は自責の念にかられ、またある時は希望を失いかけつつ、すぐるよつな思いで生きてきた。

生駒は普通に仕事をし、綾は受験と就職を乗り越えた。

ありふれた家族として。

ちょっととした行楽に出かけ、学校での出来事を楽しく語らつた。しかし、優がいなくなつてから初めてのこころは、お互いに生きていくことに忙しかつたこともあつて、悲しみも小さくはないはしまでも、絶望にまでは至らなかつた。

ところが、生駒の年齢が七十を超えて、綾が幸せな結婚生活に破れ四十歳になつたころから、悲しみは深みにはまつていつた。

もう、あの声を聞くことはできないのではないか……。

優の髪に、頬に、唇に触ることはできないのではないか。

三人で、他愛のないことを喋りながら楽しい食卓を囲む夜は来ないのではないか。

ああ、優には、もう一度と会えないのではないか……と。

でも、優は生きていた！

そして今、生駒と綾には、優を待つことには違いはないが、これから日々は希望に満ちている。

そう思えてきたのだった。

西暦一千三十七年。第三次世界大戦が始まる前年。世界中にきな臭い臭いが立ち込めていた年のことだった。

生駒の意識は「英知の壺」を離れた。

いつもと同じように、はるかかなたの過去の記憶をなぞつて、希望が再び訪れたあの日々の匂いを嗅ぐと、生きてゆく勇気を奮い立たせた。

優を待つこと、六百年。  
すでに綾はいない。

「優は生きている。いつか会える」  
もはや妄想となつた思いだけを抱きしめて、生駒はまた地上に降り立つた。

## 6 邪な心

「今日はあいつをやる。

「いつは女だ。たぶん。

「いつを殺さねばならない理由はない。本当は誰でもいい。ただ言えることは、誰も俺がやつたとは思わないだろ?」  
「ただ」

特別に仲のいい「仲間」だから。

「あ、行くぞ」

先に立って進み始める。

いつものように、彼女は一拍遅れて飛び立つた。

「今日はさっそく行く?」

電子音声とともに、ゴーグルモニタに緑色の文字が流れた。  
「ちょっと遠くまで行つてみるか

「うん」

「アドホールなんかどうだ?」

「うん。でもあそここの敵は、私にはちょっと手こわいわ。ちゃんと  
守つてよ」

「了解」

アドホールにたむろする連中はキルマシン系で、第4次世界大戦のアフリカ内陸戦に投入されたものだ。その後四百年経つにつれて、自らを強化するすべを会得し、現代の兵士を手こしする。  
パワー、殺傷力、強靭さ、敏捷性と持久力、どれをとってもゾンベキたちと同等の能力を備えている。しかも、組織的な行動ができる

る。つまり臨機応変な思考能力を持つたマシンのひとつである。

アドホールまで飛べば、人間の兵士達の数は極端に少なくなる。こいつをやるには絶好の場所だ。

人目は少ない。

そして、政府の監視も手薄だ。たぶん。

あのエリアでフライングアイを見たことはない。監視衛星はカバーしているだろうが。

サリは従順について来る。

「俺と二人じや、不安か？」

「ううん。ぜーんぜん」

幾重にも積み重なつた瓦礫の山の上を駆けていく。

俺もサリも、同型のブーツを装着している。抵抗ができるだけ小さくするために、地面ぎりぎりの高さで推進する軽戦士用タイプだ。余計なエネルギーを消耗しないように、俺とサリは時速百八十キロ程度を維持しつつ、構築物の残骸を縫うようにして走った。

サリは右利き同士の二人パーティの基本的隊形を守つて、右四十五度後方百メートルの位置にぴったり付けている。敵を容易に挟み撃ちにできる位置取りだ。

目的地までの移動中に必要な情報交換はしておくのが普通だが、サリから話しかけてくることはまずない。

二人で狩に出かけることは度々あるが、いつまでたつても打ち解けない人、という印象の女だ。

生身の体を一部分も見たことはないし、声さえも聞いたこともない。ただ俺は、サリが女だと思っていた。

サリ自身は女であるように振舞つていたし、仲間も女として扱っていた。

しかし、実際のところはまったく不明だ。

よほど親しい仲でない限り、性別を尋ねることはないし、過去を尋ねることもない。

まして本名は。

明日死ぬかもしれない兵士だからではなく、自分が何者であるかを他人に知られることが、誰にとつても非常に大きなリスクだからである。

しかし、俺はどうかしていたのかもしない。

こいつを今日殺すことに、知らず興奮していたのかもしない。タブーを破つた。

「サリ」

「なに?」

「今日、帰つたら食事しない?」

他人を食事に誘う。

それはきわめて稀な出来事である。

現に俺は、過去に誰かと食事を共にした記憶はない。

ヘッドギアを外し、皮膚を見せ、機械を通さない生の声を聞かせる。

とてもできることではない。

口の部分だけ開いたマスクも市販されてはいるが、まともに使える代物ではない。

サリは応えない。

聞こえなかつたはずはない。

どこまでも同じような景色。

延々と続く灰色の汚れた世界が視界を覆っている。有機物が失われた大地は薄いピンク色をした砂塵を絶えず巻き上げている。

俺たちは一定のスピードで走っていた。

アドホールまでの行程の半ばだ。

瓦礫となつた街を過ぎ、原野に入っている。

ところどころに建物の跡やタンクのようなものはある。かつては豊かな農地が広がっていたのかもしれないが、数百年の間放置され、今は荒地にも育つ植物がところどころに貧弱な群落を作っているだけだ。

前方に山並みが見えてきた。

「ゴーグルのモードを変えれば、山並みの細部まで、場合によつては山肌に潜む敵の姿も認めるることはできる。その反面、足元がおぼつかなくなる。

グレードのより高いブーツを装着すればさりに高度を上げることができる、接地タイプのマシンからの攻撃を避けやすくなるが、それではエネルギー消費が大きくなり、結局は搭載するものの重量増加を招く。

「見えてきた。アップルット高原」

俺は、どうでもいいといつぱりに、サリにメッセージを送った。

サリを食事に誘う。

これは事前に考えていたアイデアではある。

サリの心に隙が生まれるのではないか。

隙は生まれないとしても、集中力を欠く一助にはなるのではないか。

そう考えた。

しかし、万一一の種の会話も当局に傍聴されないとすれば、こいつの死因を調査するときに、俺が容疑者として挙げられる可能性があるのではないか。

そう考え直して、俺はこのアイデアを中止したはずだった。

ところが俺は、声を掛けてしまった。

自分の心を分析することはできない。

それほどの知能を持ち合わせてはいない。

計画は若干狂つたかもしないが、万一一、俺の犯行がばれたとしても、主目的が達成されればそれはそれでよい。

「ンドペキと食事か……」

サリから言葉尻の微妙な声が返ってきた。

俺は、どう応えればいいのか一瞬逡巡したが、やつぱり止めだ、とはこえるものではない。

「どう? 別に今日でなくともいいけど」

こう押せば、サリが逃げ帰ることはないだろう。

もし、サリがきびすを返すよつなら、またの機会を待てばいいし、そもそもこの女でなくてもよいのだ。

サリは考へ込んでしまったかのように、またも沈黙が流れた。相変わらず、曇った空に砂塵が舞っていた。

「まずいのがいる」

上空を巨大な影が飛んでいた。

水平距離にして五キロほど先、高度約千五百メートル。

「遠回りするしかないな」

ドラゴンと呼ばれる鳥が弧を描いていた。

めったにお目にかかることはないが、伝説上の竜などではない。

超大型の海鷹だ。

団体がでかい割りに敏捷で、あつという間に背後に回られてしまう。

「この鳥がどうして生まれたのか、知りはしないが厄介な生き物であることに違いはなかった。」

「ディナー、考えとく」

「サリはそんな言葉を送ってきたが、そんなことより、今はぐんぐん距離が縮まりつつある田の前の鳥をどうするかだ。」

俺とサリの二人で対峙するには荷が重い。

飛行系の戦士がいなバーティでは戦術に限界がある。

しかも丘陵部での戦闘は分が悪い。

こいつはむやみに攻撃を仕掛けてくることはないが、虫の居所が悪ければ執拗に追つてくるだろう。倒せたとしてもなんら得るものはないし、ここでエネルギーを消耗したくはない。

俺はすぐさま大きく進路を変えた。

相手からはこちらが見えているだろ。

鳥は旋回をやめ、こちらを追つがごとくにすっと横滑りしたかと思うと、一気に高度を落としてきた。

俺は鳥からできるだけ離れようとスピードを上げた。

鳥は追つてくる気はないようで、再びあつさり高度を上げていくと、元のようにゆっくりとした旋回に戻った。

「あいつは海の魚を食つてゐるらしい。いつたい毎日どれだけ食つているんだろうな」

「サリからは返事がなかつた。」

「ん？」

「ゴーグルモニタの隅つこに先ほどまで点灯していたサリがいなか

つた。

一キロ離れていてもパーティメンバーの位置に小さなマークが点灯するのだが、今は暗い。

後ろから付いてきているものを思っていたサリの姿が消えていた。

「サリ」

呼びかけてみたが応答はない。

俺はすぐさま全速力で引き返し始めた。

ゴーグルはすでに広視界モードに切り替えてある。

しかし、レーダーは以前暗いままだ。半径十キロ以内には兵士は誰もいない。

視界の隅で鳥が急降下するのが見えた。

「なんてことだ！」

反射的に白熱弾を放つたが、鳥の翼をかすめもしないで大気に吸い込まれていった。

連續して撃つた。

しかし鳥の姿は見えなくなつた。

地上に降りたのだ！

「サリ！！」

戦闘中に呼びかけるのはタブーだが、俺は思わず叫んでいた。

「どこにいる！？」

位置ランプが消えているといつことば！…

俺は部隊の本部に緊急連絡を入れながら、鳥が降り立つたと思えるエリアに急行した。

あたりの地形は起伏が激しく、視界が利きにくい。

どこかのくぼ地に倒れたサリを鳥が執拗に攻撃しているのではな

いか。

俺は立ち止まり、地這レーダを流した。  
装置のモニタに巨大な熱感反応がある。  
鳥だ！

その瞬間、鳥が飛び立つた。

数秒後に俺はその地点に到達したが、そこにサリの姿はなかった。

「サリ！..！」

やはり応答はない。

依然としてゴーグルにもレーダーにも何も映らない。

鳥が飛び立つた窪地は、浅い水溜りと少しの草が生えているだけの荒地だった。

身を隠すようなものもない。

サリの姿はあるか、彼女の装備の一部分さえも見つけることはできなかつた。

「まさか」

鳥がサリを連れ去つたのか。

鳥の姿はすでにはない。

すぐさま視界の利く稜線に移動したが、見渡す限り空には一点の染みさえなかつた。

## 7 ワンピースな色

俺はチョットマが街を駆け抜けしていくのを見て、眉をひそめた。

あいつ、また取り乱して。

これ見よがしに武器を携帯したまま、街の中を走るとは。当局の監視カメラはこの様子を間違いなく捉えている。これを見た監視官はどう判断するだろう。

このことだけで、チョットマが要注意人物リストに載ることはまずないとは思うが、万一つてこともある。その場合は、我ら全員が一蓮托生だ。

だいたい、サリが再生しないと分つてからとこりもの、チョットマの行動は異常だ。

元来、天真爛漫をはるかに越えた直情タイプだが……。

チョットマは戦闘系の兵士ではないが、危険察知能力は他を寄せ付けない。

迫り来る危険を察知するといつより、予知能力があるのではない  
かと思えるほどだ。

しかも、危険を察知した後の行動の的確さ。  
彼女のこの能力によって、部隊は大きな損害を、これまで何度も免  
れただろう。

しかも、敏捷性は、もはや常人ではない。

数百メートル四方を瞬時に焼き尽くす散弾ミサイルの十連発を食  
らった後でも、焼け野が原に何食わぬ顔で立つていられるのはチョ  
ットマならばこそできる技である。

しかし、最近のチョットマは、ハエほどの破壊力しか持たない小

さな飛翔系マシンにさえ手こずっているし、移動能力も極端に落ちているようで、街への帰還はいつもしんがりだ。

チョットマが、サリを姉のようにもつていていたことは知っている。そして、サリがチョットマを可愛がっていたことも。

俺は漠然とした不安にかられた。

慌てふためいた様子で周囲を確認することもなく、チョットマがコンフュッションブースに駆け込む様子を見た。

ひとつの浮遊型カメラつまりフライングアイが、チョットマを見つめているかのように、ゆっくりと近づいていくのを見た。

「やあ、ンドペキ、何してる？」

突然後ろから声を掛けられて、俺はびっくりとした。

振り返ると、部隊のメンバーがひとり、ラフな格好で立っていた。

「お、オシャレだな、スジー・ウォン。どこで買った？ その、んー、ワンピースか？」

装甲は身につけていない。スジー・ウォンは、薄い紫色のコスチュームを身につけていた。

確かにワンピースではあるが、胸元には金属製のピカピカする喉当てが付いており、極端に太いベルトがみぞおちあたりから腰までをカバーしている。裾は膝くらいまではゆったりしているものの、その下は急速に細まり、くるぶしへピッタリと包み込まれている。

「いいだろ」

スジー・ウォンはそうこつて笑つたが、ビことなく、不機嫌そうだ。

兵士は、街中においても、素顔はおろか髪の毛一本さえ見せることがないが、長年共にいると、相手の気分は分るようになる。

彼女は、オーデリー。ヘプバーンのようになりキューートな顔をしているが、これが彼女の素顔だとは誰も思っていない。自在に顔の形を変えることのできるマスクを被っていることは間違いない。

兵士のうち、街中では、この手のマスクを使つものが七割、軽装備のヘッダーを被るもののが三割。

俺もマスクを使う。

このマスクの「顔」を一定にすることで、ビルの誰かがわかる。もちろん、常時携帯しているコムログを見さえすれば、今日の前にいるのがスジーウォンだとわかるのだが。

「さつきからそこに突つ立つて、何見てた？」

「ん、なんとなく」

「へンだよ」

「そりか？」

チヨットマを見ていたとは言えない。

スジーウォンは、チヨットマだけでなく、自分も勘ぐられるのはいやだった。

しかし、スジーウォンは、

「チヨットマを見てたんじゃない？」と、からつとした笑い声をたてた。

「ん？」

「まあ、いいよ」

「ん、おまえ、俺を監視してたのか」

「あれ、相変わらず機嫌悪いのね」

「なにか用か」

「ね、ンドペキ、さつきのマスターの話、びつひつへ

スジーウォンはあつさり話題を変えた。

「サリの？ そうだな、ハクシュウはシャイだから」

「だから、あんなに怒りくるってたって？」

「俺達のことを心配していいても、あんなふうにしか言えないんだな。それが彼の持ち味」

「持ち味ねえ。単に、馬鹿じゃない？」

「おい、オマエ」

「だいたいさ、私はサリがどうしたって、どうでもいいことなんだ」

俺も、ある意味では同感だつた。

サリがいなくなることで戦力的にダウンすることは否めないが、だからといって悲しみはない。

人格が消去されたのか、あるいは遠く離れた街で別の人間として再生されているのかは知らないが、いずれにしろ自分達とはもう関係のない人間だ。

「それをさ、チョットマのやつ、深刻に考えやがって、いい迷惑」  
スジーウォンは突つ立つたまま、ンドペキにだけ聞こえる声でメッセージを送つてくる。

生の音声として聞こえてくるのではない。

戦闘時に使うパーティチャンネルではなく、至近距離にいるものだけにしか聞こえない微細な電波を使つていて。いわゆるラバーモードと呼ばれている通信だ。軍の正規品ではないし、むしろ使用を禁止されている装備だが、これを使つていない者に今まで出会つたことがない。

「あいつがあんなんじゃ、まともな狩りもおちおちできない」

「ははん。じゃ、スジーウォンもあの娘に少しほー田置いてるんだな」

「フン、茶化さないで。そりやさ。あいつがいるから、後ろを気にせずに突つ込めるんだから。ちゃんとして欲しいよ。サリがいなくなつて、その役割はチョットマが担わなきゃいけないのにさ」

通常、兵士達の間では、戦闘は狩りと呼ばれる。

兵士が出動する紛争や戦争がなくなつて久しい。

現代の兵士は、街の周辺の安全確保を主任務としているが、その相手は、戦争で破壊しきくなかった戦闘用のマシンや、強大化した生物兵器の成れの果てなどだ。

報酬は政府から出るが、額はわずかだ。それだけではまともな暮らしを嘗めない。

ほとんどの兵士はマシンが体内に有しているI-Cチップや、廃墟に残されたレアメタルを回収しては売り、生計を立てている。幸か不幸か、どの大陸にも戦闘用のマシンはまだまだ数多く闊歩していたし、数百年前の文明が残した都市の廃墟は、ほとんどが手付かずのままといつてもよい状態だ。

「ね、今度のミーティング、出なくちゃいけないかな」

「軍法上、マスターが召集した会議に出ないのは違反行為だ」

「わかつて。あんたが副隊長だつてこともね。でもさ、いまさらサリを探しにいくつてのは、どう考へても無意味じやない？ そのための打ち合わせなんてさ」

サリが忽然と姿を消してから、すでに一週間ほど経つている。

スジー・ウォンは、サリの亡骸が、あるいは何かの遺留品が現場周辺に残されているはずがないというのだ。

普通、人が死ねば、死体はすぐさま回収される。

どういう仕組みが働いているのか、兵士も街の者も誰も知らないが、数時間後には死体が身に着けていたものも含めて跡形もなく消失する。万一、血が流されたとしても、それさえも回収されるのだ。いや、回収されるというのは見かけ上かもしね。そう思つているだけで、実際のところは誰にもわかつていないのだ。

「どこを探せばいいのかも分からないのよ。ンドペキもサリを見失つたエリアを特定できないんでしょ」

「ああ。何度も話したとおりだ」

「計算上は、少なく見積もつても半径4キロ。サリが自分の意思で移動したとすれば、半径二十キロ以上の範囲になるわけだしょ。聞いたんだけど、あのエリアには六ばこがたくさんあるって言ひじやない。中には地下洞窟になつてゐる穴もあるつて。そんなどこか、どう探せばいいのよ」

「洞窟じゃなく、昔の地中基地の跡らしい」

「今は洞窟。じゃなくて、なんなのよ」

「だから、それを明日話し合つ」

「私達のレーダーは地中は探査できないし」  
「はあ、とスジーウォンが大きなため息をついた。

「もし鳥が連れ去つたのなら、お手上げよね」

俺は、スジーウォンの嘆息がよく理解できた。

サリが別の人間として生まれ変わつた可能性について、ハクシュウも俺もあえて触れはしなかつた。しかし、探しにいくという無駄な行為の裏には、サリが我々を捨てたと認めたくはないという気持ちが働いていることは明らかだつたからだ。

それはスジーウォンにも理解できるはずだ。

口にはしないまでも、悔しいのだ。

だから探索という無駄な行動をとるしかない。

執拗に愚痴をこぼすのも、我々自身のやるせなさの表れなのだ。

サリの死は、俺にも解せないことだった。

あの日、俺はサリを殺すつもりだつた。

しかし、俺は殺してはいない。

あの巨大な鳥、つまり海鷺にやられたのだ。

確信はない。

鳥が飛び去った窪地は、もともとの俺達の進行方向ではなかつた。サリがもしあの窪地で鳥に襲われたのだとしたら、なぜあそこまで移動したのだろうか。

進路を変えた俺を見失つたのだろうか。  
サリの能力ではありえないことだが……。

もうひとつ、俺を悩ませていることがあつた。

兵士がパーティーを組んで行動しているときに誰かが死亡すれば、おざなりとはいえ、通常は事情聴取が行われる。

死亡事故の頻度は高くはないが、我々の部隊でも年に一人くらいは亡くなるものだ。その都度、軍の調査部から呼び出しを受ける。緩慢な行動で、同僚を死なせてしまったのではないか、という詰問を受けるのだ。

万一、同僚の窮地を見殺しにしたのなら、厳罰を受けることになる。

今回はわずか一人の軍事行動だ。  
行き先も報告してあつた。

監視衛星の映像は、我々二人が基本隊列を組んでアドホールに向かっていたことを映し出したことだろう。  
なのに、呼び出しが来ない。

それは、サリは戦闘行動で死んだのではない、つまり鳥に殺されたのではない、と当局が判断していることの証ではないのか。  
つまり、サリは死んではないのではないか。

では、なぜサリは姿を消したのか。

俺は、事情聴取がないことを誰にも話していない。  
隊長であるハクシュウには、軍から、あるいは公安当局から、何らかの連絡が入っているのかもしれないが。

スジーウォンは、言いたいことを言つと、手近なコンフェッショ  
ンボックスに入つていつた。

パパかママに、今のような愚痴を聞かせるのだろうか。

パパに面会でもしてみるか……。

今月は規定時間に大幅に届いていない。

あでがわれたパパとママに数日置きに面会することは、兵士であ  
れ商店で働くものであれ、市民全員に課せられた義務である。  
数百年も続いているシステムである。

決められた相手に決められた時間以上の面会をしないと、死亡時  
の再生に多大なペナルティが課せられるということになつてゐる。

パパないしままは、不定期に入れ替わつていく。

ほとんどの場合は約三年で交代となるのだが、半年ほどで別のエ  
ドつまり別の人物が親として紹介されることもある。

俺の今の親はパパだが、本名はおろか職業も、住んでいる場所さ  
えも知らない。

わかつてゐることといえば、微妙に精神が壊れつつある男だとい  
うことだけ。

俺のことにはこれっぽっちも関心はないようで、自分の昔話を繰  
り返し聞かされ続けるだけの面会だ。

几帳面でくそまじめでおせつかいな人間よりよほど付き合いやす  
いが、月に一時間以上と決められた面会時間が苦痛であることに変  
わりはない。

面会時間が規定時間数に足りなかつた場合のペナルティの内容に  
ついて、公表はされていない。

ふと俺は、それでもいいじゃないか、という気になつた。  
どうせ、俺は……。

チョットマがコンフュッションボックスから出てきて、また街を駆けていった。

超高齢化が留まることを知らない日本。少子化も先鋭化し、今や稀子状況と呼ばれている日本……。

生駒が金沢でユウと出会ったその年の暮れ。  
そんな日本に、痛烈な一撃が食らわされた。

朝鮮半島や東シナ海で頻発していた紛争が、ついに日本本土にも飛び火したのだった。

二十一世紀の前半になつても、世界はあいも変わらず力づくの権益確保が横行していた。人類はまったく学習していなかつたのだ。

そしてもうひとつに戦い。

多様な宗教と民族は、グローバル化によって小さくなつた世界では共存できなかつた。

偏狭な考え方から、人類は脱却できなかつたのだ。

テロという新しい形の戦争が一般化した時代でもあつた。

世紀も半ばに差し掛かると、単純な主義主張の違いというつまらない争いは、富める者と貧しいものとの戦いに明確に移り変わつていつた。

あまたの国で、国内紛争が蚊が湧くように勃発し、友好的だった隣国との関係もギクシャクしていた。世界中いたるところで、硝煙の臭いと緊張感が漂い始めていた。

そしてついに、比較的長い間平和を維持し、どんな紛争にも対岸の火事とばかりに無関心を貫いてきた日本にも、直接的な攻撃が仕掛けられたのだった。

日本は、防衛という意味ではあまりに無力だった。

軍備という面でも、社会構造も、サイバー空間においても、そして人々の無力感という意味でも。

### 第三次世界大戦。

かつての大戦のように、限られた国々が霸権を争った戦争ではなく、信ずる神の違いという争いと、貧富の差を根にした戦争は、世界中ありますところなく巻き込んだ。

また、複雑に絡み合った国家レベルの利害が、あるいはグローバルな企業の思惑が、あるいは独裁者の狂気と保身が、戦争の終結を見えないものにしていた。

ほとんどの国で、相手国と戦つと共に、自国内での紛争や狂信者集団の蜂起に手を焼き、あととあらゆる国々が国力を使い果たすまで戦いを続けるを得なかつた。

それはまるで、小さな箱の中に押し込められたコオロギが互いに殺し合うように、正義も目的も、そして未来もない戦だつた。

一時は停戦が保たれている時期もあつた。

しかし、明確な勝者と敗者のない停戦は、長続きはしなかつた。もともと、横暴さだけを国としてきた国々が仕掛けた戦争である。

獲得するもののない停戦は、次回の攻撃のために力を貯めているだけのものでしかなかつた。

いざれ第四次世界大戦に突入することは、誰の目にも明らかだつた。

都合、十八年間にわたる世界大戦。

すべての国々が国力を使い果たして戦争が終結したとき、九十億あつた世界の人口は、十億を下回るまでに減少していた。

もつとも大きな被害を受けたのは、ヨーロッパ諸国とアメリカなど、二十世紀にいわゆる先進国といわれた国々である。日本もその例に漏れず、三千万人を割り込むに至っていた。

失われたのは人の命だけではない。

多くの産業、文化。そして社会構造。これらは消滅してしまったといつてもよいほどの打撃を受けた。もちろん、地球の自然も。

大戦後、人々は復興を諦めた。

地球上のあらゆる社会全体が腐敗した卵のように悪臭を放ち、崩れ去ろうとしていた。

専門家は、地球環境の致命的な汚染と食料生産能力の絶望的な打撃によつて、大規模な飢餓が継続的に発生し、十数年後には世界人口は三億人まで減少するだろうと予測していた。

はたして、専門家の予測をはるかに超えるスピードで世界の人口は減少を続けた。

戦後五年の間に世界人口は三億人、日本の人口も一千万人を切つたのである。

そして残されたもの。

それは、呪うべき技術。

戦闘のためだけに開発された技術。

人が操る武器ではなく、また操縦するものでもない戦闘マシン。安価に製造できるよう、それらのほとんどは自動増殖機能を備え

ていた。

生物兵器もおぞましい進歩を遂げていた。

細菌系の生物兵器はもちろんのこと、哺乳類や爬虫類や鳥類を改造した生物兵器さえ開発されていた。

その兵器は自力でエネルギーを補給し、考え、そして子供を生み、世界中に生息域を広げていった。

平和時には考えもしない愚行が横行していたのである。  
洗脳され、狂った人間が、どの国にもいたのだ。

それが指導者であれ、民衆であれ。

そんな中で、人間を増やす技術、あるいは人間を死なせない技術が発達したのだった。

世界戦争が停戦期にあつた頃、日本政府が国民に向けてひとつ発表をした。

日本の人口ピラミッドは、超高齢化と戦火によつて、まるで土台の折れたシャンペングラスのような形状をしていた。

日本を立て直すため、という名目ではあつたが、悪魔からヒントをもらつたとしかいいうのない提案。

それは「エイジングブロック」という名がつけられたプランだった。

告

日本国の現状では自然な国民数の回復は見込めず、今後十数年のうちに日本人絶滅ともいえる状況となることが明らかである。

政府として、この状況を座視し、滅びを享受することはできない。

今、生きている者の使命として、生きて日本国を立て直すことを

宣言する。

すべての国民には、三つの選択肢が与えられる。

一 知識の存在として、全記憶が保証される「生」。（仮称）記憶の人。

二 健康な体を活かし、社会に貢献する「生」。（仮称）肉体の人。

三 天寿を全うし、日本を後の国民に委ねる。

つまり、政府が示した選択肢は、こうだ。

一（仮称）「記憶の人」は肉体を失う。

ただ今後、一定期間に少しでもアクセスした記憶を、まるでスープーコンピューターに整然と蓄積されたデータのように取り出せるという。

肉体を持たない代わりに、日本中に設置されたライブカメラ自由にアクセスでき、自分専用の飛翔系カメラを与えられるという。また、すべての人との自由な会話が保障される。

二（仮称）「肉体の人」は多くの記憶を失う。

現在の年齢に関わらず、一律にその個人の十八歳時想定の肉体を与えられ、それは定期的に再生される。

どのように生きるかは、個人の自由である。

ただし、肉体再生時に、記憶は使わなかつたものから順に、消去されていく。

一、二、三の選択は、個人の自由である。

ただし、（仮称）「記憶の人」を選択できるものは、三千万円の負担ができる者に限られる。また、（仮称）肉体の人を選択できるものは、一千万円の負担ができる者に限られる。

選択の期限は半年後。

多くの国民は迷った。

費用が払えないものは老いて死ぬことしか選択の余地はなかつたが、三千万円の費用が払えるものは、その選択に悩みに悩んだ。もちろん、費用が払えても死に往く権利はあった。

しかし、ほとんどの者は、目の前に差し出された生きながらえる権利を簡単に放棄できるものではなかつた。

生駒は、このような提案がなされるまでもなく、生きながらえることに執着していた。

三条優に今一度会つ。

その思い自体が、まるで生きているかのように脳に住み着いていた。

生駒にとって、肉体への欲求より、記憶が失せていくことは、死を意味した。

そして、迷うことなく、記憶の存在として生きながらえることを選んだのである。

綾は肉体を選ぶとこう。

聞き耳頭巾の使い手として、記憶や知識という概念だけでは足りないというのだった。そして、生駒の手足となつて、生きていくと、いうのだった。

やがて半年が過ぎ、大勢が判明した。

評論家の予想は大きく外れ、国民の圧倒的多数が肉体を選んだのである。

少しづつ、失われることのない記憶の存在と、不朽の肉体を持つ日本人が生まっていた。

街には若者の姿がチラホラと見られるようになつた。

日本は復興の道を歩き始めたかに見えた。

しかし、日本国は国家戦略は修正を迫られることになつた。

日本のこの動きを、世界は脅威の目で見ていたのである。

しかし、どの国も既に戦争を仕掛ける力はない。

世界の国々がとつた行動は、驚くべきものだつたが、非常にまつとうなものだつたともいえる。

日本の動きに対抗する策として、世界の国々を席卷したアイデアは、世界がひとつになり、人類の危機を手を取り合つて乗り切るといつものだつた。

その提案は、国際連合のような単なる話し合いの場を作り直すと、いうような低レベルのものではなかつた。

ありとあらゆる国をひとつ漏れもなく解体し、地球という単位でひとつにする、という革命的な提案だつたのである。

西暦一千八十二年。

三十年の時を経て、地球といつひとつのが生まれた。

国の名は「ワールド」。

ただ、その間、日本で生まれた記憶の存在と不朽の肉体を持つ「人間」を作り出す技術は、地球上のいたるところで採用されていつた。

地球人類は新しいスタートを切つたともいえる。

未知なる社会に向けて。

地球全体をまとめるひとつの国。そして新しい「人類」。

一方で、新しい人類について、その脅威も語られ始めた。つまり、いわば不死身の体を持つともいえる存在が、地球上のある地点に偏在することの脅威である。

地球人類の社会、つまり「ワールド」は、非常にいびつな状況になりつつあった。

不死身の存在である人間の数が、ある地域にのみ、どんどん増えていくことになったのだ。

彼らは子供を生まない。  
生めなかつたのだ。

非常に高い確率で死産ないし奇形の子を生んだ。生命の誕生という神秘の秘密は、まだ当時の技術の力では、その入り口しか見えていなかつたのである。

ワールドの恒久的平和を守るため、人々は何をしたのか。  
地球統一国家誕生後、半世紀も経たずに、不死身の体を持つ人間は、個人レベルで世界各地に無差別に転住させられたのである。  
民族による、あるいは元の国による、あるいは一族による団結を完全に解体するために。

個人をバラバラにすることによって、不穏の目を摘み取ろうとしたのである。

綾は、アフリカ大陸に新造されたある街に。

生駒のような「記憶の人」は、実質的に定住地は持つ必要がなかつたが、便宜的に定めておく必要はあつた。

その時点ですでに、日本国という地域は存在していなかつた。あれほど隆盛を誇った東京という都市も跡形もなく消え失せてしまつ

ていたし、かつての国土自体もかなりの部分を消失していた。グローバルな存在となつた生駒は、便宜的な居住地を、綾のいるジュラシックビーと定めたのである。

## 9 海は知っている

サリの失踪をさかのぼること、一年。

宇宙船の外壁のかすかな隙間に、わずかコンマ一ミリほどの小さなシリコンカプセルが挟まっていた。

地球の大気圏に突入し、灼熱に晒されても、そのカプセルは燃え尽きることなく宇宙船に貼り付いていた。

太平洋に着水したとき、カプセルは静かに宇宙船を離れた。宇宙船の乗組員もそれを出迎える船の乗組員も、そして上空を飛ぶ監視衛星も、カプセルが静かに海に沈んでいったことに気づくものはいなかつた。

しかし、カプセルが深い海底まで到達することはなかつた。

海水に触れてものの一分もしないうちに、カプセルは変態を開始したのである。

水を含んで、瞬く間に一千倍ほどの大きさまで成長した。

と同時に、尾やヒレが生え、口ができるといった。五分も経つた頃には、既にイルカのような姿になり、自由に泳ぎ始めたのである。

このイルカのような生命体は、迷うことなく一直線に西北に向かつていった。

地球の豊かな海。

数百年経つた今も、変わることはない。

その青さも、塩辛さも。波はうねり、潮流が微生物を押し流していく。それを追う魚や海生哺乳類の群れ。

しかし、それが感傷に浸つたのは、脳の組織が作られたそのとき

だけだった。

高度な思考能力を持つ一体の生命体。

名はある。本人は覚えている。しかし本名は一十一桁の記号と数字を組み合わせたID番号だ。JP01と呼ばれていた。

JP01は海の異変にすぐに気がついた。

かつてのように、海は大小様々な生物で溢れていた。

しかし、JP01には聞こえたのだ。

無数の声が。

声だけではない。

地球上のありとあらゆるシーンの断片が水に溶け込んでいた。はるか昔の活気のあった中国の街並み、農民が手にする米の一粒、シャワーを浴びる時の爽快感に至るまで、地球上の出来事のすべてがここにあった。

遠い過去のことだけではない。

地球という星に生きるものすべてが失われるかとも思われたあの大戦争も、その後の細々とした人類の記憶も。そして自分たちが巡礼の旅に出るため、宇宙空間に飛び立つたときの様子も。

シーンだけではない。

意識、感覚、感情をもつた特定の個人の記憶が漂っていたのだ。

目には見えないが、あたかもスライドショーを見るように、様々なシーンがJP01の脳裏を次々と掠めては消えていった。

断片的な意味のある言葉が聞こえることもあった。

言葉と共に、幸福感が心に広がることもあったし、悲しみが落ちてくこともあった。

過去から現在に至る数百年に渡る何百億人もの人類の、すべての人々の一人ひとりの記憶……。

それらがすべて、海という大きな器に盛られているのだということに気がつくまで、多くの時間は必要ではなかつた。

JP01は、泳ぎ始めて数日後、日本列島が見えてくる頃になつて、巨大な記憶装置としての海の機能の成り立ちを理解し始めた。無限ともいえる膨大な記憶が、微細なデータの断片となつて、海水を組成する粒子の粒に載せられていることに気づいたのだ。

そしてそれらが何らかの法則によつて瞬時に並べ替えることができ、まとまりのある記憶となつて連なつていいくことにも気づいた。

JP01は泳ぐことをやめ、その法則を見つけ、自分のものにしようとした。

そしてついに、かつての自分の意識に触れた。

それは、ある思い出。

今の自分の心の中にあるものではなく、海に溶け込んでいた記憶データとしての思い出の方を。

初めてその思い出をイルカのような肉体が感じ取つたときは、コノマ一秒も留まることなく、電光のように流れ去つていつた。しかし数日後、次に自分の声が聞こえたときには、ほんの少しの間だけその記憶を弄ぶことができた。

そしてまた数日後、自分が始めて人を愛したときの感覚に触れたときには、その感覚を楽しむことができた。

やがて、JP01は海に溶け込んだ自分の記憶を自由に手繕り寄せることができるようになり、他の特定の人物の記憶をも手元に呼び寄せることができるようになった。

宇宙船の着水から約一ヶ月が経過していた。

JP01は急いでいた。

時間がない。

準備がまだ整っていない。

JP01は当初の予定を変更し、回れ右をした。ホーン岬を回り込み、大西洋に出よう。

たが、目指すカリブ海はまだ遠かつた。

早く彼女に会わねば。

そのこと自体は、JP01の計画のほんのスタートラインにすぎない。

休むことも眠ることもせず、全速力で泳ぎ続けた。

エネルギーの摂取は、意識せずともこの肉体自身が海水から自動的に取り込んでくれる。

永い宇宙生活で得た肉体は、空気も光もない空間においてさえ活動できるほど、超高効率のエネルギー・システムを備えている。宇宙線であろうが熱であろうが、光であろうが、皮膚がエネルギーに変えてくれる。

様々なものが溶け込み、プランクトンが豊富な海水なら、そこからエネルギーを取り出すことは容易なことだった。

大気中を飛べば、格段に速く進むことができる。といつより、ほんの数秒で目的地上空まで達することができるだろう。

しかしそれでは、いくら技術革新が停滞している人類とはいえ、

こちらの動きを地球政府に捕捉されてしまう恐れがあった。

しかも、これからやろうとしていることに必要な情報が入手できない。大気中には人々の記憶は浮かんではいなかつたからだ。

泳ぎながら、彼女の次に会うことになる特定人物の記憶を次々に呼び出していった。

まず知らねばならないのは、彼らが今どこで何をしているかだ。そして接触する方法は。

JP01は、たとえば彼らが、今日をどう過ごすかと考へているかも知ることができた。

過去の記憶だけではなく、今を生きている人間の思考も、海に溶け込んでいることを発見していたのだ。

いわば過去の記憶は、現在の思考の連続した蓄積である。海のデータベースの仕組みを理解してしまえば、特定の個人の現時点の思考さえ読み取ることはたやすいことだったのだ。

一方で、一抹の不安を抱かせる情報も入手していた。

海中を疾駆しながら、自分と同じ波長の鼓動を発している生命体の存在を感じしたからだ。

数多くの同胞が、自分と同じように世界中の海に身を潜めているのだ。

そしてこちらの準備が整わぬうちに、別の計画が進み始めていふといふことになる。

地球人類との秘密裏の交渉は、上手く運ばなかつたのだ。

JP01は決断を迫られた。

同胞の計画、あるいは作戦に同調するか否か。

その場合は、自分自身の計画に制約が生まれるだろ。

しかし、より良い結果に導くことも可能になる……。

ただ、そのためには、自分の部下が今回の作戦に参加していることが必須となり、彼らと接触することが条件となる。

逆に、元々の自分の計画を、あくまで一人で実施するべきだらうか。

その達成点は、それだけでも非常に魅力的だが、その後のこととなると……。

仲間を探そう。

プロセスは変更だ。

JP01は、決断した。

やがて、カリブ海のフロリダ半島に近い、とある海岸にたどり着いた。

海面に浮かび、待つた。

彼女が今日、海岸近くで特殊な植物を収穫する予定であることを知っていたのだ。しかも、予定が変わらなければひとりで来るはず。

遠くで砂塵が舞つた。

閃光が光つた。

彼女は兵士ではないが、大陸をひとりで横断できるほどの戦闘能力を備えているはず……。

みるみるうちに近づいてくる。

肉眼でも人の姿が視認できる距離。

彼女はひとりだ。

まるで測つたかのように、ジャストポイントに自分は浮かんでい

る。

幸運だった。

海中に浮かんでいるとはいって、彼女のセンサーはすでにこちらの存在を感じしているだろう。

こちらに 관심を払わなければ、海の中に入つてくるはずだ。

襲うのは簡単だ。

邪魔だと判断すれば、攻撃を仕掛けてくるのは時間の問題だ。

はたして、レーザー砲がこちらを向いた瞬間、閃光が発射された。その刹那、JP01は姿を消していった。

イルカのような肉体は、目に見えない微粒子の粉末となっていた。

レーザー弾が派手な音を立てて、辺りの空氣や岩や海水を切り裂いた。

しかしそのときすでに、霧となつたJP01は一気に五百メートルほど突き進んで、彼女の体を覆つていた。

JP01はたちまちもう一人の自分自身の体内に進入し、彼女がどんな行動を取るより早く、ひとつの作業を終えた。そしてたちまち、再び霧状となつて海に戻つた。

さあ、探そう。仲間を。

翌日も生駒は英知の壺に向かつた。  
楽し�かつた思い出に浸るために。

あれは、生駒が五十歳代の頃だつた。  
優と知り合つてまだ数年。彼女はまだ二十歳代。一人の間で、ようやく「愛」という言葉を使ってもよいといつゝ雰囲気になつていた頃だつた。

一人の少女を挟んで、川の字になつて寝たことがある。  
その夜の思い出。

生駒と優は、京都の山奥の隠れ里で殺人事件に巻き込まれていた。事件の真相を探るため、里の少女、綾と行動を共にすることになる。東京育ちの綾は、父親の都合でその山村に移り住んでいた。  
不思議な少女だつた。村の老婆に見初められ、聞き耳頭巾の使い手としての訓練を受けていたのだ。

小学生とは思えない芯の強さ。  
疑うことを知らないもののみが発散させる純真な喜びを、小さな体全体で表現していた。

ある日、三人は綾の父親の行動を探るため、深夜、山神の社の木に聞き耳頭巾を当てて、その声を聞いた。  
漆黒の闇の中で聞いた意味不明の言葉と、眼前に展開された大人達の不可解な行動。

生駒と優の間に寝そべつた綾が吐露した不安。

小学生らしい言葉と裏腹に、聞き耳頭巾の使い手としての悩み。

けなげな一言一句が、そのかわいい唇から無理なく発せられた  
びに、瞳は不思議な色合いを帯びた。

生駒はその瞳を見つめ続けた。

そこには生駒が写っていた。

そして奥底には、子が親に見せるやるぎない安心と信頼が静かに

横たわっていた。

生駒は、子を持つ親が、わが子を慕う感情とはこういうものか、  
と思ったものだった。

数年後、綾の父親が死んだ。

母親の元には戻りたくないという綾を、生駒が引き取ったのである。

建築家としてそれなりに活動している生駒は、当時、独身の五十  
男。

その事務所兼用の狭いマンションの一室に転がり込んできた、自  
称歌手兼モデルのブータロー三條優は二十代の美女。それに綾を加  
えた三人の暮らし。

周囲にはどう見えようとも、ひとつ典型的な幸せの形だったと思つ。

華々しいことは何ひとつない。

かといって、退屈かといふと、もちろん違つ。

生駒が施主に褒められたといつては喜び、優の歌がテレビで流れ  
たといつてははしゃぎ、綾が結婚したときには生駒は父親として涙  
した。

いやかいといえば、ほとんどの場合、「私達、結婚しないん?」

とこう優の決まり文句から始まり、生駒の「熟考しておく」で終わ

る。

そんな平凡な幸せの日々だった。

三人の暮らしが西暦2010年に始まり、一時は綾が抜けたものの、離婚した綾が戻ってきてから十数年間は続いた。

終幕は2031年。

優が部屋を出ていったのだった。

当時の生駒は、建築家業は続けていたものの、齢七十を回っていた。優は四十年代半ば。綾は三十代半ばの頃である。

探偵から、連絡があつた。

「早いな」

「成果の嬉しい仕事は、さっさと片付けて、次の仕事をしろってことだ」

「そうか……では、聞こう」

「ニコニキーツに住むサリ」という人物は三人いる。一人は政府機関に勤めているアンドロで年齢は二十二。正確にはサリーといふ。もう一人は囚人。服役十年のベテランだ。こちらはマトザリといふ。最後の一人は現役の兵士だ。名前はサリ。誰の情報を聞きたい?「兵士を頼む」

「一人だけでいいのか? 三人分聞いてもお代は一緒だぞ。特にマトで十年の服役ってのは珍しいぞ」

「服役中に兵士として、外に出られるのか? しかも数年間も」

「ありえない」

「では、兵士の方を」

探偵の情報は貧弱だった。  
サリの本名は不明。

性別は女。

年齢は二十五。

「肌の色は白で瞳は濃いブラウン。ま、珍しくもないな。髪は金髪。とこうより白銀に近い。これは珍しい

「フム」

「人種はメルキト。しかし、出生の記録、再生の記録、共にない「ん?」

「普通は直近の再生年月日がわかるんだが、今回はない」

「メルキトで二十五歳なら、普通は数年前に再生されているはずだ。それに、今はどうなつていてる。十日ほど前に死んだのかもしない」「疑問は預けておく。先に進むぞ。両親は不明。一応、ホメムとマトの間に生まれたことになつていてるが、真偽は怪しい。非常に珍しいケースだからな。両親の名は、父親の方がマトでシーザー、母親の方がホメムでアントワネット。これも怪しい。きっとでたらめだろう」「うう」

「それは通称名か?」

「サリ本人の本名がわからないのに、親の方がわかるはずがない」

探偵がサリの住所を読み上げた。

「もちろんエロは不明だ。といつても、わかつていてもこれは教えられないがな」

探偵は、自分の音声は自動監視システムにスルーされるようになつてはいるが、万一つてことがある、と弁解した。

「さて、先の疑問だが。どうぞ」

「まず、再生記録がないとは、どういうことだ?」

「言葉通りだ。記録はない。再生されたことがないという意味ではない」

「調べられなかつた、というべきではないのかな」

「私の調査力は、この業界随一だ」

「それは失礼した。でも、業界なんてものがあるのか？」

「あんたは私の友人であり、顧客だ。しかし、答えられないこともある」

生駒は、ため息が出来になつた。

この探偵は、信頼できる男である。

生駒が友と呼べる数少ない人物でもある。

精神が壊れかけたアギが多い中で、この男は六百年間も調査会社を経営し続けている。

生駒は探偵としてこの男と知り合つたのではなく、この男が書いた数百年前の人類大量地球退避事件を痛烈に批判する論説を読んだことがきっかけだ。

生駒は、その論説に賛同の意見を寄せたのだった。

正義の男であると思っている。

しかし言葉に、妥協や思いやりがなく、刺々しいのだ。

生駒自身もそうだったが、アギとなつて数百年も経つと、元の自分が今までいることが難しくなつてくる。

言葉が刺々しいくらいはいい方だ。

義務として課せられているマトラとの面会を除いて、社会との接点を捨ててしまつたものも多い。

以前は盛んに連絡を取り合つていたものも、多くは消えていった。自らデータを消去してしまつたのか、政府によつて削除されたのかはわからないが、思考のみの存在で生き続けていくことは、思いのほか難しいことだつた。

たとえ聖人君子であろうと、世界的に有名な学者であろうと、稀代のエンターテイナーであろうと。

残つているものも、忍び寄る狂氣に立ち向かわねばならなかつた。

今の自分の思考が、正常な状態で連續したものなのかどうか。それが、わからなくなつていった。

普通なら、昨日の思いは今日に引き継がれ、明日に繋がつしていく。自ら決めた起床時間に、コンピュータのスイッチが入り、思考が始まつて、時間になるとスイッチが切られて思考は中断される。

起床時や就寝時は、人として生きていたときの同じように、ゆっくりと覚醒していき、眠りに落ちるがごとくに思考が薄れしていくようになつてプログラミングされているとはいへ、その決まりきつたパターンに、誰もが正氣を失つていく。

生きた肉体を持つマトにも、同様のことが言えた。

アギほどではないにしろ、彼らには彼らの悩みがあつた。

本人達は悩みだと感じてはいなかかもしれないが、次々と失われていく記憶に、本来の自分を見失つていつたマトをどれほど見てきただろうつか。

綾もそうだった。

彼女がマトとなり、アギとなつた生駒と連絡を取りながら、ユウの手がかりを求めて生きてきたのは、わずか百年。

しかし三度目の再生を機に、綾の記憶から、生駒やユウの部分が消えた。

再生した綾を探し出すことはできたものの、記憶のなくなつた綾にこれまでのいきさつを話しても、彼女が以前の綾に戻ることはなかつた。

そしていつしか、行方がわからなくなつた。

思い出すことを止めた者。  
考えることを諦めた者。

自分が何者かを思い出せなくなつたとき、人は往々にして人間としての尊厳さえも失つていく。

アギにとつてもマトにとつても、よほどの強い生きる目的がなければ、退行はあっても進化はないのだ。

そんな彼らとの面談。

縁もゆかりもない「息子や娘」との面談。

しかし、それは苦痛ではなく、逆説的ではあるが、生駒にとつて自分の正氣を保つ意識付けとなつていた。

生駒にとつての唯一の希望。

生きる目的。

それは、幸せだつたあの三人の暮らしが実現すること。

同じような暮らしが望めないまでも、どうしていたのだと言いつて、笑いあうこと。

記憶をなくした綾はもう無理でも、ユウだけはなんとしてでも探し出して……。

きつと彼女は、どこかで生きているはずだから。

そんなちっぽけな望みだけを頼りに、生きている。

建築家としての夢や、様々な望みはすべて消え去つた。

あの幸せの感情を一瞬でもよいから味わいたい。

ただそれだけを胸に、変わっていく世界を見つめているのだった。

サリという兵士を詳しく知りたいと思つたのも、サリのしぐさがユウのそれに似ているような気がしたから。

ただそれだけのことでも、生駒は望みを繋いだ。

そして、自分の生きる力を振り絞つていた、といつてもよいだ

英知の壇に向かうのも、記憶を味わうためだけでもない。

六百年ほど前、日本の金沢郊外で、光の柱の守人、当時は女神と呼ばれる存在となつたコウに出会つた。

あの頃と今の光の柱は、機能も規模も大きく変わつてゐる。しかも、日本のそれは今はない。

コウが今もどこかの光の柱の守人である確証はまったくなかつたが、もしやひとかけらのヒントが落ちてやいなか、と思つのだつた。

「ホメムとマトの子供といつのは、制度上はあるが、近年そういう例はないのではないか？ いや、数百年ないのではないか？ 聞いたことがない。そもそもマト同士の出産も、最近はほとんどないと聞いている。ホメムとマトとは……」

「さつき、非常に珍しいケースだと説明した

「生きる世界が違ひすぎる。接点がない。生きる目的が違う」

「昔流の言い方をすれば、王女と野獸だな。疑問はそれだけかな？」「待て。アントワネットというホメムのことば、なにかわからないのか？」

「今、地球上にホメムは六十七人しかいないといわれてゐる。一説にはもつと多いといつものもいるが、それは荒野の果てに潜む妙な宗教の狂信者どもを含めてのことだ。逆にもつと少ない、最悪の場合は人類はすでに絶滅しているというものまでいる。私は六十七人が妥当なところだと踏んでゐる。そして私は、その六十七の通称名も本名もそらんじることができる

「で、アントワネットは？」

「いない」

「どうこういとだ

「私が言えるのは、ここまでだ」

「おい、ちょっと待て。これじゃ、サリのことを何も知らないのと同じじゃないか」

「だから最初に、成果の乏しい仕事だといった。後は自分で考えてみることだ」

「あなたが入手しているデータは、データとしては正しいかもしないが、必ずしも真実ばかりを記載してあるわけではない。そう考えてもいいか?」

「では、今回は相当の値引きをして三百四十クロを振り込んでくれ」

参照したデータ、あるいは聞き込みなのかも知れないが、得た情報は間違っている。

探偵は、言外にそういうて通信を切った。

生駒はそのように理解した。

ホメムとは、数百年以上前の世界戦争で生き残った男と女が、肉体的なセックスによって生まれた子供が最初の起源である。

その後も同様に子供を生み、育て、寿命が来ては死んでいくサイクルの中にいる、真正の人類のことである。

その数は減少を続け、今や風前の灯といわれて久しい。

六十七人という数字は、生駒も聞いたことがある。

しかも、いざれも超後期高齢で、人類の滅亡は避けられないというのが通説だ。

だからこそ、アントワネットと記載されたホメムは何らかの方法でマトの男性と接触し、自分の子を宿したというのか。二十五年前とはいっても高齢の女性が?

しかも生殖機能を失いかけたマトと、  
ありえないことではないかもしないが……。

生駒はホメムの姿をもう数十年以上見たことがない。ワールド暦五百年を祝う式典に姿を見せた背の曲がった老夫婦を、モニターで見たのが最後だ。

彼らがどこに住み、どんな暮らしをしているのか、まだどうこう血縁関係にあるのかないのか、なにも知らない。

彼らが「ヒト」としての、自然な血統を守り続けている人々である、ということを想像してみるだけだ。

いや、おかしい。

アントワネットが命を賭してまでマートの子を生んだのなら、その子をメルキトとするはずがない。

制度上はメルキトということになるだらうが、兵士として育てるはずがない。

たしかに現在の兵士は、実質的にメルキトとマートのみに開放されている職業だが、あまりに危険で、言い方は悪いが、しかたなく就く職業である。

戦争のない世界になつてからというもの、めったに襲つてこない散発的な敵の攻撃から街を防衛するのはもっぱらコンピューターとマシンに頼ることになり、彼らの仕事は、いわば有用金属回収業者なのである。

推測の域を出ないが、ホメムであるアントワネットは自分の子を、ホメムとして扱うこともできるのではないか。  
制度上はメルキトだとしても、記録を改竄して……。

おかしい点は他にある。

もし、誰かが何らかの事情でサリの素性を隠そうとしたのなら、

濃い茶色の瞳と白い肌を持つた輝くような金髪女性、というのは変だ。

あの世界戦争で、世界の人口分布は大幅に変わった。

中国、インド、アメリカ、EUという大きな人口を持つ国々の内、アメリカとヨーロッパの人口は壊滅といえるほどの減少を見た。

現在のホメムの祖先は中国人、インド人、ナイジェリア人、ブラジル人が中核をなしている。

わずか六十七人まで減少した人類の中で、ヨーロッパ系の人々が純血として生き残つてきたとすれば、非常に珍しいことになる。そんな目立つ特性を、サリに付与したとは考えにくい。

いや、だからこそ、濃い茶色の瞳と白い肌を持つた白銀のような髪を持つた女性、というのは真実なのだろうか。

もうひとつ可能性。  
クローン。

製造を、そして生存を禁止された生体。

技術は数百年前に確立している。

しかも、クローンなら、生体の性質はいかようにも変えることができる。

肌の色といった表面的なことはもちろん、生体の内部構造も人としての性格も。

そして、本人の意識とクローンの意識を同期させることさえできる。

ただ、極めて高度なアンドロを製造できるようになり、人そのものの再生技術も進んだことから、クローンの需要はなくなつた。

ただ、何らかの目的で、自分のクローンを作るものがいることも事実だ。

彼らは政府の厳しい目をかいくぐってクローンを作るが、アンダーグラウンドや宇宙空間に浮かぶ非公認の研究所に支払う高額な費用と、万一露呈したときに自分の身に及ぶかもしれない危険を考えると、割に合わないといわれている。

サリがクローンである可能性はあるだろうか。

誰のクローンなのだろう。

しかしその誰かは、危険を犯して作ったクローンを兵士にするだろうか。

そうすることによって、何が得られるというのだろう。

生駒は、その可能性は考慮に値しないと思つた。

生駒は、サリがコウであることの可能性を吟味した。

メリキトという情報が正しければ、コウではない。

コウはマトとして扱われるはず。

万一、光の柱の守人、つまり女神という特殊な立場を利用して、肉体再生人間とはならずに六百年を生きてきたとしたなら、ホメムとして扱われるはず……。

だが、地球にはそんな技術はないはず。

神でない限り。

コウの瞳は黒だし、肌の色は白ではない。

髪は黒だ。

ただ、探偵の情報が間違つているなら、話は別だ……。

生駒はむなしさを感じた。

結局、なにもわかつちゃいない……。

しかし、やせつやうとこう娘に会つてみたいといつ氣になつた。

## 11 ガラスの心

ガラスのジェネレーション……。

そう、私は十七のときから、そのまま。  
でも、私の心にあなたが付けた痣は、日毎に大きくなつていぐ。  
少しづつ形を変えながら。

サリとあなた。

心を揺らす、まぶしいシーン。

もう、私を構つてくれないのね。

大丈夫かつて声を掛けてくれても、また行つてしまふのでしょうか。  
あの日、途方にくれた私を、一緒に来るかつて誘つてくれたのに。  
私の入隊をあからさまに嫌がる兵士に向かつて、こいつは森の妖  
精かもしれないぞ、って言つてくれたのに。

そう、私の髪を見たことがあるのは、サリとあなただけ。

私はいつの間に、恋をしたのだろう。  
あれ？ これって恋？

サリとあなた。

チャーミングで聰明で、頼りにされている彼女に比べて、私は無  
邪気なだけのおばかさん。  
でも、うらやましくなんてないわ。  
それは本当。  
だってふたりは、私の大切な人だから。

夕闇が迫つている。

薄い雲が広がる空は茜色。

コンクリートに白い耐候性塗料を塗つただけの街並みも、この時  
間帯だけは少しだけお化粧をする。

いつもと変わらない人並み。

あちこちから聞こえる、呼び込みの声。

食事はどう？　いい席があるよって。

本当はせわしない時間帯のはずなのに、なんとなく、間延びした  
声。

そうだ。

パパが言うように、落着かなくちゃ。

でも、落着くって、どうすればいいんだろ。

こんな気持ちちは、簡単には振り切れないよ。

「チョットマ！」

突然呼び止められて、我に返つて振り向いた。

「そんな格好で、何を急いでいるんだい」

ひょろりと背の高い男が、ジエラートを売つている店の看板の脇  
に立つていた。

グレーのジャケットを着込んで、いかにも勤め人風。

マスクも付けず、浅黒い肌を見せていく。

「その眼鏡で見ると、僕の体はどう見えるんだい？　まさか素っ裸  
にされているんじゃないだろうね」

「えっ」

と、意識した瞬間、自動的にハイスクープのスキャナーのスイッ  
チが入つて、男の表層が消え、肉体が浮びあがつた。

同時に、非武装であることの証拠に、男の肉体の輪郭線が緑色に

光り、全体が白っぽく透けて見えた。

あつ。

私、戦闘服のままだ！

それに、いろんなことを考えながら、街中をわけもなく走ってた！

「そんなことは……」

チョットマは、あわてて裸眼モードに切り替え、なにか用なの、と言おうとした。

しかしその前に、男は既に背を向けて立ち去りはじめていた。

チョットマは心の中で舌打ちをしたものの、気が変わった。

この若くて、ぶしつけな男は、いつも不思議なタイミングで声を掛けてくれる。

街には数十万人が住んでいるはずだから、生活圏が一緒でなければ、そうめったに知っている人には会うことはない。

チョットマが住むハンプット通りは街の南門に近く、隊の仲間とはよく出会う。南門、つまりブルーバード城門の周辺に隊員達は住んでいるから。

サリの住まいも田と鼻の先。

しかし、この男は街の北部に住んでいるし、職場もそうだと言つ。そんなに簡単に、ばつたり出くわすなんてことはないはずなのに。

まるで、私を監視している？ と感じたりもする。

それに、たいしたことを話すわけでもなく、たいてい今は今のよう

に、ひと言ふた言、いいたいことだけ言つてどこかに行ってしまう。

ふん、なんなのさ。

チョットマがこの男に持つている印象は、ただそれだけ。

自分から何かを話したことなど、一度もなかつた。

しかし、チョットマは今回ばかりは聞いてみよつとこいつになつた。

「いっなら、もしかして。

「あつ、ハワード、待つて」  
言つてしまつてから、やつぱりやめたほうがよかつたかも、とい  
う思いがした。  
なにしろこの男、得体が知れない。  
はつきり言つて、嫌いなタイプ。  
粘着質ではないようだが、いつ、態度を豹変させるか、わかつた  
ものじやない。  
そんな気がする。

それに、私の装備。

街の中で武装することは禁じられている。  
今からでも城門近くのロッカーに戻つて着替えた方がいいだらつ  
か、という思いがかすめる。

その規則はそれほど厳格ではない。治安部隊に誰何されることは  
あつても、ペナルティが科されたという話は聞いたことがないが、  
こいつは私服の治安要員かもしれない。

ありえるな。

私の都合の悪いときに限つて、声を掛けてくるよいつな気がする。

「ん？ なに？ 珍しいな」

「何が珍しいの？」

睨みつけてやるが、こいつに私の瞳は見えていない。

じついうとき、装備は便利だ。

「君が、僕と話したいってことだぞ」

「話なんてないよ。少し聞きたいことがあるだけ」

「ふうん」

男は、一、二歩近付いてくると、  
「ここで聞いていいことかい？」

と、声をひそめた。

街の監視システムは、画像だけではなく、音声も聴集しているといつ。

その頻度は高くないとは言われているが、男はそのことを気にしているみたい。

「どういうか、その前に、せめてそのこかついヘッダーは外してくれないかな」

「治安部隊に見咎められるのが怖い？」

「まあね」

不良分子と同等に扱われるかもしれない状況が、いやだとうのだ。

自分の身の安全のために？

それとも私の？

どちらでもいい。

「うん。ここで」

チョットマはこれまで、監視システムの存在をそれほど気にしたことはない。

とはいって、政府に聞かれて困るような話題もなかつたが。  
むしろこの男と、どこかの民間簡易シェルターに移動することの方が、ごめんだ。

「じゃ、どうぞ」

勿体つけた態度で、男が小首をかしげて聞く姿勢になった。ふん。ちょっとばかり背が高いからって。

チョットマに合わせて、長身をかがめている。

チョットマはヘッダーを外し、ついでにハイスコープも外した。インナキャップはもちろん被ったまま。

この男に、素肌を見せることはない。

街の中でいつも身につけているインナキャップは、もう少しオシャレなものだが、今被っているのは戦闘用のキャップ。

高性能のナノカーボン製。

真っ黒な海坊主のような代物で、目的位置には平面的な樹脂が嵌まり、口にはフィルタの付いたシリコン製のマスク。まるで妖怪人間。

少し恥ずかしいが、一応は礼儀を示して。

「知ってるって思つけど、サリの行方を捜してるの。なにか、知らない？」

この男は、サリのことを知つてはいるはず。

以前、サリとこの男が街角で話しているのを見かけたことがある。

「サリ？」

しかし、男はとぼけてみせた。

「誰のことだい？」

チョットマの心に、ずしりと怒りの感情が湧いたが、それをぐいっと押し流すと、穏やかに聞いた。

きっと、目は釣りあがつているだろう。

「私と同じ隊に所属する兵士よ」

「君と同じ隊の？ そんな人は知らないな

じゃ、あれはなんだつたのよ！

あの日、立ち話をしてたじゃない！

しかし、チョットマはそんなことを問い合わせたりはしなかった。

あなたはプレイボーイね、と思つてゐなんて受け取られたら、さつき湧いた怒りを抑えきれなくなるかもしれない。

「もづ、いいわ」

チョットマは背を向けて、ブルーバード城門へ戻り始めた。自分の部屋は、もうすぐ近くだったが、この男に後を付けられる恐れもあると思つたからだ。

それにサリの部屋にも、もう一度寄つてみたいと思つた。やつとも見に行つたが。

うれしいことに、男は後を追つてこよつとなしなかつた。

ああ、無性に、あなたの声が聞きたくなつたよ。

「ねえ、ンドペキ」

チョットマは、スマートモードで声を掛けた。

特定の人物と話すときに使うモードだ。ハイストップを装着しないと使用できないが、兵士は戦場はもちろん街の中でも常時身に着けているものなので、繋がるだろ？。

「どうした

そつけない返事がきた。

声が少しあらついている。

チョットマの心の痣が、また少し大きくなつた。

「人は、部屋の中で死んだら、再生はされる？」

再生はされる。

完ぺきに政府の監視網を逃れることができるなら話は別だが、ど

んなジャンクショップに行つても、それほど高性能な通信遮断素材は売られていない。

どの部屋もどの店も、ハイスペックシェルタなどと銘打つた製品を使用しているが、そんなものは本当は役には立っていないのだ。遮断できるのは、可視光線とその周辺の波長の光、そして数テシベル以上の音、汎用周波数の電波だけなのだ。

現に、兵士が使う通常の通信は、部屋の中によつてが、レストランのプライベートルームにようが、どこにいても繋がる。そんなことへりて、チョットマも知つていた。

ただ、ンドペキ、あなたと話したかつただけ。

「おおお、何を言い出すのかと思つたら、そんなことか」「

ンドペキの声が流れてくる。

鼻にかかる少し高い声。小さな蜂の羽音のような。

夕方になる前のけだるい午後を、もつとやるせない雰囲気に変えるような声。

でも私は、戸棚の奥にしまっておられた甘いリキュールを盗み飲みしたときのような気分になる。

甘くて、怖くて。少し後ろめたいような。

「当たり前じゃないか。俺達は、死ねないんだよ。たとえ、本人が死にたくなつてもね」

ただ、チョットマはンドペキの生の声を聞いたことがない。

聞くのは常に、マイクを通し、一度は電波に乗つた声だ。本当の声は、どんなだろ?。

「自殺したら、恐ろしい刑罰があるんだよね」

チョットマは、雑談でもいいから、ンドペキの声を聞いていたい

と思つた。

「通称、悪魔の海と言われてるな」

「ンドペキが蜂の羽音で解説してくれた。

「氣を失うほど痛みが全身を間断なく襲つてくる。そして、人は我慢できず数秒後に死ぬ。しかし、一秒も待たずに再生され、たちまちまた痛みのために死ぬ」

「うん」

「それが永遠と繰り返される。そんなとんでもない液体が詰まつたタンクに放り込まれるのさ。それにその刑罰は、何十年も続くんだ。終わりのない永遠かもしれないけどね」

なぜ、自殺という行為がそれほど悪なのか、チョットマにはわからなかつた。

「昔前の宗教の影響だといつゝらういのだが、生死さえ自分で決められないよつでは、自由なんて無いのも当然ではないか、と思うのだつた。

「詳しくは知らないさ。その刑罰が實際に行われているのか、いないのか。だれも経験者がいないからね」

「そういうつてンドペキが、久しぶりに笑い声を聞かせてくれた。小さな笑いだつた。

「だからね、チョットマ」

「うん」

「サリが自分の部屋の中で自殺して、再生されないまま死んでいる、なんて想像はしないほうがいいと思つよ」

「そんなことはありえないし、もしさうだとすれば、恐ろしくて悲しい想像をしなくてはいけなくなる、といつのだつた。

「うん」

チョットマはンドペキに、何かを言いたかった。  
でも、それが何なのかがわからなかつた。

「チョットマ」

「はい」

え、なに？

何を話してくれるの？

声を掛けてくれたものの、ンドペキもなかなか次の言葉を発さない。  
もどかしい時間。

今、どこにいるの？ と、聞いてみたい。

もちろん、会いたいから。

でも、チョットマは、自分にそんな勇気がないことを知つてゐる。  
心の癌がまた少し大きくなつた。

チョットマは既に着替え、ゆっくりと通りを歩いていた。  
いつのまにか、サリの部屋の前に來ていた。  
他の部屋と同じよし、窓もないし、明かりが漏れ出るところ構  
造ではない。白い壁に分厚いドアがついているだけ。  
外見からは、在宅の有無は、全くわからない。誰が住んでいるの  
かということさえわからぬのだ。

チョットマは、ンドペキの次の言葉を待ちながら、サリの部屋を  
見つめた。

モニターには、サリがこの部屋に在宅していなことを告げてい  
た。ジーピーハスに反応はないということなのだ。

「サリのこと。おまえが氣落ちしているのは、痛いほどわかるよ

「……」

「でも、わかつてゐると思つたが、僕らは悲しみを共有してこる。

俺も、マスターも。隊のみんなが

「うん」

熱いものが、胸に込み上げてきた。

「じゃ、切るよ。元気出せって言つても、出でこないけどね

「うん、……あ、待つて」

「なに?」

「ねえ、私を……、えっと、これからもよろしくお願ひします」

「なんだ、それ。当たり前じゃないか」

とそのとき、チョットマはサリの部屋を見つめていた。もうひとりの者の存在に気付いた。

あつ、ハワードー

あいつ、何を!

「ンドペキー ちょっと待つてー」

今、サリの部屋の前に、とこう言葉の前に、既に、通信は切れていた。

もう何度も呼びかけても、リキューの後ろめたさは戻つて来てはくれなかつた。

「コーヒーカップを手にオフィスの自席に戻ると、コンピュータが警告ランプを点滅させていた。

自動監視が、マーキングした人物コードを送つてきていた。要注意Eレベルとある。

私が担当している市民数は二十万人。

一人の監視員が特定人物群を担当するのではなく、監視員は重なり合っているので、世界中の誰もが三人のオペレータから監視されている計算になる。

人の目による監視の前にコンピュータによってスクリーニングされるのだが、そのアルゴリズムは十一個用意されている。何らかの言葉が、あるいは行動がコンピュータに引っかかると、監視員に知らされるのだ。

「コンピュータがなぜ要警戒、要注意と判断したのかは、ほとんどの場合、知らされることはないが、今回はその理由が明示された。

「英知の壺 訪問異常」

「誰がどこに何回行こうが、いいじゃない」

と、私は心の中で毒づいてから、その人物IDにアクセスした。

英知の壺で見る夢は、その人自身の過去であることが多い。

監視員も同じものを見ることはできるが、さすがに気が引ける。会話を盗み聞きすることも同じようなものだが、それでも文字としてデータ化していることで、罪の意識は薄まる。

しかも、この人物は要注意Eランクもあるし、緊急度は低い。

まず、その人物が誰かと交わした会話のアーカイブを表示させた。

はいはい。あなたは誰?  
誰とどんなお話をしたの?

それにして、まずいコーヒーね。

本物の「コーヒー豆を挽いて作ったコーヒーの味や香りなど、とつ  
の昔に忘れてしまったが。

私は適当に選んで、ひとつのおーデータを開いた。

アーカイブの中には、兵士との面会時の会話が並んでいた。  
ひとつフレーズが目に飛び込んできた。

私は思わず叫びそうになり、コーヒーカップを取り落としそうになつた。

「かつて愛した二人の女性を、僕はずつと探し続けている」

「ええーっ、ふたりも!」

「ハハ、ひとりは僕の恋人。もうひとりは、なんていうかな、娘といわせてもらつてもいいだらう」

「へえ! なんていう人? 私はすぐに忘れてしまつけど、パパなら何百年経つても覚えているんでしょう」

「もちろん忘れるものか。サンジョウ ゴウ。そして娘は、タチバナ アヤといつ

私はこの部分を何度も何度も、読み返した。

「サンジョウ ゴウ」と「タチバナ アヤ」

橋 紜……、私の名前……、本名をこの男性は……。

何度も読み返した。

ああ、もう間違いない。

これは……。

溢れ出した涙が、頬を伝つていく。

やつと……。

会える……。

おじさん！

私は同僚に見られないように、すばやく涙を拭き取つたが、次から次へとこぼれ落ちる涙をこらえることはできなかつた。

しかし、気を取り直すと、この会話を交わした二人の人物のＩＤを凝視した。

監視室には筆記用具は持ち込めない。

他人のプライバシーを盗み見る場所なのだ。

いかなる理由があつても、データを持ち出すことは許されない。

もちろん、自分のポータブルコンピュータにも、どのような形であれ、記録に残すことはできない。

そんなことをしても、どこで探知されてしまうか分かつたものではない。

おじさん！

今すぐに会いたい！

それが無理なら、今すぐ声を聞きたい！

どこでもいい！

コンフェッショナルボックスに駆け込みたがつたが、センターのそ

れは利用できない。

センターのボックスは、不良な「アギ」を接触監視するため、あるいは巡回検査として使用するものであつて、確実に利用記録が残るからだ。

私は業務時間が終わるのを、今か今かと待つた。

通常業務を何食わぬ顔で処理しながら。

覚えた二つのエロを忘れないように、繰り返し繰り返し反芻しながら。

頭の中を、いろいろな思いが駆け巡った。

出会いの日々。楽しかった日々。失意の日々……。

そして、おじさんと話したことがある。

おじさんはアギ。つまり、記憶のヒト。

私はマト。つまり、肉体のヒト。

私は、本当はアギになりたかった。

その方が私の性格に合っていると思ったから。

でも、私達にはひとつ目の目標があった。そのためには、おじさんと私は別々の道を進んだ方がいい。

そのことを決めるのに、議論の必要はなかった。おじさんがマトになつて、いことはひとつも無かつたから。

おじさんに言われるまでもなく、私はマトになることを選んだ。

しかし、想像していた以上に、マトの、つまり私の記憶力は貧弱だつた。

どんなに頑張つても、思い出せない事柄が多かつた。

というより、思い出さなければならぬことがある、とこつことと自分が思い出せなくなつていった。

そしていつしか、おじさんのことを忘れ去った。

同時に、おじさんと交わした約束も。

そして、私がマトになった理由も。

あの日、あんなことが起こなれば、大切なことを忘れたまま、薄っぺらな思考力の中で小さな暮らしを続けていたのだろう。

夜十八時、仕事帰りの人並みの先頭に立つて、私は何食わぬ顔で街に出た。

トウーアロードのもつとも賑やかな街角で、ボックスに入った。

IDを打ち込む。  
指が震えている。

何を、どう話せばいいのだろう。

あの会話の断片を見つけてから、そればかり考えていたのだが、最初の呼びかけ方が分からなかつた。  
心を決めかねていた。

すでに、五百年ほどの年月が流れている……。

自分の業務として、センターでの空き時間に、現在のおじさんの思考を盗み見ることはできた。

しかし、私はそうはしなかった。

もちろん作業記録が残り、それを見た者に不審を抱かせるかもしれないということもあるが、自分の父親代わりになつてくれた、愛してやまない人のIDをデータベースに打ち込むことはとてもできなかつたのだ。

なにより、おじさんに謝らなければいけない。

どんなことがあっても私が守るといったにもかかわらず、わずか百年も経たぬうちに、その名さえ忘れてしまったのだから。

声が震えた。

「こんにちわ」

そんなありふれた言葉で、私はおじさんに話しかけた。モニターの向こうには、初老の男性が写っていた。頭髪は半ば禿げ上がり、貧相な体格をしている。しかし血色はよさそうで、かすかに微笑んでいた。昔と同じように墨色のTシャツを着ている。

私の容姿は、おじさんが覚えている昔の私のままだらうか。

「はい。こんにちわ」

声が返ってきた。

ああ……、おじさん……。

思わず声になりそうになつたが、私はあくまで他人行儀な挨拶をした。

「お久しぶりです。パパ」

私はコンフュッションボックスの機能と、そこで交わされる会話を監視するコンピュータシステムの癖を熟知している。

どんなアルゴリズムの場合も、会話の最初の段階が重要なのだ。

「ん？ どなただつたかな？」

「以前、街でお会いしたケイケイエムゼットです。お礼を言いたくて」

「ふうん」

「道を教えていただいて、助かりました。ありがとうございました」

冷や汗の出るでまかせだつたが、システムの監視モードがランクダウンするのは、約千文字以降だ。また、無言が続いたり、脈絡のない話もまずい。唐突に地名や人名などの固有名詞が出るのもNGだ。

「昨日、面白いことがありましたね」

「……」

「街角にお花が咲いていたんですよ」

「……」

「珍しいでしょ。あるお店の前で。そのお店の主人が奥様が、育てておられるんでしょうね」

実際、街の中で植物を見かけることはまずない。

私が勤めているセンターなど、政府系の建物の中庭などでは花壇があつたりもするが、個人で花を育てるというようなことはない。切花は生産されているが、一般市民が購入できる金額ではない。

この話題を選んだのは、おじさんが興味を持つてくれるのではないかと期待したからだ。

植物や自然が好きだったから。

木々の話ならなおさら良かつたが、残念ながら、街中に樹木といふものがない。

お入り、と言つてくれなければ、部屋に入るとはできない。モニターの画面を見つめるだけだ。

おじさんはそうは言つてくれない。

肉体のないアギでも、たとえバー・チャルの空間であつても、見ず知らずの人を自室に招じ入れることはまずない。

しかし、かえってそれは良かったかもしない。

なまじ完璧なリアリティを伴つて面会すれば、我慢できずに抱きついてしまうかもしない。

私は自制心を最大限に發揮して、無難な話題が途切れないうに気遣つた。

おじさんも、たあいのない言葉を、もう少し発してくれればいいのだが。

「へえ、どこで？」

地名を口にするしかない。

「アームストロング地区で」

もつと辺鄙な街の、何の変哲もない地区の名前を口にしたかったが、おじさんには私が「ユーロッパ」の街からアクセスしていることが表示されている。嘘の地名を使うわけにはいかない。

「そう。じゃ、僕も見に行つてみようかな」

「ええ」

しかし、花を見たといつのは事実なのだ。コンピュータはスルーするだろつ。

「じゃ、場所を教えますね」

私はできるだけ文字数を使つよつて、たつた一輪の花のありかを説明した。

ついでにそれがどんな花なのかも。

「とにかく、貴方は……」

おじさんの声に私は緊張した。いよいよだ。

懐かしさがこみ上げてきた。

涙声になりそうなのをこらえて、私は答えた。

「おじさん。私、本当ほんじめんなやー……」

生駒はシステムが停止するかと思つて驚いた。  
娘の言葉の意味を理解するのに、数秒はかかった。システムの計算速度からすると、永遠ともいえる時間だ。

自分を「おじさん」と呼ぶ女性は、他にはいない。

まるで、自分の思考プログラムがクラッシュしたのではないかと思えるくらいに、なにも頭に浮かんでこなかった。  
「まさか」という言葉以外に。

モニターに映っているのは、短い髪の若い女性。  
白いワンピースを着て、赤いチェック柄のミニスカートと、膝上までのブーツを履いている。

兵士ではないし、街の娘とも違う。  
政府系の機関に働く者が好んで使う色を身にまとっていた。  
髪は鮮やかな水色だったし、ブーツもその色だ。  
清楚な印象で、理知的もある。

モニタのネーム欄には「バード」という文字が浮かんでいる。  
政府系の機関に勤めている者が、アクセスしてくることはまずない。彼らの中に、マートはほとんどいないからだ。

娘が再び、「おじさん」と呼びかけてきた。

生駒はあわてて部屋のロックを外し、お入りと言つた。  
部屋に入ってきたのは、もしかしてその人ではないかと……。  
どこかに面影があるようだ……。

胸が騒いだ。

何とか平静を保とうと、誰にでも同じ会話を、「好きなどいろへお座り」と声を掛けた。

娘は、まっすぐ歩み寄ってきた。  
チョットマタがいつも座る椅子の背に手を掛けたが、座ろうとはしない。

生駒は混乱していた。思考が安定しない。  
田の前にいる娘は……。

もう数百年間、捜し求めていたアヤではないのか。  
なんとなくではあるが、目元にその人らしさがあるような、と。  
反面、ジョークではないか、罷ではないか、間違いではないか、  
何らかの諜報活動ではないか、という意識も捨てきれないでいた。

いや、やはりアヤだ！

しかし、自分が持っているアヤの顔や姿を意識的に呼び出し、照合した。

体形は、顔立ちは、田は、鼻は、眉は、唇は。  
そして声は。

娘は、椅子の脇に立って、こちらを見ている。

いや、もう見えてはいないだろう。

田には涙が溜まって、今にもこぼれ落ちそうだった。

そして、「聞き耳頭巾のアヤです」と言つたのである。

なんということだらつー。

「アヤちゃんなんのか……」

それだけの言葉を発するのに、生駒は全神経を使った。

重すぎる言葉だった。

言い終わらないうちに、娘は駆け出してきた。

そして、飛びつき、抱きついてきた。

「おじさん、ごめんなさい！」と、叫びながら。

生駒は娘を思い切り抱きしめた。

腕の中の感触を確かめた。

そして、「アヤちゃん！」と繰り返していた。  
もう間違いない！

頬ずりをした。

思わず唇が触れた。

アヤがその唇を押し付けてきた。

涙の味がした。

生駒は、そつとアヤの体を離し、目を覗き込んだ。  
見つめ返してきた目は、彼女が子供だったときのように、かつて  
同じ部屋で寝ていたあの頃のように、無垢な信頼感で満ちていた。

生駒が心を震わせた数々の思い出の日々……。

そして、彼女が大人になつてから見せていた、ひたむきな愛情も、  
瞳の中に溢れていた。

生駒は、もう一度、アヤの頬を、目元を、口元を、髪を撫でた。  
その手にアヤの手が添えられた。

なにも言葉にならなかつた。

どんな言葉も、今は空虚だつた。

言葉だけではない。

頬ずりしようとも、手を握ろうとも、キスしようとも、今の喜び  
は言い表せないだらうし、心の震えを抑えることができなかつた。

「「」めんなさい、私……」

生駒は水色の髪を撫で続けた。

「おじさんを守るなんて、偉そつなことを言つておきながら、忘れて……」

言葉を搾り出した。

「つづん。信じていたから」

「おじさん、私ね……」

両手を頬に添えて、また瞳を覗き込んだ。

「何も説明しなくていいよ。来てくれただけで、心がいつぱいだ」

アヤの目に初めて笑みが浮かんだ。

生駒も微笑んだ。

「話したいこと、聞きたい」とはたくさんあるけど、また来てくれるんだろう」「もちろん。これからはまた、家族のよつ」

生駒はそれからアヤを抱きしめ続けた。

記憶としてしまい込まれた思い出ではなく、今、腕の中にある生身のアヤの感触を確かめ続けた。

アヤもそうだろう。

ひとつ、「会えてよかつた」と言つたきり、きつく抱きついたまま、離れようとしなかった。

アヤとの面会時間は、ちょうど三十分間だった。

それ以上いると、システムに不審がられるかもしれない。

アヤは、必ず明日また来る、と言つた。だから、決して自分のIDにアクセスしてこないで、と。

生駒ももちろん、そんなことをする気はなかつた。

アヤは政府機関に勤めているという。アギの自分がアクセスするところ稀なことをして、彼女の身にいい影響があるはずがない。

家族のよつてに、と言つたアヤの言葉を信じなによつては、親ではない。

アヤは「じゅ、パパ、また来るね」と、決まり文句を口にして出て行った。

アヤが出て行つてからである。  
本当の感激がこみ上げてきたのは。

生駒は、アヤが出て行つた扉を見つめて、立ち尽くした。  
バーチャルとはいえ、肉体を持った状態である。涙が流れている  
ことに気づいた。

涙を流す感触を味わうことが、それが喜びの涙であればなおさら  
のこと、これほど心地よいことだったとは。

あの声、あの表情……。

彼女が中学生だった頃、学校から帰つてきては、今日あつたことを、口の回りが追いつかないほどの勢いで次々に話してくれたあの頃。

叱られて、トイレに籠つて泣いていたあの頃。  
夕飯のカキフライを食べながら、少しづつ悩みを打ち明けてくれた高校生の頃。

バイト仲間とのカラオケが楽しかつたといつては笑い、就職の面接が上手くいかなかつたといつては泣いたあの頃。

そしてなぜか、急によそよしくなつた朝。

酔つた勢いで抱きついても、身をよじつて逃げていったあの夜。

彼女と一緒に過ごした日々。

大阪のマンションの一室での日々が思い出された。

アヤが工作で作った紙粘土の魚はいつまでも洗面台の上に飾られていたし、アヤの作った鉛筆立てを生駒は最後の日まで使い続けていた。

結婚に夢破れ、泣きながら家に帰ってきたとき、アヤは初めて生駒をパパと呼び、また一緒に暮らしていいですか、と聞いたものだ。その幸せは永遠に続くかと思えるほど、平凡でなにげなく、春の日の木漏れ日のように柔らかな暖かさに満ちていた。

そんな暮らしが一変したのは、アヤの離婚が正式に成立した翌年の暮れのことだった。

優がいなくなつたのである。

アヤは自分が帰ってきたことがその原因ではないかと感じ始め、たつた一人となってしまった小さな家族の関係はギクシャクし始めた。

それからの重苦しい二十数年の日々。

そして生駒がアギとなり、アヤがマトとなつてからの百年間。

それはいずれも遠い過去であったが、鮮明な記憶となつて生駒の肉体を駆け巡った。

アヤは、実の子ではない。

昔、生駒と優が半同棲のような状態で大阪に住んでいた頃、京都の山奥の村で知り合つた。

その村で殺人事件が起き、アヤの力を借りて事件の解決に貢献したのだった。

村に住んでいたアヤの父親が亡くなり、村のある家庭の養女となつたのだが、その養母がアヤの将来のことを考えて、生駒の元に預

けたのである。

アヤは、村の長老である大婆が認めた聞き耳頭巾の使い手である。その頭巾をかぶつて心を澄ませば、木々の声や鳥の声の意味を知ることができるのだ。

聞き耳頭巾をめぐつて、アヤと交わした数々の言葉。

中でも、アヤを真ん中にして、優と川の字になつて寝た夜のことは、生駒の生涯にとって、忘れられない思い出となつた。

初めて見た子供の瞳の美しさ。

かけりのない信頼と愛情の色。

ひたむきに生駒の言葉を待つている黒い透明感。

そしてその視線が自分から外れたときの喪失感。

あの夜、生駒は、子供を持つということがこれほどの幸せに満ちたことなのか、と初めて知つたのだった。

ふと生駒は、聞き耳頭巾はまだあるのだろうか、と思つた。

作られてからゆうに千年は経つ。

アヤは、特殊な樹脂製の纖維を編みこんで補強したと言つていたが。もうそれも、数百年前のことだ。

アヤが聞き耳頭巾をかぶつた姿を最後に見たのは、優を訪ねて金沢へ行つたときである。

強烈な光に晒されて真つ白になつた荒野を歩きながら、アヤは風の声を聞こうとしたのか、頭巾をかぶり、とぼとぼと生駒の後ろを歩いていた。

あの日を境に、生駒とアヤの人生は大きく変わつた。

優が生きている、ということがわかつただけでない。

魔法かとも思えるような不思議な力を持ち、光の柱の守護として

働きながら、自分たち一人のことを案じてくれていることがわかつたのだから。

それは生きる希望となつた。

生き続けて優と再会すること。それが生駒の唯一の望みとなつた。

だからこそアヤは、生駒を支え続ける道を選んだのだった。

生駒はアギとなり、決して失われることはない記憶を持つて、優との再会を待つた。

待つだけではなく、あらゆる手を尽くして優の消息を捜し求めた。アヤはマトとなり、実体を伴った行動で生駒の手足となり、世界中の町を歩いた。そして、あらゆる機会を見つけては、聞き耳頭巾をかぶつて、優の噂を拾おうとした。

しかし、アヤの肉体が再生されるたびに、過去の記憶は薄れていった。

そのことに、アヤは悩み続けていた。

やがてアヤは一度目の結婚をし、子をもうけないまま再び別れ、徐々にアヤの心に砂混じりの隙間風が吹くようになつていった。生駒にも、それがわかつた。

そして、ついにその日がやってきた。

毎日、必ずなんらかのアクセスをくれるアヤから、連絡が途絶えたのだった。

アヤのIDは失われていた。

肉体は再生され、IDが変更になつたものと、生駒は考えようとした。

まさかアヤが再生不許可になつたはずがない。  
ましてや自死を選んだはずがないから。

生駒は、優だけではなく、アヤも探し難くなってしまった。  
しかし、その手がかりはあまりにござしかった。

アヤがどこに住み、どんな名前を使い、どんな職業についている  
かも知れないのだ。

しかも、連絡が途絶えたということは、生駒のことも忘れてしま  
つたということなのだ。

優と最後に会つてから六百年。

しかし、優がまだどこかで生きていて、自分のことを想ってくれ  
ている。

その確信になんら根拠はなかつたが、生駒はそう信じ込むことによ  
つて正氣を保ち、日々を送る糧としていたのである。

しかし、アヤの場合は、生死さえわからず、たとえ生きていたと  
しても、彼女にはすでに記憶がない。

アヤを探すことの現実的な難しさ以上に、取り組む意義を見出す  
ことが難しかつたのである。

あれから、五百余年。

生駒は自分の心の中を覗き込んでみた。  
自分はアヤを探し続けていたか、と。

優を信じると同じように、アヤを心底から信じ続けていたかと。

その答えは明白だつた。

生駒は再び、今度は少し味の違う涙を流した。

ただ、生駒は思った。

もう、過去のことはいい。

今まさに、アヤと再会したのだから。

さつきまで、この部屋にいたアヤのことを思わなくては。

彼女にしてやれることは、なんだろう。  
それが、親として、自分の務めなのだから。

「パパ、明後日、ピクニックに行かない？」

「いいね！」

チョットマがいつも椅子に座っていた。

「どこに行くか、聞かないの？」

「どこに行くんだい？」

「街の北東約120キロ、アップラフト高原」

「ホオ」

「実はね」

チョットマが属しているニューキーイ東部方面攻撃隊総出で、サリの行方を捜しにいくのだという。

「会議は揉めたんだけど、隊長が押し切ったのよ」

会議は、街の南東に広がる、かつての大都市の跡で行われた。今は瓦礫に覆われたその都市に、数百年前のアリーナ跡があつた。その残骸は広い空地となつていて、そこが第一部隊の拠点のひとつである。

敵が攻めてきても、広場の中央に陣取れば防戦しやすい。万一切ときは、地下通路を通りて他の地点に移動することもできる。

会議の出席者は、ニューキーイ軍中尉で隊長のハクシュウ、伍長が四人、ンドペキ、スジー・ウォン、コリネウルス、パキトポークの面々。ンドペキは副隊長もある。そして書記として、チョットマが選ばれていた。

「どう揉めたんだい？」

「伍長の人たちは、いまさら現地に行つたところで意味はない、といふのよ」

「うん、もう十日ほど経っているからね」「そうなの」

中でも、スジーウォンが最後まで行くことを嫌がつたといつ。

「どういう人なんだい？」

「どうつて、んー、戦闘派、かな。相手を倒すことに快感を覚えるような人」

「彼女、かな、は隊の中ではどういう役割？」

「個人的な、あるいは数人の戦闘では、もっぱら先陣で敵をバサバサやつつける役。隊の正式な軍事行動でも、スジーウォンの率いる隊は一番危険な位置ね」

東部方面攻撃隊は総勢三十八名。

五つのチームに分かれていて、それぞれに六名から八名の兵士が属しており、それを束ねているのがンドペキラ伍長と呼ばれる四人のリーダーである。隊長であるハクシュウも、自分のチームを持っている。

兵士達の日常は、マシンを倒しレアメタルを回収するため、数人で作戦に出かけることが多い。

これは軍としての正式な行動ではない。あくまで小遣い稼ぎという位置づけだ。一般的に「狩」と呼ばれている。

軍としての正規の行動は、それぞれの部隊によって事情は異なるが、東部方面攻撃隊では十日に寛、全体行動を行う。

上層部である街の軍部からミッションが与えられる事はないので、ハクシュウを筆頭とするミーティングで決められる。

隊列訓練と称しているのは、決められた隊列を守りながら部隊全員で目的地までできるだけ戦闘を回避しながら進軍する行動だ。また、戦闘訓練とは五つのチームに分かれて、戦闘を繰り返しながら、目的地で集合する訓練だ。ほとんどの場合、日帰りの訓練だが、時には数日の遠征も行うという。

「東部方面攻撃隊はもつとも優秀な軍だそうだね」

「そうよ、とチョットマは胸を張った。

「ハクシュウが頑張りやさんなんだよ」

チョットマはそいつて隊長を茶化したつもりだろうが、彼女がハクシュウを尊敬していることは十分に感じられた。

「軍もなかなか辛いね。戦争がないのはいいことだけど、軍としての存在意義を持ち続けるのは難しい」

「戦争の経験なんてないわ。というか、人間相手に戦つたことなんてないし」

「うん、いいことだ。で、街の軍部というのがどういう組織なのか知らないけど、年に一度くらいは顔を合わせるのかい？」

「ぜんぜん。大体、名前さえ知らないし、何人くらいいるのかも知らないわ」

「」の街には攻撃隊は第五部隊まであるけど、合同の演習なんでものもあるのかい？」

「へつ？ なにそれ？ まったくないよ。人によつては、個人的な交流はあるかもしないけど」

「つまり、君の部隊の規律というか、組織としてのまとまりというか、運営そのものは隊長のハクシュウの肩にかかるといふことだ」

「そうこういふこと」

生駒は、そんな話をしながら、チョットマの申し出を受けるかどうか迷っていた。

彼女はピクニックという言い方をしたが、これはまさしく東部方面攻撃隊あげての公式な作戦行動だ。危険を伴う。

万一、生駒の目や耳であるフライングアイが壊されでもしたら、生駒自身にペナルティが科される。

普通の場合なら一ヶ月間の使用禁止処置程度で済むだろうが、軍の行動に便乗していたことが罰にどの程度影響するか、見当もつかなかつた。万一一、厳しい採決がなされたら、思考起動時間の短縮ということもあります。

「そうそう、すごいことになつたんだよ」

チョットマが目を輝かせた。

「会議で？」

「そう。どんなことだと思ひ？」

「見当つかないよ」

「顔を見せ合つたんだ！」

「へえ！ 兵士にしては珍しいね！」

「そうなの。ハクシュウがさ、ヘッダーもスコープもはずしてハクシュウが東部の装備を外し、田や口元や素肌を見せ、伍長連中もそれに倣つたというのだ。

「君は？」

「ンドペキ達がそうしていいるの、私だけがしないってわけにはいかないじゃない」

ハクシュウは伍長達と絆を深めようとしたのだ。

「マスクは？」

「さすがに、それははずさなかつたよ。でも、私の髪、皆に見られちやつたし、声も聞かれちやつた」

「それは良かつた」

「恥ずかしかつた」

チョットマは、緑色で光沢のある髪をロングにしている。かなり田立つ。

「私は、マスクとボディインナーはセパレートタイプのものなんだ。ボディの中に髪を入れちゃうと、頭が動かしにくいから、髪を外に垂らしてこるんだ。だからさ、見られちやつた

「いいじゃないか

「嫌なんだな。この髪の毛。政府の再生装置つて、時々変になっちやうでしょ。あれ何とかならないかな」

再生装置は万全というわけではない。完全再生はできないのだ。似ても似つかぬ者が再生されるところではないが、時どじて、一つ目の人間ができるたりする。

そういう異形のものば、兵士になつて顔を隠す。しかし、次回再生されるときにはまた戻つていたりするのだ。

チョットマは、再生前の自分のことを全く記憶していない。政府の再生装置の不備を嘆いているが、実は前の容姿がどうだつたのか、知らないのだ。

生駒はからかつてやりたくなつたが、チョットマは超の付く直情タイプの娘だ。容姿のことでからかつては、本氣で怒り出すかもしれないなかつた。

「昔はわ、髪は女の命つて言つたものだよ。君ほどすばらしくて珍しい髪は、昔なら高く売れただろうな

「慰めになつてないよ」

と、チョットマは笑つた。

「声も気に入らないんだけど」

チョットマの声は、二つトロリが咲ぶときの声のよつだ。高いけれども、美しい声ではない。

特に、笑い声の甲高さは周りのものがびっくりするほどだ。

「そんなこと、気にしていたのか？」

「気にするよ。だから、余儀では一言も喋らなかつた。喋る必要はなかつたけれどね」

チョットマは女の子なんだ。

生駒はそう思つて、ますますことおしくなつた。

「僕は、今の君をとても好きだけだ」

「パパ、大好き！」

チョットマは、ンドペキやスジーウォンなど、伍長連中のうわさをし始めていたが、反応の薄くなつたことに気づいたようだ。

「ねえ、パパ、行かないの？ 娘が誘つているのに？」

娘にピクニックに誘われて、断る親がどこにいるだらう。

「どうやつて一緒に行くつもりなんだい？」

「簡単よ。私のリュックサックに入つていけばいいよ」

「リュックサックか。そりゃいいね！」

戦闘服に身を包んだチョットマが、リュックサックなんて平和なものを持ち歩いていくはずもないが、その表現がとても気に入つた。

「いいでしょ！ パパは楽チンだよ」

「でも、それじゃ、外が見えないよ」

「へへ、実はね」

軍の行動を他人に話すことはできないから、と前置きをし、作戦行動のあらましに触れないように注意しながら、自分の任務について話してくれた。

チョットマはンドペキのチームに属しているが、今回の行軍では、チョットマは最後尾で補給班兼救急班なのだという。

「だから、荷物を持つて、後ろからついていくだけなの。大八車の上にでも括り付けておいてあげるわ」

「大八車！ どこでそんな言葉を習つたんだい！」

大八車の上に括り付けられて、「オイ、チョットマ！」と、鬼太郎の目玉親父の声音を真似るシーンを想像して、生駒は少しおかしくなつた。

「私も、少しば本を読むよん」

「そりゃ、相当な古典小説だね」  
「ね、そちらへんは任せておいて」

明日の待ち合わせ方法を決めてから、チョットマは部屋を出て行つた。

生駒は、もう迷つてはいなかつた。  
マトと連れ立つて、街の外に出るのは初めての経験だつた。  
それに街から外れてそんな遠方まで出かけていくのも、初めてのことだつた。  
胸をときめかせた。

ハクシュウという人物を生駒は知らない。  
いつものように、簡単にデータを探つた。

生駒がアクセスできる人物データベースは、探偵のものと違つて、役に立たないことが多い。しかし、今回は違つた。

「ハクシュウ、ニューキーツ軍東部方面攻撃隊第一部隊隊長、千九百五十六年生誕、男」という情報が掲載されていた。

同年……。

ハクシュウという通称から想像すると、マトになる前は日本人だつたということだろうか……。

ンドペキ、スジーウォン、コリネウルス、パキトポーク。  
こちらの方は、例によつて何の情報もなかつた。

生駒はハクシュウという人物に興味を持つた。

スジーウォンの言つとおり、いまさら捜索したところでサリの骸はあるか、装備の小さな欠片といった遺留品さえ見つかるはずがない。

死体は身に着けていたいかなるものも含めて、速やかに回収される。

現場からは消えてなくなる。

そういうことになつていた。例外はない。

ハクシュウは、通常の訓練に、サリの捜索という架空の名目を付けただけなのだろう。

あるいは別の目的があるのだろうか。

サリを葬つた原因、ないし犯人を見つけ出す、といつよつな……。

もしそうだとすると、ンドペキの立場は微妙だ。

サリが死んだとき、あるいは行方不明になつたとき、行動を共にしていたのはソンドペキだと聞いている。

そしてチョットマは、ソンドペキのチームに属している……。

そう思い始めると、漠然とした不安はなかなか消えなかつた。

アギの習性である。

思考は常にクリアだ。新たな考えが浮ぶことに、古に思考は薄れていくといふことがない。

思い付きであろうが、熟考の結果であるつが、思考はどんどん溜まつていく。これを中断するには、睡眠、つまりリセットが必要だ。

さて、どうするかな。

生駒は独り言をいいながら、アップライト高原のマップと衛星画像にアクセスした。

ま、楽しまなきやな。

## 15 迷いの色

「展開！」

ハクシュウの号令が下された。

「ラジヤー」

ハクシュウのチームを除き、四つのチームが一斉に散っていく。ンドペキも指定された地点に向かつた。かつて大聖堂があつた広場である。

移動中に、マシンに執拗に追いすがられたが、それを一撃で撃退すると、大聖堂までほんの数分で到着した。

次々に各チームがそれぞれのポイントに到着した旨の連絡が入つてくる。

「進め！」

間をおかず、ハクシュウの命令が下される。

事前に、全兵士にも作戦の目的と行動の詳細について、ハクシュウから説明がなされてあつた。

目標地点は、アップツト高原の最高峰であるザイキル稜から南北に伸びる稜線を十キロメートル越えた地点。そこまでは隊列を維持して進む。その時点で集合するか、そのままの形で引き返すか、ハクシュウから命令が下されることになつていて。

作戦の目的は、サリの何らかの痕跡を探すこと。

敵が襲つても、攻撃は最小限に留め、捜索に重点を置くこと。目標地点到着予定時刻は、一時間五十四分後の午前十時三十三分である。進軍は、平均時速九十キロのやや遅いスピードと指定されていた。

隊列はハクシュウのチームを中心に横一列で、各チームの間隔は五キロメートル。各チームは伍長を先頭に雁行。補給部隊のみが雁行の最後尾、先頭の真後ろにつけている。

ンドペキのチームは順調に突き進んでいた。

他のチームも概ね指定スピードを保つて進んでいる。

わざらわしいマシンがいても、それを刺激しないように各自が避けながら、都市の廃墟を出た。

原野が広がる。

あいにく空はどんよりと曇り、大気に充満する有毒なガス濃度のムラが視認できそうだ。

そして今にも雨が降り出しそうだった。

ンドペキは、少し緊張していた。

ハクシュウの意図が、明確ではなかったからである。

サリの捜索を名目にして隊列訓練にもかかわらず、ハクシュウは完全武装を指示していたのである。

あの日、ンドペキはサリを葬ろうとしていた。

その意思是、当局には感知されていたかもしれない。

しかし、ハクシュウには知りえないはずだ。

当局から、何らかの情報がハクシュウにもたらされたというのだろうか。

完全武装。

そのことが何を意味するのか……。

隊列はハクシュウを中心に、左翼にンドペキ、スジーウォン。右翼にコリネウルス、パキトポーク。

ハクシュウとスジー・ウォンに挟まれつつ疾駆しながら、ンドペキは、まさかという思いを抱いていた。

まもなく川を渡ることになる。

大西洋に注ぐ大河の支流である。

この川は上流で分岐し、本流のシリー川はアップラト高原の向こう側を、東に向かつて流れ下っている。

目の前に迫る川は支流とはいえ、水量は多く、流れも速い。

水面の上を飛行するため濡れることはないが、土や岩盤とは違つて反発係数が異なるため、体のバランスは取りにくい。

「ん！」

ゴーグルに白い点が光つた。

真正面だ。

距離にして八百メートル。

誰かいる！

マシンではない！

白い点が光つたということは人間か、それに近い動物。

一瞬の後に、その者が視認できた。

人間だ！

どこの。

兵士の装束ではないが、武装はしている！

ハクシュウかスジーウォンのチームの誰か。

そんな考えが頭に浮かび、ンドペキは銃を構えた。

人間を撃つことに、一瞬のためらいがあつた。

その刹那、脳に滑り込んできた言葉。

「撃つな」  
女の声だった。

すでにその女は、目の前に迫っていた。  
川の水面の上に、立ち止まっている。  
攻撃の姿勢はとつていない。

ンドペキは減速した。

「ンドペキね」  
そういうが早いか、相手はンドペキに向かつて一歩を踏み出した。  
攻撃される！

そう感じて、ンドペキは銃を放った。  
が、的を外したわけではないのに、相手の姿は消えていた。

「あつ」

相手はンドペキのはるか頭上にあつた。

回りこまれる！

ンドペキは一瞬の内に体勢を立て直し、その場に停止した。

「撃つなと言つた」

また声が聞こえてきた。

相手はまだ頭上にいる。

飛び上がったときの機敏さとは違つて、どことなくふんわりとした動作で、下降してくる。

「約束を守らないとは」  
と、相手は地上に降り立つた。

むつ。

銃を撃つわけにはいかない。

チームのメンバーに当たるかもしれない。真後ろにはチョットマ  
がいるはず。

彼女なら避けることはできるだろうが、万一油断していたら。  
ンドペキはネオ粒子サーベルを抜いて襲い掛かった。

「次に会つたときには」

相手はそう言つと、一瞬の内に遠ざかつていった。

「チョットマ！ 前方注意！ 不審な人間が接近！」  
ンドペキはそう声を掛けた。

しかし、チョットマから返つてきたのは、  
「はい！ というか、もう通り過ぎていきました！」  
というものだった。

猛烈なスピードである。

メンバーの位置確認をすると、チョットマとは二キロほども離れ  
ていた。

瞬時にその距離を移動するとは。  
今まで見た人間の中では、最速である。

「誰ですか？」  
「約束とは？」  
「そういつた声がメンバーから発せられた。  
メンバー間にのみ交信できる回線を使つていて。  
「知らん！ 任務を！ サリを探せ！」  
　　ンドペキはそう応えたものの、動悸は收まりそうになかった。  
　　どんなに激しい戦闘をしていても、動悸を感じることなどなかつ  
た。

人間を撃つ。

そんな行為がいかに難しいことか、ここにことを思い知らされた。

ハクシュウもスジー・ウォンも、所定の距離を保つて進んでいる。特段の異常な行動は見られない。

ンドペキは自分の位置を、元の隊列に戻した。

ハクシュウやスジー・ウォン達は今の事件に気がついているだろうが、何も反応はなかつた。

邪魔なマシンに発砲しただけだと思っているのかもしれない。

あれはなんだつたのだろう。

刺客……。

そういう商売があることは聞いたことはあるが、殺りつと思えばできたはずだ。

武器の殺傷能力はともかく、行動スピードといつ点では、何枚も上手だつたのだから。

約束とは。

まったく理解ができなかつた。

サリの手がかりはまったくないまま、アップリット高原の稜線を越えた。

今日は、ドラゴンの姿もない。

稜線を越えると大気は幾分澄み、平原を見渡すことができた。

「停止！」

ハクシュウの命令が発せられた。

「ケーオーフォーメーション！」

「戦闘準備！」

立て続けにハクシュウの緊迫した声が聞こえた。

ケーオーフォーメーションとは、強靭な敵に集団で近接して立ち向かうときや、大量の敵に囲まれたときに防戦する隊列だ。ハクシュウは、全軍が自分の下に集まり、戦闘態勢をとるよう指示しているのだ。

いよいよか、という考え方がンドペキの頭をよぎったが、現時点ではハクシュウの命令に従わざるを得ない。

ハクシュウが立つ地点に向かつて突進していった。

俺は仲間を撃つのか。

攻撃されたら、やむをえないか……。

全員を敵に回したら勝ち目はない。

何人かは、傍観の態度を取るかもしれないが。

そんな思いを煮えださせながら。

ンドペキはチームのメンバーの動きを確認した。

それぞれがハクシュウの元に向かつて最速で移動している。

補給班のチョットマだけは、スピードを落とし、ハクシュウの後方に移動を始めている。よく訓練された軍の行動として申し分ないし、どこにも不審な動きはないように感じた。

「攻撃目標、北北東十三度、距離九キロ。しかし、命令あるまで発砲厳禁！」

ハクシュウの命令が飛び込んできた。

すでにフォーメーションは整っている。

ハクシュウを中心にして集まつた兵達は、互いに五十メートルほどの距離を保つて停止していた。それぞれの銃を構えて、てんでばらばらに駒をばら撒いたようなフォーメーションだった

が、それぞれのチーム内の役割分担に従つて、位置取りがされている。

誰も口を開くものはいなかつた。

ンドペキは、仲間の兵士達の動きに注意しながら、ハクシュウが攻撃目標といった地点に目を凝らした。

前方五キロほどに、シリ－川が右手に向かつて流れている。その手前は、ほぼ原野と言つてよい。

シリ－川の対岸は見渡すかぎり森林地帯が広がつていた。建物や塔、あるいは街の跡らしきものは見当たらない。人工物はないように見えた。

昔の人が眺め渡せば雄大な景色だというだろうが、戦闘態勢に入っているンドペキには、単調な光景だとしか感じなかつた。

敵までの距離が九キロというのは、通常の戦闘では考えられない。大量破壊兵器をむやみにぶつ放すような大昔の非効率な戦闘ではなく、近世では戦闘員のみを標的にしたより精度の高い武器を使って、近接して戦うようになつていたからだ。

攻撃に距離があるとしても、目標が確実に視認できる三キロがせいぜいで、通常は百メートル以下である。

あの森の中に何がいるというのだろうか。

ンドペキはいぶかしんだが、ゴーグルのモードを切り替えていつて驚愕した。

何らかの生物がいる！

マシンの類ではない。

それも大量に！

集団で！

千体以上はいるのではないか！

これまで戦闘用に開発された生物とも幾度となく戦つてきたが、彼らが集団でいる光景は眼にしたことがなかった。  
群れていたとしても、それは数頭の群れだ。  
これほどのコロニーは見たことがなかった。  
そもそも人間を含め、地球上にはほとんど動物といつものは存在しなくなっていたのだから。

「繁殖地ですか」

久しぶりにハクシュウ以外の声が聞こえた。  
コリネルスだつた。

だれも応えない。

ジリジリする時間が過ぎていった。

木々の間から垣間見える生物は、人間のよう二足歩行をしていた。

人間よりも一回り大きく、一様に黒い肌をしている。脚は短いが腕は異様に長い。

髪はなく、衣服はまとっていない。

こちらに関心を示すものもいるが、戦闘の気配はない。

それぞれが淡々と何らかの作業をしていくようだ。

ンドペキはすでに、ハクシュウが自分を攻撃することはないと確信していた。

もし攻撃するつもりなら、旗色が明らかでない大量の生物がいる前で、派手なまねをするはずがないからだ。

彼らが戦闘用の人工生物だつたら、高みの見物をするはずがない。

あの数では、こちらが大混乱するだろ？ 全員無事に街まで帰れる可能性はないに等しい。

今日の作戦の本当の目的は、この口ロニーを観察する、あるいは反応を見ることだったのではないか、という思いが頭をよぎった。だからこそ、完全武装だったし、稜線を越えてからの行動は未定だったのだ。

軍の中枢からの指令は、ハクシュウにだけ伝えられる。その指令に添つた作戦だったのではないか。

ンドペキは、口ロニーを凝視しながら、そんなことを思った。

と、森林を出でくるものがいた。

やはり人間か。

姿は異様だが、背筋を伸ばし、一足歩行だ。

ヒトとしかいいようがない。

ゆづくりと川原を歩いてくる。

胸の辺りが膨らんでいる。

女か……。

ん！

女は、そのまま水面に歩みを進めてくる。  
まるで地面を歩くように。

彼女が歩く部分だけ、水面にガラスを置いたようだ。

部隊は静まり返っていた。

ハクシュウからも何の命令もない。

女はシリーズ川の中央部で立ち止まつた。

そしてはつきりとした言葉で、短いメッセージを送つてきた。

「私はJPOーと申します。私達はあなた方と話をしたいと思いま  
す。ニューキーツの街のレイチエル氏とンドペキ氏を代表として指  
名させていただきます。明後日の正午に、ここでお待ちしています  
そういうが早いが、女の姿は消えた。

「退却！ 梁線を越えた時点で、ケーオーフォーメーション解除。  
ビー隊列に戻る。目標地點、アリーナ！」

ハクシュウの命令が発せられた。

俺が代表？

ンドペキはわけがわからなかつた。

彼らは何者だ？

レイチエルとはだれだ？

「今日見聞きしたことは、全員、口外無用だ。お付きの人も頼みま  
すよ」

稜線を越えた時点で、ハクシュウが言つた。

「ンドペキ。いろいろと聞きたいことがある」

問い合わせられたが、わからない、としか答えようがなかつた。

「ねえ、パパ、あれ、なんだつたとゆうつ？」

「川向こうの軍勢のことかい？」

「うん、軍勢というほど戦闘的じやなかつたけどね」  
サリの搜索作戦がアリーナで解散となつてから、チョットマは街には帰らず、もう少しピクニックしよう、と誘ってくれたのだ。  
もとより、生駒に異存はない。

アリーナからさほど遠くないとひし、かつての港があった。  
岸壁は崩れ去り、波がガラクタとなつたクレーンや建物の足元を  
自由に洗つている。

海は青く、以前のような悪臭を放つてもいない。

沖合の白い波が繋がつては消え、潮の香りが満ちていた。

「こがあたりは、あまり強こマシンはないの  
リラックスして、チョットマは巨大なコンクリートの塊に腰をか  
けている。

生駒は、その肩にとまつてはいる。もちひん、フライングアイの姿  
で。

フライングアイは、視覚と聴覚を備えているだけではない。嗅覚  
もあるし、気温もわかる。重力だつて感じじことができるのだ。  
電波的な会話を楽しむことができるし、音声でも話ができる。ス  
ピーカを通してだが。

そして、きわめて小さこものだが、手や足も備えているのだ。

そなあなフライングアイが、チョットマの肩に乗つかつて話をす  
る。

まさしく、鬼太郎の田玉親父だ。

「高度に人間的な生物、としか言いようがないね」

「人間じやない、つてこと？」

「難しいね、その質問は」

「でも、人の言葉を話していたよ」

「まあ、たぶん、人間だな」

「へえ！ パパはああいう人間を知っているの？」

「いや、初めて目にした。ただ……」

思い当たることはあった。

「ただ？」

「いや……、昔読んだSF小説のシーンを思い出しただけ」

今から四百年ほど前のことになる。

四度目の世界大戦を経て、人類はまさに滅びようとしていた。  
二千年以上も続いていた風習、つまり各国が自国の領土内に責任を持つ制度は破棄され、すでにワールドと称する世界政府が樹立していたが、世界規模で進む人類の衰退を押しとどめることはできなかつた。

地上はもちろん、大気も海も汚染がますます深刻化し、エネルギー生産はもちろん食料さえも逼迫していた。

加えて、あらゆる地域で疫病が蔓延し、人口の急激な減少はどのような手段を持つとしても食い止めるることはできなかつたのである。

社会がすさまじい一方、神を信じるものたちは、その信仰心を先鋭化させていた。

存在しようがしまいが、神というものにすがるしか、救いはなか

つたのである。

アメリカ大陸の荒野で生まれたある教団の教えが、瞬く間に世界中に広まつたのはそんな状況の中だつた。

「神の国が宇宙のどこにある」

「宇宙は神が作られ給うたもうたものである」

「救いは神の国にこそある」

ありもしないそんな考えが、いつしか伝説となり、あまねく宗教の壁を超えていった。

伝説は、あるものにとつては真実となり、あるものにとつては都合のいい教義となつた。ただ、世界の宗教がひとつになる初めての萌芽ともなつたのである。

そして、ついに超党派宗教ともいえる「神の国巡礼教団」が生まれた。

しかも、瞬く間に世界政府と肩を並べるほどの力を持つに至つたのである。

もちろん、教団が巨大化する過程では、世界各地で紛争が起きたし、多くの世界企業が犠牲になつた。

教団に取り込まれ、資金製造の役割を担わされたのだ。

一連のテロ事件も教団の罷だといわれた。つまり、各地の民族的な確執を助長し、人々を不安に落としいれ、理性的に考える力を奪うために。

そして紛争に乗じて、資金を得、甘言によつて、脅迫によつて、人々を入信させていったのである。

その頃すでに、すべてのマトは、故国ではない世界中の街に散らばつていたことも、教団拡大の速度を速めたといえる。

地縁や血縁が究極といえるまでに薄くなり、結び付きを失つた人

々は、何かに属することによって得られる心の安定を求めていたからである。

信者は四百万人とも六百万人とも言っていた。当時の地球人口は一千五百万。

人類の三人にひとりは入信していったことになる。

彼らは、その数、資金力、英知、武力、いずれにおいても当時の地球上のあらゆる組織、団体の中で最大かつ最強の集団であったといえる。

地球周回軌道上に「神の意思」と呼ぶ巨大な都市を百体以上も築き、生産拠点はもちろんのこと、独自の流通網と移動手段を持ち、莫大な物資を蓄えるに至っていた。

ワールド政府と神の国巡礼教団。

地球上にはふたつの政府がある。

まさに、そんな状況であった。

ただ、ワールド政府は有効な手を打てないまま、座視するしかなかつた。

あくまで自分たちが正統な政府であるという面子にこだわり続けていたからである。

そんなとき、教団が数百艘の宇宙巡航船で構成された巨大な船団を建造していることが明らかとなつた。

戦争……。

人々は悲嘆にくれた。

今この時点で地球全体、及び宇宙空間に散らばる人類基地や衛星を巻き込む戦争が起きれば、人類は破滅する。それは火を見るより明らかだつた。

ようやく、ワールドは動き始めた。

ワールド大統領と教団最高指導者である教皇の初めての会談が行われたのは、光の柱に支えられた英知の壇のひとつ、ピースである。後の世にいう「ピース会談」。

仲介したのは、ひとりの女性だといわれている。類稀なる美貌と、人の能力を超越した魔力を持つといわれたが、その実像は明らかにされないままだった。

しかし、地球人類は救われた。

教団は地球の霸権を望んではいなかつたのである。

あくまで、宇宙の神の国を目指すことに、すべての気持ちを、すべての力を注いでいたのだ。

公式にはそのように伝えられている。

そして現実に、ピース会談から十数年後、教団は大船団をなして宇宙に旅立つていったのである。

宇宙の中心、あるいは神の住む星を目指して。

彼らの行き先は教皇のみが知るとされていた。

しかし教団内部では、もちろん共に宇宙巡航船の乗り込んだ者たちの中に、それがあてどもない旅だと考えていたものは皆無であろう。

ワールド政府は、その無謀ともいえる巡礼の旅を止めようとはしなかつた。

人間社会の秩序を保つ上で、これほど効き目のある薬はなかつたからである。

膾が自ら出て行つてくれるのだから。

実は、船団には狂信者だけでなく、いわゆる大量の犯罪者も紛れ込んでいたと言われている。

ワールド政府が、手に負えない犯罪者及び異端とされる科学者や

野望が大きすぎる実業家などを、教団に押し付けたのだと言われるようになるのは、巡礼の旅立ち後、十年以上が経つてからのことである。

ピース会談で何が話し合われたのか、すべてを知る者は既にない。大統領は、その本当の目的と成果を明らかにすることなく、帰らぬ人となつたからである。

彼はホメムだつた。

いざれにしろ、地球上に残る人類の多くは、彼らが一団となつて地球を見捨て、宇宙に飛び出していくことを、歓迎の面持ちで見送つたのである。

信者でない者にとって、巡礼の旅は死を意味したが、宇宙空間に飛び出していった者にとっては、晴れがましい旅の始まりだつた。ただ、神の国巡礼教団の入信者すべてが旅立つたわけではない。選ばれた者は約六万人。

選考基準は明らかにされていないが、信仰心が厚く、訓練に耐え、体力知力ともに優れた者の中から選ばれたことは想像の難くない。金の力も、という向きもあつたが、ワールドの人々にとって、そんなことはどうでもよいことだった。

船団は、太陽系の辺境、カイバーベルトの端部に達するまでに約1年間を要したが、太陽の引力から開放されるにしたがつて、みるみるスピードを上げた。

やがて交信は途絶えた。

それでも半年ほどは、太陽系各地に浮かぶ衛星から船団を観測できていたが、あるときを境に、その姿はふつりと消えた。

多くの中心的人物が宇宙の闇に消え、資金も枯渇し、もぬけの殻となつた教団の組織は、ものの十年も経たずに崩壊した。

宇宙の巨大な粗大ゴミと化した「神の意思」は、地球人のための生産農場やエネルギー基地として生まれ変わつた。

残された信者は、処刑された数百名を除いて、あるものは照れ笑いを浮かべ、あるものは人目を避けるように、あるものは呆けたような顔をして、元の人類社会、つまりワールドに紛れ込んでいったのである。

船団との交信が途絶えてからささやかれた様々な噂。

「仲介者となつた女性は教皇の愛人である」

「いや、大統領側のスパイである」

「ワールド政府はそのスパイを船団に乗り込ませている」

「時限爆弾を仕掛けている」

「地球人全体が移住できる星を探す密約もある」

そんな話は、かなり姿を変えながら、その後百年もの間、語り継がれることになる。

船団が辿つたかもしれない運命を題材にした数々の物語が生まれた。

それらの物語では、巡礼団が生き延びていることになつていたが、それは完全なファイクションとして物語られた。

宇宙船の欠片ひとつも残さず消えうせ、ましてや彼らの肉体も精神も、極寒の宇宙の闇の中に消え失せたのだから。

そしてさらに長い年月が流れ去り、神の国巡礼教団の行方を想像する者さえいなくなつた。

船団が出立した夜の華々しさも記憶から消え失せ、その記録の存

在さえも忘れ去られたのだった。

生駒が思い出したのは、そんな物語のひとつである。ただ、それをチョットマに話そつとはしなかった。

「どんなシーン？」

「んー、あれ、宇宙空間で、えっと」

チョットマははじめたように、フワッフワッと溜息をつくと、バツグバツ

クからドリンクを取り出した。

「もう！ 知恵の人も、データが多くすぎて整理できていないのね」「ハハ、まあね。最近、過去と現在が、ときとして混在してしまつ」生駒は、自分が思い出したことをチョットマに話して、それが噂として広まってしまうことを恐れたのだった。

明後日、あの川原で会談がもたれることになれば、おのずと明らかになるだらう。

それを前に、あらぬ噂を広げて人々に予断を『』える必要はない。

「それもさうだけど、ンドペキってのは君の上回だろ」「生駒は話題を修正した。

「うん。彼が代表に指名されたってのも、変よね」「どんな人なんだい？」

「どうって、ハクシユウと同じくらう、私は信頼している

「ほほ」

「でも、特別な任務についているとか、街の政府の役職についているとか、そんなことは聞いたことがない。普通の兵士のはず」「彼自身も、さっぱりわけがわからない、と言つてたね」「うん」

「チョットマは、今度は食べるものを取り出した。

「あ、フライングアイは食べられないわね。残念だけど、我慢してね」

小わなサンディッシュ状のものだ。しかしドライなもののみで、チョットマの口の中からサクリとこう音がした。

「うう。

今日はピクニック。

チョットマは鼻歌まで歌つていい。

幸せの時間だ。

「ん？ そういうや、パパは何を食べているの？ というか、飲んだり食べたりするの？」

チョットマが振り返った。

「ハハ」

「あつ、私が何も知らないって、笑つた！ 失礼ね！ 気にしてあげてること」

「ハハハ！ 気遣つてくれてありがとう。アギも、ものを食べたり

飲んだりするよ。栄養を補給するといつ意味じゃなくて、人間らしく生きていくためにね

「へえ！ そななんだ！ じゃ、やっぱり私、食べるの、やめる

「どうして？」

「だつて、今は食べられないパパがかわいそつだもん」

「いいよ、いいよ。食べて、食べて」

「つうん、やめとく。それより、いじごとを思つについたわ。ちよつと待つて」

生駒は、この娘と知り合えてよかつた、としみじみ思う。

潮の香りを楽しんだ。

瓦礫に埋もれ、遺跡となつつあるこんな場所でも、海は青い。

「んー、今、ンドペキはまだアリーナの近くにいるみたい。彼はたいていはGPSをオンにしていて、自分の居場所を仲間には知らせているの」

「へえ、そう。街の政府に引っ張り出されて、詰問されているわけでもないんだ」

「聞いてみるわ」

人類の数が大きく減少し、地球上での生産が極少化したことが、海の自然には好影響を及ぼしている。

かつては、宇宙に並ぶフロンティアとしてもてはやされた深海も、結局は手付かずのままだったことも幸いしているのだろう。

汚染はまだ残っているだろうが、海洋生物は息を吹き返しつつあると言われている。

漁船が意氣揚々と出漁し、恋人達や子供達が波と戯れる日々はまた来るのだろうか。

ふとそんなことを思った。

「ハンドペキには特別の指示はないみたい。連絡はいつでも取れるようにしておけ、といふことだけで。退屈してるので。ハクシュウは、どこかに今日のことを報告したみたいだけど、つて」

「ハハ、時の人なのに、所在なしがい。で、もうひとりの代表者、レイチャエルつてのは？」

「知らない。結局、何の情報もないつて」

「ふうん」

「ねえねえ、作戦中に女とすれ違ったでしょ。とんでもないスピードだった人。もしかして、あれがレイチャエル？」

「さあ。僕もまったく心当たりはないよ」

生駒は、それらのことを調べてみたいと思つた。

チョットマが立ち上がつた。

そりそろおしゃべりは終わつてことこのことだらう。

「ねえ、チョットマ、今日はありがとう。楽しかつたよ。できれば、明後日にもピクニックに誘つてくれないかな

「もちろん！」

シリ－川の会談に立ち会つてみたかった。

「ありがとう。でも、今度はハクシュウにきちんとと解を得て、連れて行つてくれないかな」

「そうは……、ん……、許してくれるかな……」

「大丈夫」

「なぜ？」

「実はさ、今日もハクシュウには僕から一言、断つておいたのを」

「ええっ！」

「だつてさ、もし僕が見つかって、ハクシュウやみんなから君が責

められたらかわいそうだと思つて

「なんだあ」

「黙つててごめん」

「いいよ、そんなこと。あ、そうか、だからさつき、ハクシュウはお付の人も黙つておいてくれつて、言つたんだ！」

「そうだね」

「でも、パパ、ハクシュウと知り合つたの？」

「ううん。先日、会つてね。君がいい人だつて言つから、なんとか興味が湧いて」

チョットマが目を丸くした。

「ほら、保護者としては、娘のボーイフレンドを一目見ておきたくてね。なるほど、抑制の効いたいい男だつたよ」

「そうでしょ！ ボーイフレンドじゃないけどね！」

そういうつたチョットマの声が、うれしそうに弾んだ。

「次は、ンドペキに会つに行つてこようかな」「す」「いんだ、パパは！ いままで、そんなアギに会つたことないよ！」

「そうかい？」

「行動派なんだ、パパは！」

「そうじやないつて。娘のためには、つてこと」

「へえ！ それがす」「いのよ。だつて」

チョットマが、本当の親子じゃないのに、といつ言葉を飲み込んだことがわかつた。

そう、口にする必要のないことだ。

生駒は、チョットマの「テリカシー」がうれしかつた。

本当の親子でなくとも、本当の親子以上に心を通わせることはできるし、やう振舞う」ともできる。

チョットマが、フフツ、と笑った。

「でも、その目玉の姿で会いに行くの？ 私のボーイフレンドに」「ハハ！ そうか、君のボーイフレンドは、ンドペキの方か！」「違うつて！ パパがそういうから、言ってみただけ！」「その気がなければ、そう言つてみる気もしないだろ？ ナビね！」

これと似た会話をしたのは、もうどれくらい前のことだろ？。自分にも、妻とはいえないけれども妻同様に愛し合つた人がいた。娘とはいえないけれども、娘同様にかわいがつた人がいた……。データを組み合わせただけの思考だが、それを「心」というのなら、生駒は自分の心の中に暖かいものがこみ上げてくるのを感じた。

「不法なことはしたくないんでね。まつとうに僕は、この眼ん玉姿だ」

「それってすゞくない？ 怪しまれない？ 大体、街の中で目玉姿から声を掛けられることはないし、もし声を掛けられても無視するよ。避けるのが普通じゃない？」

「だから、すごいのはハクシユウの方さ」

「ねえねえ、どう言つて声を掛けたの？」

「娘がお世話になつています、と言つたのさ」

「おわつ！」

「で、失礼ですが、お名前からすると、日本の方ですか、とね」

「うへええええ！」

「彼は、街中で旧知の先輩に会つたような態度だつたよ。で、僕にアクセスしてくれるようになつたんだら、ちゃんと約束した時間にコンフェッショナルボックスから会いに来てくれたんだ」

「うわ！ やっぱりハクシユウは、律儀な人なんだ。きっと、ンドペキもそつしてくれるとと思つよー」

と、そのときだつた。

視界が消えた。

見ていた海が、ただざらついた青黒い一色になつた。  
強烈な横ジーを感じた。

それらは同時に起つた。

まるで、位相を瞬間移動したかのようだ。

そして、コンマ数秒の後には、閃光が辺りを包んだ。  
生身の瞳で見ておれば、網膜を焼き尽くす。そんなすさまじい光  
だつた。

## 18 乙女の羞恥の心

ランランカラカラ、ランランカラニー  
ランランカラカラ。

パパはやっぱり素敵だな！  
あの人に会うって！

どんな話をするんだろう。  
うれしい！

でも、ちょっと恥ずかしい。

ねえ、あなた。

私のこと、パパにビビつ話すの？

ん！

なんだよ、こんなとき！

チョットマは背後に悪寒がした。  
強い殺意を感じる。

「きっと、ンでペキもやつしてくると毎つよー。」  
と、パパとはしゃぎながらも、背後の悪意の大きさを測っていた。

何がが近付いてくる。

同時に、心の中のアラームの針が急上昇してくる。  
チョットマの体は臨戦態勢をとった。

まよい！

何者が気配との間合には、概ね二百メートル！

パパをどうする！

バツクパツクに入つてもひつのは間に合わない！

チョットマがフライングアイを掴んだとき、背後の何者かの殺意が最高潮に達し、武器のエネルギー・ゲージが振り切れたことを感じた。

横つ飛びに、百メートルばかり移動。と同時に、元いた場所のコンクリートの塊が、すさまじいエネルギー・弾で粉々に吹き飛んだ。

立ち止まるやいなや、お手玉のようになにフライングアイを空中に置くように手を離し、その間に応戦した。

スコープには何も映っていない。

それでも、攻撃を仕掛けられたと思える位置に、レーザー・弾を放つ。

手応えはない。

その間、フライングアイは数センチばかり落下している。羽を広げようとしているが、構わず引っ掴み、再度移動。

依然、スコープに敵の存在は表示されない。

くつ。

許さないからね！

乙女を背後から攻めるなんて、卑劣なんだから！

移動しつつ、フライングアイをバツクパツクに放り込んだ。これで、いつでも反撃できる。

バカね！

エネルギー弾で私を狙うなんて！

さあ、撃つて来い！

もう充填されたでしょ！

エネルギー弾がこじらに到達するまでこ、レーザー弾をお見舞いしてやるー！

エネルギー弾のように物的な質量を持つ弾での攻撃なら、敵との距離が一百メートルあれば、チョットマの俊敏さをもつてすれば、弾を避けることも、その間に反撃することも可能だ。

じわじわレーザー弾。

高速と同時に同じ速度で相手に到達する。

さあ！

どうしたの！

撃つて来い！

あなたが瞬きする間に、息の根を止めてあげるわー！

すでにチョットマは、視界の利く空地に出でていた。港のコンテナヤードか、巨大駐車場の名残だらう。自分の姿を晒す位置だが、その方がチョットマに都合がよい。敵の攻撃を避ける自信はある。対して、反撃が容易だからだ。建物の残骸やコンクリートの塊など、反撃のレーザー弾を遮るものがない。

相手の姿が見えておれば、なお好都合だ。

さあ、出て来い！  
でかいネズミめ！

敵の放つたエネルギー弾の破壊力から見れば、かなり大型のマシンだ。

少なくとも人体以上の団体でないと、あれほどの武器を搭載することはできない。

かつ、飛翔系ではないはず。

建物の残骸などの瓦礫に埋もれた場所でなく、開けた場所に出れば、姿を視認できるはず。

チヨットマは、ゴーグルのモードを変えた。

意識するだけで変わる優れものだ。

可視光線で見る景と、エネルギー探査モードで見る景が自動的に切り替わるパターンである。

切り替えといっても、きわめて高速なので、ひとつのお像に見える。

可視光線で見る景に、エネルギーの存在が重なつて見えるのだ。隠れた敵と対峙するときに有効なモードである。

しかし、エネルギー弾の着弾点とその軌跡以外に、エネルギーの存在は確認できない。

ハエほどの小さな飛翔系のマシンなどは探知しにくいが、それ以上の大さがあれば、たとえ巨大なコンクリート塊に阻まれていても、探し損ねるということはない。

精度の高い装備であるにもかかわらず、敵の位置は表示されていなかった。

どこに隠れているのさ。

それにも、強烈なエネルギー弾ね。

最初に放たれた攻撃の着弾点からは、盛大な炎が上がり始めた。コンクリートさえ瞬時に沸騰し、激しく燃えているのだ。エネルギーが通過した軌跡にも、まだエネルギーが渦巻いている。大気中のある粒子が燃えて、七色の光の帯の中にキラキラした粒子が舞っている。

「援護する！」

ヘッダーの中に、ンドペキの声が響いた。

ヤタツ！

来てくれるのね！

チョットマは空地の中をゅつくり駆け回りながら、相手の一の矢を待つた。

撃つて来いとばかりに。

「相手は！」

「わからない！」

ンドペキの位置がスコープに表示されている。

スコープには所属部隊員を示す緑色の点。

ンドペキという名と到達予測の三十セカンドという数字も。

しかし、敵を示すオレンジ色の点も、他部隊員を示すピンク色の点も、非戦闘員を示す白い点も表示されていない。  
もともと、この辺りには敵の存在は稀だ。

「コーキー」攻撃軍が制圧しているエリアである。  
ほぼ毎日、誰かが巡回し、マシンの侵入を阻止している。

パパとのせつかくのピクニックが。  
でも、いいつか。  
ンドペキが助けてくれるのなら。

ん？

「……」  
といふことは、パパとンドペキの会談も、ここにどうして？  
私がいる前で！

うわ！

恥ずかしい！

どうしよ！

といふより、私が紹介しなくちゃいけないのかな？

ンドペキの緑ポイントは、一直線にチャシトマに向かってくるのではなかつた。

攻撃が発せられた地点に向かっている。

「おまえはそこにおれ！」  
「ハイ！」

敵がまだ近くに潜んでいようとしたら、地下かなり深く潜つたとか考えられない。

さすがに十メートル以深の地下に潜り込まれたら、エネルギー探

査モードは役に立たないのだ。

氣をつけて。

と、あやせつへ言つてやつになつた。

上面であり、熟練の兵士であるハドペキは、チョットマが掛ける言葉ではない。

でも、もし地下に潜んだ敵の真上にハドペキがうつかり近付いた  
ひ……。

ハドペキに限つて、そんなへまをやらかすはずがない。

「チョットマ！ 状況を説明しろー。」

「ハイ！」

突然、背後から撃たれたり。  
それ以外に、説明することはなかつた。

ハドペキは既にかなりの距離を移動している。

敵をくまなく捜索しながら、空地の周りをジグザグに走り回つていふ。

「敵を視認していません！ 系統、機種共に確認できませんでした  
！」

「マシンか？

「ん……？」

「わからない。  
てつまつマシン系だと思つたけど……。

生体系の敵に、エネルギー弾を放つものはいない。

やつらは肉弾戦か、肉体に組み込まれた旧式のマシンガンを派手にぶつ放すか、あるいは火薬系の弾を放つだけだ。

エネルギー弾はもちろん、レーザー弾や、量子弾、核エネルギー系の武器を装備しているものはいない。

えええつ！

そんな！

マシンでなければ、人間といつことになるけど……。

チョットマはこれまで、人間に攻撃されたことはない。しかし、チョットマはンドペキにそれを問い合わせ直しはしなかつた。

まさか、そんなことが！

なんだって、私が！

ありえないじゃない！

誰にも迷惑かけてないし！

結局、敵は姿を消していた。

ンドペキのスコープにも、何も映らなかつたといつ。

まだ、地下に潜んでいる可能性を考え、チョットマヒンドペキはアリーナに移動した。

アリーナであれば、常時、要員が警護に当たつている。

地下であれ、大半が崩れ去つた大屋根であれ、大量の付室であれ、大階段下の巨大倉庫であれ、敵が潜んでいる恐れは小さい。

念のため、アリーナのど真ん中に突つ立つて、チョットマはンド

ペキに改めて報告した。

互いに背を向けて周囲を警戒しつつ。

## 19 狂いの色

ンドペキは、チョットマの話しがぎりがないと感じた。  
なにか、隠している。

ヘッダーを被つたままなので、チョットマの瞳にどんな心が浮んでいるのか、窺うことはできない。  
電波を通して流れてくる声も、いつものチョットマの声である。  
しかし、そもそも加工していないとも限らないが。

あの敵は、かなりの熟練だ。

あれほど破壊力のあるエネルギー弾を使つマシンは、この辺りにはもういなはず。

もしいたのだとしたら、ニコーキーツ軍の沾券に関わる事態だ。

姿も、ついに見せないままだった。

ンドペキは思いをめぐらせた。  
スコープにも反応がなかつた。

つまり、監視人工衛星のカメラに捉えられなかつたといふことだし、GPSも役に立たなかつたといふことだ。  
マシンの類ではありえない。

しかも、あの状況では地下に逃げたとしか考えられない。  
通常のマシンは、基本的に逃避行動をとることはない。  
命が惜しい、とは考えないからだ。

それらのことを考へると、チョットマを襲つたのは「人間」ということになる。  
しかし……。

「おまえ……」

「ハイ！」

誰かに襲われたことがあるのか。

誰かの恨みをかうようなことがあるのか。

「ないです！」

「だろうな」

これまでチヨットマを部下として見てきたが、そんな様子はなかった。

あるとすれば、本人も気付かないようなことだろう。

典型的な天真爛漫で、悪意といつもの知らない、といつのがチヨットマなのだから。

「しかし」

呼びかけておきながら、ンドペキは次の言葉がなかつた。

本人が、誰かに恨まれるような覚えはないというのだから。

無理やり口から出た言葉に、げんなりするが、まあ、しかたがない。

「怪我はないか」

「ハイ！ 全然、大丈夫です！」

「怪我はないか」

「ノドペキは、ふと、襲つたのは自分ではないか、と考えてみた。

襲つておいて、救援に向かう。

チヨットマは頭から俺を信じている。

好都合じゃないか。

そう、サリを殺そつとしたときと回じよつ。

妄想だ。

ンドペキはそんな考えを振り払つた。  
自分でも、倒錯した思考だと思つた。

今はダメだ。

しかも、少なくとも、ここでは。  
見張りの兵士がどこかにいる。

しつこく追いすがつてくる自分の思考に手ひきする。  
ひきとときは、行動を起こすに限る。

チョットマは黙つて、指示を待つている。  
いずれにしろ、危険は去つたと考えていいだろう。  
今日のところは、おとなしく街に帰つた方がいい。  
走ろう。

走つて、邪念をふるごとく落とそう。

今は。

「街に帰るぞ」

「ハイ！」

ンドペキは駆け出したが、一歩出遅れたチョットマが、声を掛け  
てきた。

「あの、ンドペキ」

「ん？」

チョットマが追いすがつてくるが、ンドペキはスピードを落とす

」となく、たちまちアリーナを出て瓦礫の街を抜けていく。

「あの」

「だから、なんだ」

「ありがとうございました！」

「……」

仲間を助けるのは当然の行為だ。

ただ、それを口にするほど、ベタベタした関係ではない。

こいつを殺すのはどうだ。

つい、それを吟味してしまつ。

邪な思考がまた頭をもたげてくる。

そもそも、あの日、俺はサリを殺そうとした。

理由は特にない。

心を捉えていたのは、自分が死にたい、といつことだけ。

俺は何者なんだ。

いつたい、何のために生きているんだ。

マシンを倒し、集めた金属を金に換えるだけの毎日。

先が見えないだけでなく、過去さえも失ってしまった俺に、生きていく目的などあらうはずがない。

そんな日々がもう数百年も続いているというのに、これからまだ数百年、あるいは未来永劫続くのか。

俺は死にたい。

死んで、安らかな死後の世界に旅立ちたい。  
死後の世界などがあるとはこれっぽっちも思わないが、もう、生  
きていくのは止めんだ。

耐えられない。  
虚しそぎる。

今まで、心が失われ、闇に沈んでいった人間をたくさん見てきた。  
俺は、そうはなりたくない。  
そうなる前に、自分の肉体を消滅させてしまいたい。

ところがどうだ。

そんな俺に、死ぬ方法がないときていい。  
もう十分だというのに。

残された道はただひとつ。  
再生されること。

人殺しの罪を背負つて、ようやく死ねるところは、なんと不<sup>合</sup>  
理な制度だらう。

チヨットマは黙つてついてくる。

こいつなら、いいかも。

しかし、サリならともかく、こいつは並大抵のことでは倒せない。  
敏捷性が半端じゃないからだ。

いや、だからこそ、こいつを殺しても誰も疑わないかも。

俺は、死にたい。

しかし、人殺しと罵られて死を待つのは耐えられない。プライドはあるのだ。

生きてきた証なんぞには興味はない。

ただ、俺の生を汚したくはないという思いがあるだけ。

自分勝手な考えだ。

自分自身に死をもたらすために、人を殺す。

しかし、他人には、特に部隊の連中には知られたくないのだ。

そんな都合のいいことを考えてしまつのは、すでに俺の思考も狂い始めているのだろうか。

いや、そうではないはず。

ふつりと正気が失われてしまつたのなら、他人の目など気にはしないだろう。

人は、徐々に狂つていくのだろうか。

あるいは、ある朝目覚めると、昨日の自分がそこになかったというように、狂気は突然やつてくるのだろうか。

俺は狂人になりたくない。

しかし、きっと、そうなるのは遠い先ではないだろう。

自分のことだからわかるのだ。

夜、眠るのが恐ろしい。

朝になれば、俺は昨日までの俺ではなく……、と考えてしまつのだ。

もう、時間はない。

「ねえ、ンドペキ」

チョットマが話しかけてくる。

「なんだ」

「今度の会談、頑張つてください

「うむ」

しかし、何を頑張れというのだ。

その日、俺はもう狂い始めているかもしれないぞ。

「す」ことですよ。指名されるなんて

「意味がわからない」

「きっと、ンドペキは偉い人なんですよ」

「まさか」

「覚えていないんでしょう? 昔の自分。もしかすると、ワールドの大統領だつたりして」

チョットマが他愛のないことを語つてくれる。  
返事をするのも面倒だ。

「まあ、そのときがくれば分かるだろう」  
と、覚えておいて、俺はまた妄想にふけった。

再生不可処分の理由は、公にされるのだろうか。  
ハクシユウは知ることになるのだろうか。  
チョットマなどの兵士を殺せば、連絡がいくのだろうか。  
普通は、再生されない理由が明らかにされることはないはずだが。  
では、兵士ではなく一般市民なひどつか。  
再生不可理由は公表される。  
人知れず死ぬ、には不都合だ。

それだけ、兵士の立場は軽く見られてることこのことだが、そんなことはどうでもいい。

もう、何度も同じ考えをなぞつてきたのだ。

街に着くと、チョットマはべーっと頭を下げる。

「気をつけろよ」

「ハイ！ ありがとー。」

立ち去るチョットマに、俺は声を掛けた。

「待て」

先ほど思いついた考えを伝えておこうと思つた。

「おまえ、クシという男のこと聞いたことがあるか？」

「クシ？ いえ、ないです」

「おまえを襲つたのは、たぶん、そいつだ」

「だれなんですか？」

「東部方面隊の兵士だった男だ」

「えつ、その人が私を？」

「なんとなく、そう思つただけだ。何はともあれ、気をつけろ

「ハイ！」

「僕をボーイフレンドに紹介してくれなかつたね」「だつて……」

乙女心というやつだらう。

それに、襲われた後だ。

そんな雰囲氣ではなかつたといふことだらう。

「ハクシュウのときと同じようこ、元ペキにも声を掛けたかのよう」「うん」

彼女には、何の前情報もなくハクシュウに声を掛けたかのようこ話したが、実は予備知識は得ていた。

アヤから聞いている。

「ハクシュウっていう人なんだけね」

アヤの情報によれば、生誕年は間違つていなかつたようだ。元は日本人であるという想像も間違つてはいなかつた。

「再生されるたびに新しい街に行くみたい」

アヤはメモつて来た街の名前を読み上げてくれた。

生駒にとつて、懐かしい街の名もあつたし、ほとんど行くこともない街の名もあつた。

「でも、そんなにころころ住む街を変えたら、友達がいなかつたりして」と、アヤは笑つていた。

「それに、職業はいつも兵士みたい」

兵士としては優秀なようで、リーダーとしても素質があるようだ。多くの街で、それなりの階級に登つてている。

生駒の思考体は、最大で三つに分割することができます。

本体つまりメインブレインとは別に、ふたつのセパレートブレインをフレーミングアイに載せて動かすことができるのだ。

当然、データベースは共通だ。

つまり、同じ記憶を持ち、常に同期している。

そしてセパレートブレインは、単独で思考することもできるし、メインと連動して思考することも可能だ。

今日のように、チョットマとピクニック中であれば、それに集中してもよいのだが、どうしてもアヤのことを想ってしまう。

チョットマは、今朝の待ち合わせ場所に使った裏路地に入つて、建物と建物の間に身を潜り込ませた。

今日のピクニックは終了だ。

「今、いいよ」

フライングアイを引き連れた兵士なんて、他人に見られたりビデオ思われるか知れたものではない。

ましてや、街のカメラに捉えられては、面倒が起こらないとも限らない。

「じゃ、また明日」

チョットマの合図と共に、生駒はチョットマの体から離れた。

メインブレインはセパレートブレインが見聞きしたこと、リアルタイムに、そしてまるで自分が体験しているかのように把握していたが、常にアヤのことを考えていた。

アヤと再会してからとこづもの、これまでの五百年間を忘れ去ってしまうほどの、喜びに満ちた日々が始まった。

彼女は、あれ以来、毎日やつてくる。

彼女との会話の数々は、まだ鮮明なままの記憶として、いつでも再生することができる。

英知の壺で見ていたよつた誇張された感覚を伴つものではなく、  
生の記憶として。

結婚はしていないといつ。

いろいろな職業を経て、様々な街で暮らしこそ、今は「ユーリーチ政  
府内の某機関で働いていて、暮らし向きはまづまづらしい。  
前回の肉体再生時に、どうこうわけか、大阪で暮らした日々の記  
憶を伴つて生き返つたのだといつ。

そんなことつてあるんだ」と闇達に笑つたが、その声とは裏腹に、  
田からはまた涙がこぼれそうになつていた。

また優お姉さんの搜索をしたいとアヤは言つが、生駒はそれを頼  
むことをためらつていた。

今のアヤを大切にしなければ。

その思いが強かつた。

過去を引きずるだけの生では、意味がない。

少なくとも今、実体を伴つて生きているアヤには。

「でも、パパ。私、パパの手足になるためにマトになつたのよ」

と、言つのだったが、

「いよいよ必要となればね」と、かわしていた。

市民の情報を扱う部所にアヤはいるらしい。

それ以上は語らなかつたが、外部に漏らしてはいけない事柄を扱  
つてゐるのだろうと推測している。

そういう部所にいればこそ手に入る情報もあるのだろうが、それ

は現在の市民の情報である。

過去の、しかも六百年も昔に特殊な任務に就いていた優の情報ともなれば、それを探ることに危険を伴つこともあるだろ。ひい万一、アヤの身に何かあれば、今度こそ自分は立ち上がれないだひいと生駒は思ったのだ。

「サリっていう子がいるんだ」

生駒は、チョットマやサリ、そしてハクシュウやゾーベキのこと話をした。

「ユニーキーの住民達だよ

サリといっ娘に关心を持つたことも話した。

「チョットマの言つことを聞いてみると、サリって子がなんだか優に似てるな、と思つたりしたものだよ。でも違うんだ。サリはメルキト。優はメルキトではない」

「だよね

「優の子孫つてことなら、あり得ないことでないけどね  
「ということは、優お姉さんがマトになつて、ホメムかマトとの間に、子供を生んだってことになるわ」

「うん

「優お姉さんも、記憶を失くしちゃつたのかも」

優がまだ生身の人間だったとき、つまりホメムだったときにはトと結ばれ、子を産み、サリがその子孫だという可能性もあるが、アヤはあえてそれ以上は口にしなかった。

もちろん、生駒の心情を思つてのことだ。

「サリのこと、調べてみようか」

そう言つて出したり、生駒はあわててとめた。

「こや、調べなくていいよ。それはチョットマたちがすることだ

から

実際、チョットマ達にそんな調査能力があるとは思わなかつたし、調べようともしないことは分かつっていたが、生駒は嘘をついた。

「でも

「それにね、もしサリが優だつたら、僕は傷つくことになる。

自分を忘れてしまつたところになるから。

優は、光の女神と呼ばれ、金沢から大阪の自室まで、どのような方法を使つたにしろ、人間を飛ばすことができるほどの能力を「えられていた。

その彼女が、六百年間にわたつて生駒を見つけられないところはないだろ。

しかも、当時は個人情報のセキュリティは今ほど強固ではなく、IDの漏洩などは頻繁に起つていたのだから。

生駒の言つたことを察して、アヤはそれ以上、調べてみるとは言わなかつた。

「今度、ハクシュウという隊長に会つてみようと思つんだ。どうも、同じ歳の日本人みたいだし」

そう言つば、アヤは無理のない範囲で調べてくれるだろ。そして、もしかするとそこにサリのヒントも隠されているかもしない、と思つたのだった。

「パパは、チョットマさんがお気に入りなのね

「そうだよ」

アヤは妬いてゐるのではない。

生駒が幸せな気分で毎口を送つてきたことを、感じたいだけなのだ。

「典型的なメルキトでね」

生駒は、チョットマのことも話して聞かせた。

ナウセルフのみで生きている。一オールドの記憶もない。  
知識量も人並み以下。

そのくせ人懐っこくて、メルキトには珍しく、人生を心から楽し  
んでいる……。

オールドとは、再生される期間のことだ。

昔の言い方をすれば、一生ということになる。

「メルキトはたいてい、自分がいやになつてゐるが、無氣力になつ  
てゐるかなのにね」

「そうだね。でも、その傾向はマトの方がひどいんじゃないかな」

「うん。マトは昔々、自分の生があるとき、死ぬか、アギになる  
かマトになるか、を選択することができた。それに対してメルキト  
は最初から再生され続ける人間として生きている。マトは自分で決  
めたんだからもつと頑張らなくちゃいけないのに、なまじ自分で選  
んだからこそ、迷いというか後悔というか、割り切れなさがあるの  
よね」

アヤはマトだ。

どんな精神状態で、今まで生きてきたのだろうか。

生駒はそう思うが、今、目の前にして聞く必要のないことだ。

生き生きとしているのだから。

生駒は一般論を吐いた。

「再生回数が増えれば増えるほど、一から人生を始めるのに飽きて

しまう。そういう感覚はわかるよ

アギにも言えることだからだ。

アヤも歩調を合わせてくる。

サリの話から、もしかすると優の話題から、避けてこようとするかのよう。

「あの一百年間、マトの製造が禁止されるまで、毎年世界中で四、五十万人がマトになつた。総勢で一億人前後のマトがいる計算になる。でも残存するマトは現状わずか数十万人ほど。ここ数百年のうちに、大多数のマトは消えてしまった」

「アギも同じようなものだよ」

コンフェッションボックスの中で、生駒とアヤは会話をしている。実像を伴つて、向き合つている。

他に誰もいないがらんとした部屋で、他人行儀に向かい合つて座つていてる。

親子なら、もつと自然に自分の居場所を見つけて、自由にくつろいで話をするだろう。

再会したとき、生駒とアヤは抱き合つた。頬を寄せて、涙を流しあつた。

しかし、そうしたのはあれきり。

今この微妙な距離を縮めたい。

政府に傍受されていようが構わない。

生駒は、そう思わずにはいられなかつた。

「うん。アギの場合は、思考は途切れることなく続していくでしょ。それはそれで苦しいのかもしれないけど、マトの場合は死亡という節目があつて、そのたびに記憶が消えていく。ある期間の記憶がぽ

つかり失われていく。なにも残っていない。それに気づいたときのやるせなさといったら」

アヤは、涙ぐんでいた。

他人に言えない苦しみがあつたのだろう。

記憶を失うとは、どんなに辛いことか。

失われることのない記憶の存在となつた生駒にも、その感覚は分かる。

「もうどうでもいい、って何度思つたことか」

生駒はアヤを抱きしめたいと思つた。

アギであつても、この部屋の中では肉体を持つているし、身なりも整えている。

アヤを抱きしめる「」ともできるし、アヤが抱きつく「」ともできる。しかし、それはそれぞれの神経がそのように反応し、感じていると脳に伝えるだけのことであつて、実際は生駒に本物の質量を伴つた肉体があるわけではない。

この空間同様、仮想の産物なのだ。

そんなまやかしの肉体であつても、抱きしめてやればアヤは喜ぶだろうか。

「アヤちゃん」

生駒は椅子から立ち上がつた。

せめて手を繋ぎたいと思つた。

せめて、頬の涙を拭つてやりたいと思つた。

せめて、アヤの髪に触れたいと思つた。

現実には存在しない、仮に見えているだけの手であつても。

「おじさん」

アヤも立ち上がつた。

そして、テーブルを回り込み、抱きついてきた。  
なんとなく、おずおずと。

昔、思春期の頃のアヤがそうしていたよう。

生駒の目から涙が溢れ出した。

何も言えなくなつた。

アヤの髪を撫でながら、嗚咽の中からただただ、ありがとう、と繰り返していた。

今はいつもしていること。それが幸せだと思った。  
離れ離れになつた数百年間の空しさは、一度や一度の抱擁では埋められない。

どれほどの時間、そうしていただろう。

やがてアヤは胸にしづめた顔を離し、まつすぐ見つめてくる。

「おじさん、私の記憶と変わらないね」

「そりや、まあ

当然なのだ。

仮想の肉体は、当時のままを保つている。

しかし生駒はさうは言わず、「生きてきてよかつたと思う」と言つた。

「私も。死ななくてよかつた」

アヤが、自分の涙を生駒の胸に擦り付けた。

「おじさんのことや優お姉さんのことを思い出した途端、人生はガラリと変わつたわ」

そして微笑み、自分の指で生駒の涙を拭つた。

「生きていく志ができたところの、過去も未来も、両方を見る」とができるようになつたといつた

「なるほどねえ」

あまりいい言葉は出でない。

こんなに心がときめく瞬間は、もうどれほどなかつただろう。

生駒はまた涙が出てきそうになつて、もう一度、アヤを抱き寄せた。

過去の積み重ねで、今の自分がある。

それがあるから、先のことも考えることができる。

今まで、そんな風に考えたことはなかつた。

誰でも、過去の記憶を心の中から引き出したり仕舞い込んだりすることができるからこそ、明日の自分を想つことができるのだ。

アヤが胸の中で言つ。

「昨日のことも忘れるよつでは、明日のこととは考えよつもないのね。以前の私は、そういう人間になつてしまつていたの」

体が離れた。

生駒の胸に、言にようのない寂しさがこみ上げてきた。

しかし、今日の面会時間は終つた。

またいつの日か、一緒に暮らせようになるのだひつが。

そうは思つが、これ以上、悲しい状況を自ら作り出す必要はない。無理をして危険な橋を渡る必要はない。

傍聴しているコンピューターがどんな判断を下すか、分かつたものではないのだ。

これでいいのだ。

こうして、訪ねてきてくれるアヤと会うだけで。

今でも、アヤと出会う前の数百年間の状況に比べると、腐りきつたどぶ川と南太平洋の大海上くらいの違いがあるのだから。

「ちょっと、やばかったかな。抱きついたりしたし、パパを呼び間違つたりしたから」

アヤが、ちよろつと舌を出した。

「じゃ、パパ、またね」

アヤが出て行くと、部屋に並べられた椅子が、空しいものに見えた。

がらんとした部屋に、座る者のない椅子の群れ。

冷めた空氣。仮想で作られた部屋に風が流れることはない。

何の物音さえしない、鼓動のない空間。

そう感じたとたん、生駒はある作業を始めた。

一心不乱に。

「センチメンタルだな」と、呟きながら。

## 21 オルゴールの声

予想外のこと驚いた。

おじさんの部屋に入るなり、

「ここよー 私の居場所は！」と、アヤは叫んだのだった。

いの一番に、子供の頃いつもそうしていたように、見慣れた椅子に座った。背を股に入れて。

「なぜ、こんなことを覚えているんだろ！ 私、いつもここに座っていた！」

おじさんが笑った。

「そう、そこで君はいつも宿題をしていたよ。狭いマンションだから、中学生だったのに自分の部屋をあげられなくて、いつも気にしていたんだ」

「ううん、そんなこと」

「よかつた、喜んでくれて」

心底からうれしかった。

涙ぐみそうになるのを堪えて、おじさんの、生駒のオフィス兼住まいの狭い部屋の中を歩き始めた。

かつて私達が住んだ部屋を……。

「うわ！ 凝ってるね。これ！」

サイドボードに飾られたフォトフレーム。

家族三人で行つた、北アルプスの白馬雪渓の写真。

「これも…」

アヤが優の誕生日に買つてきた、ピアノの形をしたオルゴール。

「まさか」

ゼンマイを回すと、「いい日旅立ち」の曲が流れ出した。それに合わせて、アヤは口ずさんだ。

「あー……。私の記憶、どんどん生まれてくる感じー。」

そんなこともあるのかもしれない。

マトの記憶がどのように削除されていくのか、そのシステムは公にされているない。

むしろ、再生時に注入されない記憶があるところのが、正しい表現だ。

不要と思われるものから、ランダムにお蔵入りとなるのだ。

ただ、完全に消去されるということではないようだ。

どこかにそれは保存されている。

現に、完全に忘れてしまった頃のことを急に思い出した、ところがマトは多い。

今、まさにその状態だった。

「げ！ こんなものまで」

アヤの結納のとき、相手の親が持ってきたオキナとオウナの木彫りの像。

結局は離婚して、アヤは戻ってきたのだったが。

「ああー」と溜息をついて覗き込んだものせ、カウンターの上の水槽だ。

「そういえば金魚を飼っていたこともあるね。金魚すくいでもひつたやつ。本当は一匹しか掬えなかつたんだけど、店のおじさんがあまけしてくれたんだつた……」

もう泣き笑いの顔になつていた。

「バーチャルだけじゃんと生きているよ」

「うん。懐かしいものがいっぱい……。あ、やだ。他の部屋も覗いてもいい？」

なぜか今日は、おじさんに涙を見られたくなかった。  
会えば泣いてばかり。

悪いのは私。  
でも、もつとこつかりしなくちゃ。

「もちろん。君の家だら」  
キッキンを覗き、お風呂を覗き、トイレまで覗いた。  
そして最後に、寝室に入った。

「わたし、中学生だったのに、いつも三人で川の字になつて寝てい  
たんだ……」

畳の部屋の真ん中で、座り込んでしまった。  
そしてとうとう、涙がこぼれ落ちてきた。

「今日は泣かないでおこうと思ったのに、涙が……」

おじさんは静かに笑って、見ていてくれる。  
その手が髪に触れて、アヤは気持ちを奮い立たせた。  
いつまでも、泣き虫じやダメ。

「ちょっとまづいかも。一回連続でイレギュラーな会話で終りちゃ

……

と、無理に笑顔を作った。

たちまち、おじさんが心配顔になる。

「なにかまづい兆候でもあつた？」

「ううん」

コンピューターの監視システムに、変化はない。  
パパのエロに付与されたコメントは、何もない。

ただそれは、自分が知らないだけかもしれない。  
しかし、安全策を意識した。

ダイニング兼用の仕事場に戻り、自分の昔の指定席に座った。

「自殺願望のマートはとても多いんだよ。それを請け負う闇商売もあるらしいの」

無理やり、現実的な噂話に話題を変えた。

聞かれていることを前提にした会話。

やりきれない思いがしたが、今の状態では仕方がない。

怪しまれておじさんの身に何かあれば、それこそ取り返しがつかない。

おじさんさえ無事なら自分はどうなつてもいい、ふとやつ思つた。

「再生しない完全なる死、だね」

おじさんも話を合わせてくる。

「そう。どの街にもひとつやふたりはいるらしいよ」

「へえ」

「マートはいつの間にかこんなに数が減つてしまつたけど、それは、死亡が確認されない深い海に身を投げたり、自分が再生不可になるために殺人を犯したりした人が多いから。そのどちらもできない人もいるのね。そういう人のための商売」

そんな話を挟みながら、ここに来るたびに、おじさんのことを聞こうとしてきた。

そして自分のことも話したかった。

ただ、タブーが多い。

心あきなく話せる、そんな世の中になればいいのに、と思つのだつた。

街の外に出れば、政府の監視の届かないところもあるのかもしが

ない。

テレビカメラやレーダーや、電波を介した会話を拾うシステムも手薄なところがあるかもしない。

しかし、兵士でない自分が街の外に出ることは、物理的に無理なことだった。

殺傷兵器から身を守ることができなかつたし、有毒ガスに耐えられる装備も持つていなかつた。

しかも、政府機関で働く者が街の外へ出て行くことなど、どんな理由があるのかと、たちまち怪しまれてしまつことだらう。

しかも、おじさんは生身の人間ではない。

声帯を震わせて空気中を伝播する声は出せないのだ。

政府のシステムを使って、電気的な发声をしているし、聴いたことも電気的な信号で電腦に送られているのだ。

もちろん、すべて政府のコンピュータに筒抜けになつていて、

「私はもう、記憶を完全に抹消されない限り、今の仕事を辞めることはできないの」

アヤは、思わず弱音を吐いた。

「そういう仕事に就いてしまつたんだから。自分を大切に、とにかく言ひようがないよ」

おじさんは、少し離れたところに座つて、くつろいだ声を出していく。

心に生じた波を、できるだけ表に出さないよつこじで。

「さうね。暮らしへ満足してこる。いつしてパパとまた会えて、私は幸せ」

「ぼくもね」

「妙に言ひ寄つてくる男もいるしね」

その話をする気はなかつたのだが、自然体といつことを意識したあまりに、思わず口から出てしまつた。

「へえ！ そりやいい！」

「相手はメルキトなの」

実際、当たり障りのない話題である。

彼に特別な感情はないから。

「ううん、もしかするとアンドロかもしれない。仕事場の人。あいにぐ、こちらは関心ないけど」

「アンドロ？」

人造人間には、製造目的以外の思考能力はない。  
しかし、画一的ではないのも事実である。

「本当は違うのよ」

そんな話をしようと思った。

秘密にしておかねばならない情報ではないはずだから。

「アンドロにもいろんな種類があるの。パパはニュー・キーツの街の人口、どれくらいだと思ってる？」

「さあ、ニュー・キーツは世界を見渡しても、小さな街の部類に入るだろう。一応、全部合わせてせいぜい十五、六万人」

「ハハ、ぜんぜん。百七十五万人。人数の上で、圧倒的派閥はアンドロ」

「そうなのか」

おじさんは特別に驚いた声もあげない。  
あくまで、淡々とした声だ。

「いわゆる街の人の中にはあまりつかないでしうけど、街はアンドロによって成り立つていての」

「ああ」

「お店をしたり、兵士をしたりしているマトやメルキトがどうしても立つけど、彼らはごく少数派。極端な言い方をすれば、私達が暮らしている部分や、活動していることは、街の機能のいわば飾りの部分だけなの。街の実態はすべて、アンドロが動かしているといつてもいいのよ」

当たり障りのない範囲で、アンドロの世界を話した。

地球人口は公式には千万人ほどといわれているが、実際はそれよりもずっと多く、一説では一億人にまで回復しているといわれている。

ただ、そのほとんどが人造人間であるアンドロである。

アンドロが支配している地球、という観念が広まるのはまだ時期尚早といつ判断がアンドロ側にはあり、低レベルな労働力としてのアンドロが工場の隅っこで働いているという印象をあえて維持しているといふのだ。

「ま、そうだね。うすうすは気づいていた」

「アギは徐々にわかっているの。でも、マトやメルキトはわかつてない。いくら知識があつても、思考力は相当に低下しているのね」「書き割りみたいなこんな薄っぺらな街で、細々とした営みだけで世界が成り立っているはずがない」

「そう。食料やエネルギーだけでなく、ほとんどすべての物が政府によって供給されているわけでしょう。マトやメルキトは、それによつて生かされているということなの」

そんなことを漫然と話しかけた。

しかし、そろそろ危険水域に達した。

「街の人は気づいていない広大なエリアが、実は街に隣接して存在

している、といつ情報もあるね

アヤは話しそぎたのかもしれない。

おじさんさ、応えにへこ点を突いてきた。

これに返事をするべきではないだろ？

「パパ、あのお花、見に行つた？」

と、話を持った。

話題は、どんどん移り変わっていく。

意識的にそぞろしている。

しかも、すべてのことをわざと語る。

あくまで、他愛のなに噂話であるかのよつ。

「」の「ユーロキーツ」の街にも、隠された広大な別の市街があるといわれている。

一部のアギによって、ささやかれている噂だ。

政府の機関が集積している巨大な建物は、人の目には見えないが、より大きな建物群の玄関部分にしか過ぎないというのだ。

次元の位相をかすかに変えることによって、普通の市民は、そのエリアの存在にさえ気づくことはできない。

多くのアンドロはその次元にたやすく行き来することができるといふ。そういう能力を持つアンドロが開発されていったということなのだ。

もちろん、初期のアンドロを製造していたのは、ホメムである。しかし、ホメムの数が急速に少なくなつていった時期に、特殊なアンドロや高度な知能を持つアンドロを数多く開発し製造した。地球上のひとつ次の次元であるアギやマトが住む地上ではなく、生産拠点あるいは行政拠点としての新天地を求めた時期のことである。地上の汚染が過去最悪だった頃のことで、宇宙空間に浮かぶ生産拠点だけではまかなければならないし、膨大な物流エネルギーの将来性も危ぶまれたからであった。

そのような次元に、アンドロを送り込み、彼ら自身の知性でその世界を運営させる必要があつた。

アンドロたちが、その新天地に、自分たちの王国を作り始めたのは必然の流れだつた。

果たして、まさに桃源郷ともいえる豊かな世界を異次元に築きあげたと言われている。

アギやマトが住む次元は、今やアンドロによつて生かされ、運営されているのだ。

中世を懐かしむための博物館のようなものだ。見世物なのだ。そ  
う、一部のアギのメッセージは訴えていた。

メッセージはすでに削除され、その人物のIROは凍結された。記  
憶も知識もすべて抹消されてしまったそうだが。

ふと生駒は心配になつた。

アヤはその世界と紙一重のところで働いている。

言い寄つてくるアンドロがいるという。

アンドロは、かつてのロボット代わりの人造人間ではなく、完全  
な人間なのだ。

強大なコンピュータによつて生かされているアギやマトより、よ  
ほど人間らしいといえるかもしれない。

恋をし、結婚し、子供を生み育て、人生の輪廻を人間らしく送つ  
ているのかもしれない。

彼らの世界は、かつて人間が御し切れなかつた世界中の様々なひ  
ずみや、最大の過ちであつた世界戦争がなかつた場合に進化してい  
つたであろう、輝かしい未来の地球の姿であるのかもしれないのだ。

「アンドロは私の仕事場にもたくさんいるよ。といふか、アンドロ  
ばかり」

アヤはそう言つた。

「メルキトの方が少ないくらい。マトなんて、ほとんどいないわ  
「政府機関なんだから、そなんだろうね」

「さすがに上層部ともなるとアンドロとメルキトの勢力は拮抗して

いるけどね。私の上司は、たまたまメルキトだし

「アンドロの部下のメルキトやマトは、微妙な気分なんじやないかな」

「ううん。そんな意識はないんじゃないかな」

アヤが肩をすくめた。

「アンドロだからって、奴隸じやないし、マシーンでもないから。

仕事場じや、対等」

「うん」

「相手の素性なんて、意識もしないし」

「へえ、もうそこまできているのか」

アヤは、アンドロの方が全般的に優秀な人材が多い、と話してくれた。

「仕事ができるという意味でね。人間らしい感覚とか、やさしさとか弱さとか、といった意味では彼らは平板な感じがするけど」

「人間臭くない、ということかな」

「うーん、ちょっと違うかな。人間ってさ、仕事イコール権力とか、仕事イコール名声という方向に繋がりやすいじゃない。そういう人間臭さっていうのかな。つまり、待遇とか、権力とか、名声とか、を志向するといううことにかけては、アンドロの方が強いみたい」

「へえ」

それって、まざいんじゃないか、と生駒は言いかけてやめた。

アンドロに対して批判的なことを言つのは避けておいた方がアヤのためだ。

ましてや、人造人間じときが、と聞こえかねないことは口にするべきではない。

「仕事場の友達は、メルキトもいるけど、アンドロもたくさんいるよ

と、アヤも言つ。

「コンピュータに聞かせる言葉かもしれないし、本当のことかもしない。」

「ポツリと、アヤが自分のことを口にした。」

「ねえ、パパ、親友がいるんだ」

「おっ、いいじゃないか。今度、紹介してよ」

「うん」

自分で言い出しておきながら、アヤの口が重たい。  
「そうしたいんだけど……。話しておく。なかなか、外には出て来れないやつなんだ」

「そのアンドロかい？」

「ううん。女性なんだけど、とても忙しいみたいで」

生駒は、重ねて聞くことはしなかつた。その代わり、話題を変えた。

「ところで、街の外に出てみない？」

チヨウトマなら、ふたりを連れ出してくれるかもしれないと思つたのだ。

「出るのは、まずいかい？」

「さあ、どうかな……。故障はないかもしれないけど……」

「最近、街の外へ出たことはある？」

「ないよ。以前は、私も兵士をしていたことがあるから、そのときは毎日出ていたけど。」ヨーロッパの街じゃなく、サイロンって街にいたとき

「そうか、サイロンにいたことがあるのか。あそこはいいだろ。街がどことなくアジア風で」

「うん。ちょっと暑いけどね。たまには道端に花が咲いていたりね」

話がそれでいく。

アヤにとつて、街の外に出ることまゝ、やはり深入りしたくない話  
だつたのかもしれない。

生駒はサイロンの街もよく知つてゐる。

自分自身はどの街に属しているという概念はないし、パパと呼んで訪ねてくる「子供達」は世界中に散らばつてゐる。

現に今も、サイロンの街にも「息子」がいる。

ぶつきらぼうな男で、心を通わすことのない相手だが。

そんなことを話すうちに時間が来て、アヤは帰つていった。

また明日、という言葉を残して。

生駒は、アヤと郊外で話したいと切実に思つた。

アヤの身の安全を考えると、ここでかなりきわどい話することと、郊外出かけることの危険度はどちらが大きいだらうか、と考えた。

ただ、ピクニッケのお供を頼むがどうかは別にして、チョットマ  
に紹介しようと思つた。

## 23 囚われた思念の色

### 23 囚われた者的心

ンドペキは落ちつかなかつた。

自分が指名された会談は明日だ。

昨日の作戦以来、ハクシュウからは何の指示もない。

自分の役割はなにか。

どう振舞えばいいのか。

教えてくれるものがいなばかりか、あの連中が何者なのか、レイチエルとは誰なのか、何のための会談なのか、という基本的な情報さえなかつた。

スジーウォンやコリネルスらにも聞いてみたが、誰もまともな言葉を返してこない。

答えようがないからなのか、自分だけに伏せられていることだからなのか。

いてもたつてもいられない気分だった。

とはいえる、口外無用だと、ハクシュウから釘を刺されている。知人と呼べるものはいなかつたし、共用のデータベースにレイチエルという名前をインプットすることもためらわれた。

俺は、なにか大切なことを失念してしまっているのか……。

記憶を呼び戻そうと試みる。  
いつものように。

マトになる以前のことは、覚えてはいない。  
どこの国の人間で、どんな暮らしをし、なんといふ名であったか  
さえ。  
わずか六百年ほどのことだといふのに。

その記憶はどこにあるのだろうか。

あるいは記録として残されているのだろうか。

それを手繰り寄せることができないだけなのだろうか。

実は、六百年はあるか、数世代前の自分のことさえ、霧の向こうの  
の人影のようにおぼろだった。

この街の兵士になる前は……。

つまり、一オールド前は……。

アジア大陸のホルンプールという街に住んでいた。  
大手の輸送会社に勤めていた。

ンドペキではない名を名乗つて。

厳しいノルマがあつたが、それなりの暮らしをしていた。ただ、  
家族はない。

独り身の身軽さで、再生を機に、ニューキーツに移り住んだ。  
新しく生き直すことにしたのだ。

ただ、最初から兵士になるつもりではなかつた。

商売を始めたい。

静かな暮らしがしたい。

そんなホロホロとした思いを持っていた。

しかし、ニューキーツは思った以上に小さな街だった。  
小さければ小さいほど、民業は育たない。

あるいは阻止され、街の政府の力は強大となる。

ニコーキーツでは、食料、エネルギー、情報通信といった基幹産業はすべて政府直営か、政府系の企業が押さえていたのだ。

製造業や小売業でさえ、これといったものはすべて政府系組織が運営していた。

個人レベルで、企業レベルで、庶民ができる商売といえば、小さな商い、小さなサービス業程度のもの。

仮にその商売が上手くいっても、少し大きく成長するとたちまち政府に飲み込まれてしまう。

安定した職業といえば、政府の役人か、政府系企業で働くことしかない。昔と変わらないと言えばそれまでだが、その存在は絶対的なものだった。

そして、政府に勤めるということは、常に政府に監視される存在になるということと同義だった。

当時、俺はまだ、世を捨てていたわけではない。  
自由でありたい。

そんな淡い気持ちを失いたくはなかった。

俺は兵士になつた。  
食べていくために。  
自分らしく生きていくために。

ただ、兵士のなるのはこれが初めてではない。  
むしろ慣れた職業だといえる。

兵士をしながら、チャンスを待とうと思つたのだった。

しかし、チャンスは訪れなかつた。

ただ、それだけのことだ。

その間、俺はどんなやつと出合つただろう。

レイチェル……。

その名を記憶の中にいくら転がしても、何かに触れることがなく、どこかに消えてしまつ。

ニコーキーツでのことだらうか。

あるいは一オールド前か、いや、もつと以前か……。

会談の代表に指名されるのだから、それなりの地位にある者だろうが……。

しかし、俺にはそんな地位も何もない……。  
今も昔も……。

思い出そうとする行為。

次々と記憶を失くしていくものにとって、それは身を無理に捩るような鈍い苦痛ともいえる。

ンドペキは街へ出た。夜の食事に。歩きながらも、思い出そうとする。しかし、その努力はいつも空しい。いつのまにか、記憶をまさぐるのではなく、意味のない思念にふけつていくことになる。

堂々巡りするだけの思念に。

人は誰しも、環境によつて作られる。  
世界中に誰一人、自分と同じ人間はない。

同じ境遇に育つたからといって、同じ志向性を持つ人間になると  
は限らない。

しかし、子供の頃の思い出が楽しいものであるうとなからうと、  
それは、自分が今の人間になつた大きな要因となるはず。  
懐かしく思い出すこと、思い出すのも嫌なこと、甘酸っぱい思い  
出、悔しかつた思い出……。

そういうつともろもろの記憶が積み重なつて、自分といつものがあ  
るのだ。

そういう考えるとき、記憶を失くした人間の、なんと悲しく、なんと  
薄っぺらなことか。

生きていくことの意味とは、多感な子供の時代に蒔かれた種が發  
芽するように、膨らんでいくものではないのか。

幼い頃の、心がまだ若かつた頃の記憶を失くしたものにとつて、  
生きていくことは、土に埋もれたしゃれこうべがかすかに縮みなが  
ら石となるのを待つようなものではないか。

延々と続く生。

それは謳歌するものではない。

むしろ戦慄の頸木。

死ねども死ねども、自動的に再生される命。

泡沫のように、微かな意味さえ見出せない生。

鼓動、呼吸、思考、それらすべては自らの意思なく、ただ繰り返  
すのみ。

生かされているのだ。

永遠の囚人として。

しかし俺は、何に囚われているというのか……。

レストランのプライベートブースに入る。

六十センチ四方の小さな空間に籠って、咀嚼するだけの食事。その間も、俺の思念は留まるひとなくへるへると回り続ける。轍に嵌った車輪のようだ。

習慣となつた同じ小径を。

サリを殺し、その筋によつて、血の生に終止符を打つとした。

しかし、サリは消えた。

いや、俺がやつたのか。

そんな記憶を、おぼろになつてしまつたところのか。

ところが、罰も受けずに俺は生きている。

もしさ、明日の会談のために生かされているといつのか……。

チヨシトマ。

あいつは、サリと同様、俺になついている。

あいつを殺すか。

かなり難しいが……。

いつの頃からだらう。

枯れることのない自死への渴望が、これほどまでに大きくなつたのは。

妄想をもてあそびながら、ンドペキは街を歩いた。  
暗い裏路地から、華やかな表通りへと。

縫つようにして歩き回る兵士を気に留めるものはない。

ンドペキとて、田的があるわけではない。

もちろん、出会いを求めてのことでもない。

妄想を昂ぶらせないため。

意識を弛緩させるため。

そして、正気を保つため。

「ヨーキー」一番の繁華なエリアに差し掛かる。  
賑やかなオープンカフェが軒を並べている。  
顔を隠すことなく、生の声で話し込む人々。  
通り過ぎる者たちからは、笑い声も聞こえてくる。  
マスクをしているものもいるが、総じて無頓着だ。  
彼らも、政府に傍聴されていることは知つてはいるが、だからどうだといつのだ、といつ諦観がある。

「む

雜踏の中に、見覚えのあるコスチュームを見た。  
クシではないか。  
すぐに見失つたが、胸騒ぎがした。  
戻つてきていたのか……。  
チヨットマを襲つた者はやはり、あいつ……。

クシは元仲間だった男である。

手誰の兵士で、戦闘のために生まれてきたような男。  
隊員であるといつ以前に、ひとりの戦士だった。

仲間という意識はなく、常に単独行動。

作戦にも加わらない。

ただ、東部方面攻撃隊に属しているといつだけ。

仲間が危機に陥っていても、我関せずを通す。

見殺しにするばかりか、自分の戦闘を優位に進めるためには仲間さえ殺しかねない冷酷さを持つ男。

業を煮やしたハクシュウが、除隊処分にしたが、それを恨んでいた。

ただ、他の街に移り住んだと聞いていたが……。  
クシがチョットマを狙つた理由は分からぬが、もしかするとサ

リをやつたのも……。

と、そのときだ。

スコープに文字が流れた。

「振り返らずに歩け！」

メッセージはキューートモード。文字データに変換した言葉を伝える方法だ。

情報量が少ない分、微弱な電波で送れるが、近接した状態でないと届かない。一種の非常用通信モードで、特定者にのみ送ることができる。

ただ、アクセス用のIDは必要だ。

ンドペキのアクセスIDを知る者は多くない。

再生時に変更をしているので、東部方面攻撃隊のメンバーのみといつてもよい。

すぐに次のメッセージが流れた。

「話がある」

「見せたいものがある」

「誰だ」

それには応えず、メッセージが続く。

「今夜」

雑踏の中で送ってきたといふことは、政府に盗聴されたくないと  
いふことだらう。

きわめて短い文章が流れ、また間をおく。

「十時」

「西門を出る」

「北へ」

「走れ」

ンドペキは歩きながら、それとなく辺りを見回した。  
田を合わす者はいない。

知った顔はない。

マスクをしている者もいるが、キュー<sup>トモード</sup>で声を掛けたためのゴーグルをしているものは見えない。

「信頼してもらつていい」

やはり、どこかでじゅうらを見ているのだ。

「途中で合流する」

「誰にも言つな」

「ひとりで来い」

そういうて、メッセージは途切れた。

ンドペキは迷わなかつた。

死を決意している身だ。

この誘いが危険に満ちたものであつたが、トラップが待ち受けていようが、構わない。

メッセージは、見せたいものがあるといつ。そこに興味を引かれたのだった。

言われたとおりに、西門を出て北に向かつて走つた。もちろん、フル装備である。

夜に兵士が城門を出ても、怪しむものはいない。

東部方面隊といつことになつてゐるが、どこで狩をしようが自由だ。

しかも、東部方面攻撃隊はハクシュウ隊と呼ばれて、誰もが一目置く存在である。

城門を固める守備隊も、駆け抜けるンドペキをチラリと見るだけで、気にする様子もない。

「ユーリーの街が遠ざかり、闇の中を突つ走る。

さあ、お望みどおり、來たぞ。  
姿を現せ。

ンドペキが砂塵を巻き上げてゐる辺りは、グリーンフィールド地方と呼ばれているが、實際は草が所々に生えているだけの荒地である。

めぼしい建物もない。

掃討する対象の少ないエリアだ。

ハクシユウの訓練以外では、めつたに来ることはない。

かなり走つてから、ようやくメッセージが流れた。

また、キュートモードである。

「今、もう少し先にいる。スコープで覗いてみて。真正面にいるのが私」

「どことなく、ニアンスは女だが……。

夜の荒野を走るため、ンドペキは暗視モードにしている。

「む」

ほじなく、スコープが熱を感知した。

前方、一キロ余り。

熱のボリュームから判断すると、人間だ。

「こいつか。  
クシか……。」

徐々に輪郭が見えてくる。

ズームに姿形がはつきりと捉えられた地点で、ンドペキは停止した。

女だった。

「昨日のお面間は、ひどい」挨拶だったわね  
なるほど、あいつだ。

クシではない。

サリの検索中に出会った女だった。

「明日、あなた、代表として会談に臨むでしょ。これから忙しくな  
るかもしないから、今晩中に」

「どういうことだ」

「私が誰かつてことに興味はないのね」

「ない。話とは」

「い」では話せない

女はちょいと手を上げると、突然走り出した。

「近づかないで。それに話しかけないで、ついて来て  
ンドペキは追つた。

「見せたいものは、い」にはないから

おおよそ三百メートルの距離をあけてついていった。

「やうやう、GPSはオンにしちゃダメよ。まさか現在地を捕捉さ  
れるものは切つてると思つけど」

数えるほどしか星のない暗い夜だった。

女はみるみるスピードを上げていく。

緩やかな起伏が続き、時として前を行く女を見失いそうになる。  
なぜか、女の姿はスコープに映し出されなくなり、肉眼で追うし  
かない。

一時間ほど走り、百キロは来たらうか。

再び女が口を開いた。

ラバーモードに切り替えていた。特定の者にだけ聞こえる音声通信だ。

「約半分ね」

「どこへ行く」

「向こうで説明する。でも、道順は覚えておいてね」

「なぜだ」

「きっと、次はあなたが人を案内することになると想つから」

それから、女とソドペキはポツリポツリと言葉を交わした。

「このあたりは政府の監視カメラも通信傍受システムも手薄よ。衛星の監視はあるけどね」

「もつと距離をとれない? ペアで動いていると思われたくないから」

「このあたりは、左手に川が迫ってるわ」

「暗くて見えないけど、昼間だと前方に川の山脈がよく見える」

「この大きな木は、カエデ。目印よ」

「この廃屋は発電所の跡。このあたり、昔は風力発電の風車がたくさん立つてたのよ」

といった内容ばかりで、肝心のことになると、後でね、と声の調子が変わっていた。

だつた。

登り坂になってきた。

地面は砂礫の荒地から、巨石が積み重なった地形に変わっていた。ふたりとも空中走行のため、地面の状態は支障ではない。

突然、森に入った。

オレゴーナ地方の入り口まで来たということだ。

「もう、離れていなくても大丈夫」

女が立ち止まつた。

ンドペキは女に近づいた。

「休憩する？ そんな必要はないわよね」

女がまた走り出した。

ンドペキもすぐ後に続く。

径を辿つてゐるのか、女は迷うそぶりもない。

深い木立に遮られ、星の光は届かない。

暗闇に一寸先も見えはしないが、女の位置がスコープに映し出されるようになつていた。

その白い点は、大きく弧を描いて移動することはあっても、小さな進路変更をすることはなかつた。目的地に向かつて一直線に進んでいるようだ。

白い点。

つまり、非戦闘員である。街の住民で、どの隊にも属していないところとなる。

しかし、これだけの走行ができる市民は多くはない。

「道順は覚えてる？」

「自信がない」

「大丈夫？」

「一応、走行モニタで記録していい」

「それって、やばいんじゃ……。どこか別のところに情報が蓄積されるってやつじゃないの？」

「いや、通信機能はない。ここに蓄積される」と、ンドペキは自分のヘッダーをつつこてみせた。

「なんだか、怪しいな。絶対に誰にも知られないようにして。こぞとこう日までは」

「なんだ、いざといつ日ひてのは

「それは私にもわからない」

「じゃ、誰がわかっているんだ」

「つづん、たぶん、その必要があるだろつづん」と

女はそういうと、一段とスピードを上げた。  
ンドペキはついていくのがやっとで、短い会話はそれで打ち切り  
となつた。

いつしか深い山地に分け入つていた。

ンドペキが荒野を突つ走つているところ、生駒は気を揉んでいた。

今日、まだ綾の訪問がない。

もうとつぐに来てもいい時間。

いつもなら、仕事帰りといつ時間帯に綾は顔を出してくれるの。

いや、まだ、十時。

落ちつこう。

就寝時間まで、まだ間がある。

午前零時になれば自動的に思考が停止してしまつが、それまでには来てくれるだろう。

きっと、仕事が忙しいのだ。

重大な会談前夜のことでもあるし、政府機関内は右往左往してい  
るのかも知れない。  
綾も帰るに帰れない状態かも知れない。

今夜は無理かな。

しかし、綾の身によもや何かあつたのではないかといつ悪い予感

も、拭いきれないでいた。

交わした会話の中に、監視システムがアラームを発するようなことがあったのだろうか。

## ハクシユウの情報？

抱き合って涙を流したこと?

綾がパパと呼ばずに、おじさんと呼んだこと？

そもそも、連日アクセスしてきたこと？

考へ出すと、不安で堪らなくなるのだった。

同じころ、チョットマは「リネルスから仕入れたクシの情報を反芻していた。

けつ、卑

卷之三

それはして  
何たて和が  
恨むなハグシニウた

でも、蛇みたいに執念深いやつだつたら、嫌だな。彼がいふように、警戒だけはしておかないどね。

チヨシ・スマホベ、まほ、わべり、まほ、わべりと呟きながら、ベッドに潜り込んだ。

だ。

なぜ、蛇は執念深いって言われるんだろ。

蛇がどんな動物なのか、知らないし。

そして、ものの三分もしないうちに、寝息をたて始めた。

## 25 ドレスの色

「着いたわ」

あたりは漆黒の闇。

ここだと言われても、心もとない。  
ンドペキはかすかな光を灯した。

「お疲れさま」

女の声が和らぐ。

が、その瞬間、姿が消えた。

「落ちないでね。三十メートルほどあるから。梯子もあるけど、大丈夫でしょ」

岩の隙間に、人ひとりが通れるほど の隙間があつた。  
ここに入つていいくのか、ヒンドペキは少々たじろいだ。  
ここへ来るまでに、女を警戒する気持ちは失せてしまっていた。  
戦えば勝てるかどうか微妙なところだが、相手に戦意はまったく感じられない。

しかも、まるで旧知の間柄のように接していく。

言葉遣いは、親しみがあるようでないようで、妙だが。

信用しているとはいえないまでも、少しの親しみが湧いていたのだ。

「底の地面は、傾斜になつているわ」

「ああ」

「手前に降りるんじゃなくて、前方へ飛び降りてね。手前はコウモリの糞が積み重なつていてるから」

女の声が隙間の中から聞こえてくる。

ここへ連れて行こうとしているのだろう。

そして何のために？

「了解」

と、ンドペキは洞窟の中へと舞い降りた。

降り立つた場所は、大きな一枚岩が稜線を走らせ、前後に広い急な斜面を作っていた。

確かに、注意して降りなければ、コウモリの糞の堆積物に嵌まり込んでしまうだろう。

「強烈な匂いだな」

ンドペキはマスクの有毒ガスシールドを張った。

「まあね。でも、ここだけ。奥は快適」

ついて来いと顎で合図をして、女は更なる深みへと続く小さな通路に入つていく。

「ゆづくじ。無理しないで」

通路に電灯が灯された。

「近代的でしょ。大変だったのよ。この工事をするのは」

通路は下り坂で、曲がりくねり、時として数メートルほどの落差があつた。  
巨石の隙間に偶然できたような通路で、いたるとこりで岩盤が前方を塞ぎ、そのたびにわずかな隙間に体を入れなければならなかつた。

ただ、空気は乾いているようで、前を進む女のたてた砂埃が、電灯に照らされてキラキラと舞つた。

ふたりはゆづくじと下つていった。

「到着！」

狭い通路を抜けて、広い空間に出た。

バスケットコートが一面ほど入る程の空間だつた。

半分ほどは岩盤が露出し傾斜していたが、奥の方は玉砂利が敷き詰められたように真平らだつた。

天井は高く、足音が響く。

右手の壁に沿つて、水が緩やかに流れていた。

平らな部分の中央に机が設えられてあり、その周りに椅子が八脚。中央に置かれた燭台がひとつ。

白っぽい岩肌の壁には、ブラケットが十燈ほど。空間はひんやりとして、静まり返つていた。

「どう？ この大広間」

女はそう聞いてきたが、答えは期待していないのか、かすかな溜息をついて椅子に腰掛ける。

ンドペキは突つ立つたまま、改めて女を見た。

軽装のバトルスーツを纏つている。

現在主流の、絹のようにしなやかな素材。

ナノカーボンの超伸縮性スーツだ。

編みこまれた金属が放つ緑がかつた光沢が、この洞窟の大広間の中では存在感を際立させていた。

チタン合金のように見える肩当やブーツには、ピンク色の花模様。ヘッダーとスコープ付きのゴーグルは一体型で、こちらも合金製だ。

目の部分にはめ込まれたガラスはハイグロスの光沢仕様で、これも緑色を放つていた。

「ん！」

ンドペキは身を硬くした。

女がヘッダーを外そうとしている。

耳の下から順に、留め金を外していく。

女はこちらを向いている。

ンドペキは、背中に汗が吹き出でくるのを感じた。

女の手がヘッダーを持ち上げる。

金属の装甲の下から現れたマスク。

純白で、頭部までタイトにフィットするフードタイプのものだ。

鼻の部分に装着されたプロテクターだけが異様に尖っている。

女の小さな頭部がにこりと笑った。

他人に肌を見せることはおろか、表情を読み取られることも慣れていないンドペキにとって、この状況は緊張を強いられるものだ。マスク姿の女の顔を見つめた。

目の部分にはグラスが嵌まつていなかつた。

目が合つた。

その目元は、微笑んでいるように見えた。

黒い瞳が瞬いた。

女は視線を外そつとしない。

ヘッダーを机に投げ出すと、あっさり、マスクを剥ぎ取つた。流れ出した長い黒髪が揺れて、光を放つた。

ンドペキは女の顔を凝視していた。

女もひと時も目を離さず、見つめ返してくる。

やがて、スーと息を吸い込んだかと思つた、立ち上がりて口を開いた。

「私が武器を持っているから、あなたはそこまで突つ立つてこらのね」と、バトルスーツを脱ぎ始めた。

「いろいろと仕込んであるからね。スーツ」と脱がなきゃ、信用されないわね」

思わずソドペキは、声を掛けた。

「いや、そういうわけじゃない」

「じゃ、なぜあなたは女が素肌を見せてこるのに、そんなものをかぶつたままなの?」

「う」

言葉に窮する間にも、女はスーツを脱いでいく。

「しかし、何も聞かされないで、ここまで連れてこられた」

「だから警戒するのは当然だつて?」

「いや、警戒というのは違う。何がどうなつてこるのかわからぬ」

「そうよね。そうだと思つ。でもね」

女がバトルスーツを投げ捨てた。

「私を信用しようと囁つたでしょ」

女は白いドレスを身に着けていた。

「どう? 驚いたでしょ。ピッタリフィットの花柄の下着だと思つた? はい、もう武器は持つてないわよ」

ソドペキは、おんなといふ武器は持つているじやないか、といつて軽口を思つたが、我ながら下品だと思つた。

しかし、気分はほぐれた。

しかも、女の声は電波を介していない。  
柔らかい声だった。

ンドペキの喉から、思わず吐息が漏れた。

ひと言一言話しただけで、緊張感が緩んでいたのである。

「さあさあ、もういい加減に、そのきらびやかなステッズは脱ぎなさいよ。せめて、お顔は見せてね」

女はどこから出したのか、飲み物を手にしていた。よく見かける清涼飲料水のボトルだ。

「そして、そこに座つて。話さなきゃいけない」と、たくさんあるわ

女は樹脂製のボトルから、グラスに水を注ぐ。

そうする間も、田をそりゃすことなく見つめてくる。

少しの間が空いた。

ンドペキは観念した。

田の前で装甲をすべて外し、それらを机の上に置くと、女の前に座つた。

なんともいえない落ち着かない気分だったが、女はにこやかに微笑んで、グラスを滑らせてきた。

そしてようやく、視線を宙に向けた。

「さて、まずは、なぜここに案内したのかつてことから始めましょうか」

唐突に話出した。

「待て。まず、君が誰なのか、とこつといふから始めてくれ」

女は、すっと顔を近づけてきて、

「わからぬかなあ」と、笑った。

フッと、いい香りがした。

「でも、それは最後に。そう決めているの」

女が話してくれたことは、ンドペキには雲を掴むようなことばかりだった。

内容があいまいだったからでもあるし、実感が伴わないことも多かったからだ。

この場所は、近い将来、ンドペキとその仲間達にとって、重要な拠点になる。

この広間以外にも多くの部屋があり、食料や日用品などもひと通りは蓄えられている。

政府のいかなる機関にも、所在は探知されていない。

近くに建造物はもちろんのこと、街道もなく、周りに兵器も配備されていない。敵のマシンの出現も比較的少ない。

広間の中を流れる水は、やがて大きな川に注ぎ、海へと至る。この洞窟へのアプローチは、今走ってきた道が街からの最短ルートだが、魚のように泳げるなら、水中のルートも考えられなくはない。

しかし、水流は面は穏やかでも、すぐ下は急流となつていて、人間はたちまち足元を掏われて確實に溺れる。

あつとこう間に流されて、岩の隙間を流れ去る激流に飲み込まれてしまふだろう。そうなれば、次に顔を出せるの奥の広間。ただ、そこまで息が続くものではない。

「私が、商売用に使つてゐる場所なんだけれどね。ンドペキにも使ってもらひたらいいな、と思つて」

「おまえの商売といつのは?」

「ンドペキがそう言つ間に、女は立ち上がりつてゐる。

「それは内緒。今はね」

そして、足早に大広間を横切つていく。

「一緒に見て回つた方がわかりやすいから。あ、武器は要らない」

「しかし」

「ンドペキは、武器を持たずに歩くことはしなかつた。たとえ街中であつても、小火器や短剣程度はいつも身に着けてゐる。

「ここは、私の仕事場だと言つたでしょ」

「ああ」

「誰にも邪魔はさせないし、ここで血を流させはしない」

女は、後姿を見せたままピシリと言い放つたが、振り返つた口元には朗らかな笑みがあつた。

ンドペキは女について、洞窟内を見て回つた。

「そこの湧き水が飲めるわ」

「発電設備はここ。水力発電なの。かなり優秀よ」

「ここに食料を溜め込んであるわ。一応、五十人が三ヶ月は頑張れる程度の量ね」

「この通路には、小部屋がたくさん並んでる。寝室にビーチ。毛布くらいは運んであるから。床が固いから寝心地はいいとはいえないし、ドアもないけど」

「この部屋だけは、誰も入れないでね。私の寝室だから。かなづくノックすること」

「キッチンはここがいいわよ。煙が抜けていいてくれるから」

「ほら、ここ、いいでしょ。露天風呂の気分じゃない? この穴に

お湯を入れて、湯加減は川の水で薄めてね

「どんなものが必要なのか分からなかつたから、武器弾薬の類はまだあまり用意していないわ。リストを作つてくれたたら集めておくけど」

「エネルギー・パッドはここに積んであるわ。すべて満タン。汎用タップのものだけど

まるで、ふたりの新居を案内するように、女は案内してくれる。踊るよつに歩き、歌うよつに喋つて。

人といふとき、その人と一緒に居るだけで楽しい、といふのは大切な感覚だ。

それがなければ、たとえどんなに面白い話をしようが、美しいものを見ようが、いい仕事ができようが、場合によつては抱き寄せたり、キスしようが、すべては虚しい。

この女から発散されている、一緒に居るだけで楽しい、といふシンプルだが基本的な心情に、ンドペキも感染していた。

同じ気持ちが、ンドペキにも芽生えていたのである。

しかしながらペキは、フムと頷いてばかりで、冗談を言つみつなかつた。

何しろ、ここをなぜ使つことになるのか、まったくわからないのだ。

しかも女は、ここに籠城するかのような口ぶりである。女が解説してくれることに、どのような反応をすればいいのかわからなかつた。

「本当は、使わない方がいいのにね」

「じゃ、なぜ、こいつのことをする」

「そういう運命なのよ、きっと」

女はそう言つて、溜息をついた。

「さ、大切なところに案内するわね」

ふたりが向かつた先は、洞窟の奥部だつた。大広間に比べると、ふた周りほど小さいが、比較的広い空間があつた。

「バレーボールコートくらいだらうか。天井もそれほど高くはない。瞑想の間つて呼んでるわ」

「やたら広いところで瞑想するんだな」

「そうよ。真ん中にラグを敷いてね」

「ここにも水が流れている。流速はあるかないかという程度だが、かなり深い。光は底まで届かず、黒々として、何者かが潜んでいるような気もした。

ここにも照明が灯されてあつた。家具の類はない。出入り口は一箇所のみ。

「ここから先は、行かない方がいいわ。理由は危険だから、とだけ言つておくけど」

「恐ろしい魔物がいるつてわけだな」

「ま、そういうこと。魔物というのとはちょっと違うけどね」

「そいつが、こっちに出てくるつてことはないのか」

「来ないわ。彼は自分の持ち場を離れないのよ」

「彼……、了解」

「ただ、万一一の時には、ここを抜けていくのよ。とても長い長い通路が続いているわ。洞窟のもう一つの隠された出口に繋がっているはず」

「行つてみたことはないんだな」

「だつて怖いじゃない。もしもよ、本当はどこにも出口がなかつたら、と思うとね。奈落に繋がっているだけだつたら?」

女が肩をすくめて、顔を近付け、真剣な目をした。

森羅万象、あらゆる物質を溶かしてしまった有毒ガスが充満しているどうする？

一瞬にして生氣を吸い取つてしまつ、恐ろしい化け物が行く手を阻んでいたらどうする？

逃げる間もなく天井が落ちて、ペッシュシャン口に押しつぶされる仕掛けがあつたらどうする？

女が恐怖の例を並べた。

「もつと恐ろしい場合もあるよ

悪夢が現実になる魔法がかかっていたら、どうする？

どんどん若返つて赤ちゃんになつて、最後は消えてしまつ魔法がかかつていたら、どうする？

「怖いじゃない」

「しかし、万一一のときほそこを抜けろと。きっと希望が開けるはずだと」

「そうこう」と

女はソンドベキの田をじつと覗き込んだが、すつと視線を外すと、帰ろうとこう仕草をみせた。

「さ、あなたが先に歩いて。ちゃんと大広間まで帰れるかどうか、テストするから。通路がたくさん枝分かれしてたけど、間違わないよね」

「間違わないよ。メインストリートにある照明器具にはバラの模様の刻印があり、脇道は剣や月や星だ。稻妻みたいな模様もあつたな」「あ、すごい。観察力はやっぱりあなたね。へへ、それを説明する

のを忘れてた」

大広間まで戻る途中、女は明日の会談のことに話題を向けた。  
交渉は同行するものに任せて、ンドペキは黙つておればいいといつ。

ただ交渉が、それは違つ、といつよつな方に向かつたときには、  
自分の正しいと思つ行動をすればよいともいつ。

「相手は、女性ひとり。こいつも女性ひとり。あなたは一応はこち  
ら側だけど、正義の使者として立ち会つといつよつな役割ね。大げ  
さにいえば」

「何の交渉なんだ」

「それは話せない。条件によつて、様々に変わるかもしれないから。  
ただ言えることは、相手は好戦的ではないといつこと」

「ノドペキは彼らを見たときのことを思い出した。

川原や森の中で静かに暮らしていいるよつな穏やかな「ローラー」。  
黒く大きなアンバランスな肢体。  
水の上を労なく歩いてきたもの……。  
「彼らはただ、存在を認めて欲しいだけだから」

## 27 落とした涙の色

大広間に戻つてきた。

先ほどと同じように、しんと静まり返つていた。

脱ぎ捨てたスーツも武器も、そのままの状態にある。

テーブルも椅子も、ボトルもグラスも誰かに触れられた形跡はない。

電灯はほのかな光を変わることなく投げかけ続けている。

しかし、ンドペキは胸騒ぎを覚えた。

大広間からいくつか伸びている暗い通路。

その通路に誰かがいて、こちらの気配を窺つているような。

ンドペキは何食わぬ顔でテーブルに近寄り、いつでも武器を手にできる位置に立つた。

女は明日の会談について、さらに、

「でも、あなたには覚えておいて欲しいことがあるわ」と言つ。

そして、イスに腰掛け、グラスの水を飲んだ。

「簡単なことよ。交渉相手を注意深く見ること

女はそう説明したが、心なしか、顔が青ざめていた。

それきり黙り込んでしまつた。

ンドペキの兵士としての感触が、何者かの存在を告げている。

幸いに、敵意は感じられない。

ンドペキは周囲に注意を払いながら、女を見つめた。

女は、くるくるとよく動く瞳を閉じていた。

先ほどまでの闊達さはどこへやが。

悄然として、睫毛を伏せている。

何から何までわからない女だ。

しかし、ンドペキには、いとおしいといつ感情が生まれてもいた。

ふと、この女と以前会ったことがあるかもしない、といつ気がした。

失われた記憶の時代に。

「ところで、おまえの名は。そもそも聞かせてくれてもいいんじゃないか」

女は、大きく溜息をついて、肩を落とした。

グラスをテーブルに置くと、両手を膝に揃えた。

そしてまた吐息。

「これだけ、一緒にいて、話もして、私の顔を見て、私の声を聞いて、思い出さないんだね」と、顔を上げずに言った。

指先が震えていた。

きれいな爪をしていた。

そこにぽつんと涙の粒が落ちた。

やはりそつだつたのか。

ンドペキは、自分の記憶の浅はかさを呪つた。

「すまない」

自分の恋人だつた人だろうか。あるいは妻だつた人だろうか。

言葉遣いからすると、娘といふことではなかつたよつだ。  
まさか、母だといふこともあるだらうか。いや、それはないはず。

あるいはかつて所属していた部隊の仲間……。  
それなら涙を見せる」ではないだらうし、素肌を見せる」ともな  
いだらう。

答えの見つからなこまま、ンドペキは女の手に触れよつとした。  
しかし女は、すつと手を引っ込んでしまひ。

それはそうだらう。

いといし人だつたであらう者の名前も顔も忘れて、手をとつたと  
いひで、どんな言葉を掛ければいいのだ。

「私の肌に触れたからとこつて、思い出しそつもないからね」

女が顔を上げた。

赤い目にもう涙は溜まつていなかつたが、切ない目をしていた。

「それに、叱られちゃうから」

そして立ち上がつた。

「そろそろ帰らなくちや。明日は大事な仕事なんだから」

「ああ。で、誰に叱られるつて?」

「自分で確かめてね」

女は、自分の部屋に残ると言つてきかなかつた。

何者かの存在を感じると説明しても、そんなことはないと取り合  
おつとはしなかつた。

「今晚のことは、誰にも言わないで。そのときが来るまでは、椅子から立ち上がるうとさえしなかった。

表情から笑みは消え、苦悩だけが張り付いていた。

「気をつけるよ。何かが我々を見ている」

ンドペキはそう言い残し、後ろ髪を引かれる思いで大広間を後にした。

ああ、情けない記憶力。

傷付けることしかできない自分には、そこに居続けることはできないことだった。

「私のこと、もう忘れないでよ」

振り向くと、女が小さく手を振ったのだった。

忘却がどれほど大きな罪か。

そんなことを考えてしまった自分のセンチメンタルに嫌気がさしながら、街へ向かつて疾走した。

「しまった。約束とは」

今更、聞くべきことを思い出しあしたものの、相手を思い出しあしないのだから、交わした約束など何の意味があるだらう。

ンドペキはひとりで街に向かつた。

月が出ていた。

周りの景色が目に入った。

深い山の中で、木々がうつそうと茂っていた。

洞窟の入り口の岩の隙間は、そうと言わなければ、深い洞窟の入り口だとは思えないほど、自然の風情を醸している。頼り気なく、木々の縁に覆い隠されていた。

ンドペキは会談の朝になつて、政府の人間の訪問を受けた。ドアをノックしたのは、若い女だつた。

古い劇画でしか見たことのない、簡素な丈の短い白いワンピースを着ていた。

端正な顔立ちに薄い化粧。かすかに立ち上る甘い香り。防具や武器は身につけておらず、腕や手はおろか、顔も白い肌がむき出しだで、長い黒髪を持つていた。

女は部屋に入ろうとはせず、ンドペキを連れ出すと待たせてあつた飛空挺に乗せた。

中に、ンドペキを待つていた女がいた。

この女も案内役の女とよく似た雰囲気を持っていた。

輝くような白金の髪を、流れるようにシートに広げている。じちらも白いワンピースに白い革のベルト。

ただ違つ点といえば、素足に革の編み草履を履いており、仮面をつけていた。

大型のサングラスの縁に大きな鳥の羽根の飾りが付いたマスクで、ンドペキたちが使うような己を隠すスキンマスクではない。

薄いブラウンのレンズの中に、エメラルド色の瞳が見えていた。

女が向き直つた。

裾が乱れ、膝小僧が見えた。

「はじめまして」と手を出してくる。

「俺はンドペキだ。あんたは？」

「レイチェル」

女は、エメラルド色の波を瞳に揺らめかせた。

ンドペキは緊張した。

すでに装甲を身につけている。

「いついた金属の手で、女の手を握るわけにはいかない。

普段ならそう思はずもないが、相手から発せられる高貴なに気圧されて、ンドペキは腕の装甲を外した。

女は手を差し出したまま、微笑んでいる。

握った手は暖かく、思いのほか力強かつた。

彼女が見せた表情は、長い間忘れていたものだった。

マトやメルキトが見せる表情は、どこか表面的で一的だったが、レイチャエルと名乗った女が見せた表情は違う。

あいまいで頼りなげで、しかも「心」を垣間見せるものだった。

飛空挺は、かすかな空氣音をたてて浮き上ると、たちまち街を抜け、城門を抜けた。

普段は街の中で見ることはない乗り物である。

他の街へ移動するときに利用される飛空挺とは違つて、かなり小型だ。個人用の乗り物なのだろう。

豪華な装飾が施されたシートがわずかに六席、前後三列に並んでいる。

運転手と案内役の女を除いて、誰も搭乗していなかつた。

レイチャエル。

どこかで聞いた名だ。

そう思つたが、それを聞く前に、レイチャエルが口を開いた。

「今は挨拶は抜きにしましょう。今日のことですが」と、それまで握ったままだった手を離し、前を向いた。

飛空挺は瞬時に高度を増していく。

地上五百メートルほどの高度で、水平飛行に移った。

「あなたは黙つて見ていてくださいって結構です。ただ会談の中で、万一、間違つているとお感じになつたら、そのときはその場でおつしゃつてください。私はあなたを信じています。あなたがおつしやることを、私は信じます」

初対面の女にやう言われ、ンドペキは戸惑つた。

今から行われる会談がどういづ性格のもののか知らないし、相手が何者かも知らない。

そもそも、隣に座つている女が誰なのかも知らないのだ。

「しかし、俺は」

「なにも聞かないで。あなたには、あなたらしく判断して欲しいのです」

レイチエルは厳しい表情をしてくる。

「ノドペキは何も言えなくなつた。

この女は、兵士ではないし、街の住民でもない。

会談の代表を務める上は、政府機関上層部の者だろう。

それは、彼女の奥深い表情を見てもわかるが、それ以上に彼女の苦悩がわかつたからだつた。

「わかつたよ」というのが精一杯だつた。

レイチエルが、

「よろしくお願ひします」と、髪を押さえて頭を下げる。

しかし、どうしても聞いておきたいことがあつた。

「しかし、なぜ俺が」

「さあ、それは向こうの希望ですから。でも、私はあなたが指名されてよかつたと、心から思つています」

レイチャエルは、エメラルドの瞳に微笑みを見せたが、すぐに前を向き、唇を引き結んだ。

信じられても困る、とは思つたが、もつそれを口にする雰囲氣ではなかつた。

シリー川の稜線には、これまで戦したこともない戦闘機がずらりと配備されていた。

この個人用の飛空挺を一回り小さくしたサイズで、各機にミサイル砲が装着されている。

まだこんな武器があつたのかと思つほど日本式な部類だが、これだけ数が揃うとそれなりに壯觀だ。

「街の防衛部隊本隊か？」

「そうです」

「これまで、戦つたことはあるのか？」

レイチャエルは、あどけないと思つほど眉をひそめ、唇を尖らせて困つた顔を見せた。

稜線からシリー川の川原にいたる山腹には、幅十数キロに渡つてすでに軍が展開していた。

「ヨー・キーツの街にこれほどどの兵士がいたのか、と誰もが思ったことだらう。

「約一千。防衛隊とあなた方を合わせた、ニューヨークの全軍です。ただ、一般人も混じつているようだ。

兵士の格好をしただけの者もいるだらう。

双眼鏡を首から下げたやつまでいる。

「このように全軍で行動したことは、ここに百年以上もありませんでした。よくこうして展開できたものだと思います」

レイチャエルも分かっているのだ。

これは張りぼてのようなものだと。

飛空挺は、全軍にレイチエルを見せるかのよつこ、山腹を一度ほど往復して、川原に設けられた急<sup>いそ</sup>しらえの木製のステージに機首を向けた。

「私は、こうまでする必要はないと思っていたのです。いざとなつたら、あなた方が頼りです」

「あんたを守るのは、防衛隊の仕事じゃないか。我々は攻撃専門だ。むしろ、防衛隊には我々を援護して欲しい」

レイチエルが微妙に笑つた。

ンドペキの属するニューキーツ東部方面攻撃隊は、会談場の直近と川原に添つた最前列に展開していた。

一斉攻撃態勢をとつてゐる。

会談場の直近には、それをとり囲むように囲<sup>いざな</sup>くめの一団。

レイチエル騎士団と呼ばれる親衛隊だ。

会談場のレイチエルを守る目的の陣形だ。

会談場のステージ上空に差し掛かると、ハクシュウの顔が見えた。ステージのすぐ横にいる。

ひらりと手を上げてみせたが、何も言つては来ない。

チヨットマはかなり下流で、彼女には似合わない大きな砲銃を構えて、それを大きく振つてみせてくれた。

レイチエルは、チヨットマをチラリと見やると、

「いいですね、あなたには仲間がたくさんいて」と、微笑んだ。

今まさに会談が始まり、場合によつては経験したことのない戦闘が始まつうかというときに、何を呑氣なことを。

「失礼だが、あんた、大丈夫か?」

「心配ですか？」

「ンドペキは正直に言った。

「何が始まるのか知らんが、あんたひとりでのステージの上で、得体の知れないものと対峙するんだろ。実は、お膳立てはもうできているのか？　あるいは、なにか考へでもあるのか？　俺が聞くことではないが」

「お膳立てなんて、ないですよ。私には考へはありますけど」

と、レイチャエルがンドペキの一の腕を軽く叩いた。

そういう仕草が心配なんだよ、と言いかけたが、たちまちレイチャエルが厳しい口調になる。

「全軍の指揮権は私にあります」

「む」

「私に万一一のことがあつた場合には、ハクシユウに指揮を執るよう伝えています」

そう言われて、ンドペキは改めて心を引き締めた。レイチャエルに全軍の指揮権があるのなら、従わねばならない。今までの口調は上官に対するものではなかつたと知つて、ンドペキは不必要なほど姿勢を正し、前を見た。

「武器は外してください。これは平和的な会談です」

レイチャエルにたしなめられ、ンドペキは従つた。

「はい……」

対岸には、人つ子ひとり見えなかつた。

彼らは森の中に潜んでいるのだらう。

それに対して、こちらの軍勢はまるで姿を隠すといひはない。標的を晒して突つ立つてゐるようなものだ。

飛空挺は急角度で高度を落としていく。

ンドペキは、スコープのモードを変更して、森の中の相手を確か

めようとした。

チラリと垣間見たものは、予想を大きく外れたものだつた。

森の中では一昨日見たときのようにも多くの者がそれぞれに働いていたが、会談などどこ吹く風のようだつた。

戦闘的な姿勢をとつてゐる者はなかつたし、会談場に近いところに終結してゐる部隊らしきものもない。

平和そのものといつた風だつたのだ。

それに反して、それが見えてゐるはずのユーローキーツ軍は銃器を水平に構え、瞬時に戦闘に入れる体勢をとつてゐた。

飛空挺がステージの脇に降り立つた。

約束の正午まで、後一分。

眼前にシリ一川が濁流を伴つて流れている。

空を反射して、時折り波頭が白く光つた。

レイチャエルとンドペキは言葉を交わすでもなく、黙つてステージを登る。

レイチャエルがハクシュウに田で合図を送る。

「全軍、武器を收めろ!」

ハクシュウの声が響き、水平に並べ立てられた銃器が下を向いた。

なるほど、レイチャエルが指揮官で、ハクシュウはその副官。

彼らの間ではすでに作戦会議が持たれ、それが全軍に伝わつてゐるといふことだ。

ンドペキは自分には知られていなかつたことに苛立ちを覚えたが、それと同時に、ハクシュウの昇進に晴れがましさも覚えたのだった。

対岸を睨んでレイチャエルと並んで立つ。

自分の無防備さが心許なかつた。

レイチャエルに聞いておきたいことは山ほどあつたが、もつそれを口にする場面ではない。

ニューキーツの軍勢は静まり返り、幕が上がるのをジリジリとした思いで待つていた。

と、空気が動いた。

目の前の景色が滲んだかと思った瞬間、目と鼻の先に黒い影が浮かびあがった。

体中のアドレナリンが一気に濃度を増し、思わず身構えそうになるのを堪えて、目の前に現れるものを見つめた。

影は、瞬く間に形を成した。

そこに立っていたのは、一昨日見た黒い生き物だった。

身長、約一メートル五十七センチ。

ずんぐりとしていて、まるでアオバズクが突っ立っているようだ。黒いとは思ったが、頭部や脚を除き、蜂の羽のような黒っぽい薄膜で覆われている。

頭部はアシカのように飾り気がない。

厚いしつとりとした皮膚で、目や鼻や耳は人間のものに近く、ずんぐりとした瞳は黒かった。

胴体から短い足が出ているが、金属的な輝きを持った黒い鱗で覆われている。指は五本あって、人間の足のよつに並んでいる。

関節も爪も、人間のものに近い。

唐突に、胴体から腕が出てきた。

腕も脚と同じように黒い鱗で覆われているが、やはり人間のよくな指が備わっていた。

ただ、胴体の大きさに比べて、アンバランスなほど短い。こいつは、先日見た「P-01」と名乗ったものだろうか。

握手を求めているようだ。

突き出された手の甲は細かな鱗片に覆われているが、手の平はやはり人間のものと同じだった。

レイチエルが躊躇することなく、その手を握り返した。双方無言で数秒間握り合つたまま、互いを見つめあう。黒いものはンドペキにも握手を求めてきた。

まともに目が合つた。

ンドペキの目はマスクのレンズに遮られて相手には見えないはずだが、ぴたりと焦点が合つていた。

射すくめられたかのように、ンドペキもその手をとつた。

金属纖維で編まれたグローブの上からでも、相手の持つパワーが流れ込んできたかのような衝撃を受けた。

相手が少し力を込めただけで、意識がかき乱されるような感触がしたかと思うと、心の中に高揚感がじわりと広がつていった。

相手は徐々に力を強めているようで、それにつれて心が押しつぶされそうな感がする。

ンドペキが力を抜くと相手もフッと力を抜き、手が離れた。

黒い者が、ゆっくり口を開いた。

口が歪む。笑つたのだろう。

「お会いできて光栄です」

若い女性の声だった。

「セルビツキ郡長官、JPO-1と申します」

レイチエルが応えた。

「私はレイチエル。ニュークリツの行政長官です。こちらは、ンドペキ伍長。街の軍団に所属しています」

相手は、さらに口を大きく開け、どうぞよろしくと言つた。

「あなたのご指名なのですから、紹介は不要だつたかしら」

「厚かましいお願ひをして、申しわけありません。お氣を悪くされ

ませんでしたでしょうか」

「いえ、そういう意味ではありません。ただ、例外的だつたようですので」

「ニューキーツの街だけが、という意味ですね？」

「そうです」

ンドペキは居ても立つてもいられない気分になつていた。  
レイチエルという女の素性はわかつた。

長官といつからには、街の最高位にあたる者だ。正真正銘の上官であるということになる。

それがレイチエルといつねであることを失念していたことが、今更ながら情けなかつた。

しかし、それはそれでいい。  
ハクシュウがその指示に従い、自分が脇に控えていてもおかしくはないだろう。

レイチエルとの身分の違いは、大いにあつたとしても。  
しかし、それ以外のことは、わからないことだらけだ。  
自分が会談場に控えているといつのは例外的な措置だといつが、いつたいなんだといつのだ。

そもそも、セルビツキ郡とはどこなのか。

地球上にそのような街はないはず。

「ンドペキ氏には、私が個人的にお会いしたいと思つたからです」  
J.P.O-1と名乗つた相手は、そういうつてンドペキをますます驚かせた。

お会いできて光榮です、などと返すのがまつとうな態度だらうか。

せめてマスクは取つて、相手に敬意を表るべきなのだろうか。あるいは、レイチエルが言つたとおり、あくまで黙つておればよいのか。

微妙な怒りが噴き上がる。

しかし、JPO-1と見つめ合つていると、不思議とその気持ちは大きくなつていかなかつた。

個人的に会つてみたいとJPO-1は言つたが、以前の自分が何かをしたとでもいうのだろうか。

今は街の一兵士であり、特別な存在でもなければ、特殊能力の持ち主でもない。

もちろん、この連中とも面識はない。

板造りのステージを取り囲んでいる軍勢は、固唾を呑んで静まり返つている。

かなり遠くに展開している部隊にも、レイチエルとJPO-1の声は聞こえているはずだ。

しかし、目の隅に映つたハクシュウもチョットマも微動だしない。

「個人的なお考えなら、聞かずにおきましょう。では、用件を伺いましょう」

レイチエルが促すと、JPO-1が視線を戻し、語り始めた。

「あなた方にお願いがあります」

ンドペキは知らなかつたが、地球上にあるすべての街で、今日の同じ時刻に同じようなスタイルで、彼らの代表と会談が持たれいるということだった。

各地の会談は、それぞれの行政庁の長が、相手陣営の代表と一対

一で会つていいという。

ニコーキーツだけが、ンドペキにも指名があつたところのことのよ  
うだつた。

「パリサイド、私達は自分たちのことを、そう呼んでいます」

JP01が話すところによれば、数百年前、地球を離れて宇宙の  
どこかにある神の国を目指して巡礼の旅に出た集団があるといつ。

「我々はその生き残り、及びその子孫です」

「神の国巡礼教団……」

「そうです。しかし、私達はもうその教義を信じてはおりませんし、  
教団という体を成してもいません。教団は消滅しました。そのいき  
さつをお話すとともに長いお話になりますし、私達が今こうし  
て話し合いを持つていてことに関係はありません。わかつていただ  
きたいのは、私達はその狂信者集団ではない、ということです」

パリサイドとは、その教団が消滅した後にできた社会全体を指す  
言葉なのだという。

「私達の社会は、人口一億人程度で、ある星を中心に活動していま  
す。その星を私達はパリと名付けました。地球上に寄る辺を持つ人類  
ではなく、パリという星を拠点としている我々は、自分たちのこと  
をパリサイドと呼ぶようになりました」

JP01は悠然としている。

表情が乏しい上に、どことなくひょうきんに見えることでそう感  
じさせるのか、ずんぐりした体型がそう感じさせるのかわからない。  
戦意や悪意があつたとしても、それは見事に覆い隠されているよ  
うだつた。

「私達の生態は、地球上に住み続けている皆さんとは大きく異なつて  
おりますが、それはこの会談が成功裏に終わった後にでも、詳しく

お話しすることになるでしょう」

JP01が、胸元の辺りから一通の封書を取り出した。

「Jリに、私達の要望事項が記してあります。今、全世界で行われてこる会談で、共通の内容です」

レイチェルは封書を受け取り、中身を改めた。

「そこには条件めいた事項も記載してあります、お願いしたいことはただひとつ。私達がまた地球上に住めるようにお取り計らいただきたいということです」

ンドペキは、それはとりもなおさず侵略ではないか、と思つたが、レイチェルの反応は違つた。

「あなた方も、地球の人類だとおっしゃりたいんですね」

「そうです。私達は地球に帰りたい、そう願っています。ただただ、望郷の念があるばかりなのです」

「あなた方は、地球でどのように暮らしたいと考えているのですか」「私達は、この体で宇宙空間に浮かんで生きてきました。暗く冷たく、宇宙線が降り注ぐ環境で。そんな環境においても生きていける肉体を手に入れることができたからです」

JP01が腕の下から、じく薄い膜のようなものを少しだけ伸ばし、ひらつかせた。

「では少し、お見せしましょう。私達の本当の姿を」と、両腕を広げた。

それが合図だったのだろう。

シリ－川の対岸から、大きな鳥のよつなものが飛び立つた。

「彼女が自分の体を広げて、皆さんにお見せします」

黒い鳥は羽ばたきもせず、一直線に上空に上つていった。

「私達は重力に縛られることはありません。数百年前に発見された

半重力物質があつたからこそ、私達は地球を飛び出すことができたのですが、私達はその何十倍もの力を持つ物質そのものを自分の体に組み込むことができました。そうして宇宙空間で、様々な星からの引力をコントロールして自分の姿勢を保ち、容易に移動することができるようになったのです

またたく間に、鳥ははるか上空に達していた。

「よく見ていてください。彼女の体を」

J P O 1 に促されて、小さなその黒い点を見つめていると、その点が横に伸び始めていた。

見る間にぐんぐん伸びている。

「翼です。飛ぶための翼ではありません。エネルギーを受け止めるための翼です」

糸のように伸びた翼は、すでに天空を横断するほどになっていた。数十キロに及ぶ長さに。

「私達は生きていく、つまり、自分の体を維持し、形作っていくすべてのものを、光を初めとする様々な光線から得ることができます」

細い糸の様な翼が、面的に広がり始めていた。

光を透過しているが、はっきりとその大きさがわかる。

「必要なものは、エネルギーといくつかの元素だけです。珍しい元素ではありません。そこら中に落ちている、あるいは空気中に漂つているような元素です」

たちまち翼は、天空を覆わんばかりになっていた。

「水は。いえ、そのようなことはいづれお話ししましょう」

翼に遮られ、太陽の光が弱まっていた。

「私達が地球上に住むことになつても、食料をよこせとか、何かを分けるとか、そのようなお願いをすることはありません。大地と大気があり、そこに水蒸気が含まれ、太陽が輝いている限り、私達の体には余りあるエネルギーがあるわけですから

JP01が、空に向かつて手を上げた。

「彼女に降りてきてもらいます。地上近くには不規則な風があるので危険なのですが、彼女が、自分の体を皆さんにどうしても見て欲しいと申しておりましたので」

天空に広がつた薄膜が徐々に高度を下げてきた。

「翼を縮めながら降りてくるようですね」

JP01は上空を見上げながら、笑顔で手を振つた。

巨大な鳥は、あつといつ間にかなり低いところまで降りていていた。

翼は蝶の羽根のような形になり、その中心に人の体が見えた。かなりスリムな女性のようだった。

完全に人間の女性の体。

裸で、乳房もあらわだ。

ただ、地球上の人類と異なつている点は、その胴体の色が鮮やかなコバルト色だったことである。

地上五十メートルといつところまで降下してきたとき、彼女はすべての翼をしまい終え、JP01と同じような体型と体色になつていた。

「私達の体の大部分を翼が占めています。私達には衣服を身に着ける習慣はありません。折り畳んで体に巻きつけた翼が衣服の代わりなのです」

と、空中の鳥の姿が消えた。

次の瞬間、目の前に一人の女が立つていた。

「今、翼を見せてくれたデモンスト레이ターです。裸体は薄膜で隠しているが、その顔はまさに人間の女性のものだつた。

もちろん隠してはいけない。

輝くような金髪で緑色の瞳。キュートな女性だった。

そのときだ。

「サリ！」

後方で叫ぶ声がした。

見れば、駆け寄つてこよつとするチヨットマを、ハクシユウが押し留めている。

「サリ！」

チヨットマがまた叫んでいる。

ンドペキは思わず口にしていた。

「サリなのか？」

ンドペキがサリの素顔を見たのは、彼女をスカウトした当初の数日だけだ。

面影は記憶の中にあるはずだが、定かではない。

ただ、サリの金髪とエメラルド色の瞳だけは強烈な印象として残っている。

しかも、チヨットマがあれだけ騒ぐのだから……。

レイチエルが息を呑むのがわかつた。

しかし、ンドペキは一步踏み出した。

「サリなのか？」

女が困った顔をして、JPO1を振り返った。

ンドペキの頭の中に、不吉な予感が走った。

サリは、まさか。

しかしその疑念の意味を理解する前に、JPO1が女を庇つよつに立ち位置を変えた。

「サリって？ あなたのお知り合い？」

馴れ馴れしい口ぶりにンドペキは気分を逆撫でされながらも、エ

PO1の背後に立つ女を見つめた。

目を合わせようとはしない。

不安げな表情で、口を閉じている。

それが、ますますサリに違いないといつ気持ひさせた。

JP01が仁王立ちになつてゐる。

回答を要求しているのだ。

声を掛けたからには、知り合いで決まつてゐるのではないか。しかし、部隊の仲間だとは言わない方が賢明だろう。

ンドペキは短く応えた。

「そうです」

JP01は女に顔を向け、

「そのかわいいお顔、どうしたの？」と聞いた。

女がはじめて口を開いた。

「気についたので。ちょっと拝借しました」

「そう。あなたはもう戻つていいわ」

「はい」

女はそう言つが早いか、パツと跳躍したかと思つと、体を捻つて川に飛び込んだ。

ンドペキは息を呑んで、川面に女の姿を探したが、浮かび上がつては来ない。

シリーズ川の流れは速く、しかも川幅は広い。どんな人間でも、泳ぎ渡れるものではない。

「心配は要らないわ」

JP01が口元だけで笑つた。

「私達は水中でも生きていけます。地球に帰ることを決めてから、

体を作り変えましたから。それに彼女は、かなり優秀なスイマーです」

ンドペキは今見た顔を、心に焼き付けようとした。

そして、ふと思つた。

チョットマは、なぜサリだと思ったのだろう。

自分には、サリの顔の記憶はない。

サリとチョットマは仲がよかつた。互いに素顔で付き合つていた、ただそれだけのことかもしれないが。

あつといつ間に対岸に上がつた女が、手を振つていた。

なんというスピードだろう。

ンドペキは思わず手を振り返した。

それを見届けたからなのか、女はくるりと背を向けると森の中に消えていった。

JPO-1がレイチョルに向き直り、

「さて、お願いのこと、なことでお聞き届けくださいますよ、よろしくお願ひいたします」

と、深々と頭を下げた。

レイチョルは何も言わなかつたが、ンドペキの頭の中では警報が鳴り響いていた。

最初に感じた「侵略ではないか」という思いが、ますます強くなつていた。

しかも、相手はかなり手こわい。

空を自由に飛べる。水中でも活動できる。

食料は不要で、常にエネルギーは満タン。

しかも、JPO-1の言つことが本当なら、かなりの数だ。

武器は？

いや、武器など必要はないかもしれない。  
体の一部に何かを組み込むことは、この連中には朝飯前なのだろうから。

勝てるか？

自問するンドペキにJP01が声を掛けた。

「ねえ、ンドペキ」

「ん！」

JP01が背を折つて、顔を覗き込んできた。

と、その瞬間、後方で砲撃音がした。

ハツとしてンドペキは身構えたが、JP01に異変が起きていた。  
発砲されたのはプラズマ弾。

JP01の胸を貫通していたのだ。

しかし、その瞬間にはJP01の姿は揺き消えていた。

まづい！

ンドペキはとっさにレイチャエルの前に立ちはだかり、対岸からの攻撃に備えて、簡易なバリアを張つた。

すぐに、レイチャエルを抱えてステージを降りよつとした。

しかし、レイチャエルはすでに自軍に向き直り、両腕を大きく広げていた。

そして、「静まれ！ 決して攻撃するな！」と、叫んでいた。

ンドペキはレンチャエルを抱え込もうとしたが、緑の瞳がそれを拒む。

レイチャエルが対岸に向かつて立つた。

まずい！

これでは撃つてくれと言つていいようなものだ。

自軍では、戦闘体勢に入らうとしている者が大勢いた。

レイチャエルの言葉が聞こえなかつたはずはないのに、多くの者が銃口を対岸に向けている。

それらは攻撃部隊の一団で、レイチャエル直属の防衛隊は、指示に従つてすぐに戦闘姿勢を解いている。

「くつ」

ンドペキは、せめてもの盾にレイチャエルの前に立つ。

「ありがとう。でもそれはやめて

「しかし」

「命令です」

対岸にはなんの動きもない。

「銃をおろせ！」

ハクシユウの声が響いていた。

「発砲したものを拘束しろ！」

数秒後、

「その必要はないわ」

と、声が聞こえ、JP01が先ほど立つていた位置に立ち現れた。

「むつ」

JP01がひとりの女性を脇に抱えていた。

「殺してはいけないわ

ンドペキはその者を見て、再び声をあげた。

「あああっ！」

それは、昨夜、洞窟を案内してくれた女だった。

「ンドペキ、あなた、誰でも知っているのね」

JP01が微笑んだ。

女は気絶しているようだが、ぐつたりとJP01に抱え込まれている。

「まことに申しわけありません！」

レイチャエルが叫んだ。

「いいのです。この人は一般人のようですし」

レイチャエルがJP01に再び頭を下げた。

JP01がレイチャエルの頬に手を添えて、顔をあげさせた。

「今日の会談は、これで終わりとします」

「……」

「お願いの件、くれぐれもよろしくお願ひします。色々返答をお待ちしています。この女性は預かっておきますね」

「それは……」

「ご心配なく。人質という意味ではありませんし、傷つけるつもりもありません」

JP01の瞳がチラリとンドペキを捉えた。

「でも、私どもにも、少し尋問をする権利はあるのではないでしょうか。数日以内には、お返しできると思います」

「言つが早いが、JP01の体が宙に浮いた」

「では、私達があなた方と仲良く、この地球で暮らせますようにー」

JP01はこちらを向いたまま、ふわりと遠ざかり、川面を渡つて帰つていった。

### 3.1 白い廊下に響く声

シリーズ川で会談が行われていることが、アヤは食堂に向かっていた。昼食を食べるにも、スキヤナーエリアを通らねばならない。持ち場から離れるときには、必ず全身スキヤナーを受けなければならぬのだ。

IDカードをかざし、生体認証を受けると扉が開く。

エリアの中は何の変哲もない普通の廊下だが、三歩先にまた扉がある。

その間を歩く間に、スキャニングされるのだ。

IDカードと制服以外に、どんなものも身に着けることは許されない。

ひとりずつ、通過していく。

しかし、慣れたものだ。

一度だって、三歩先の扉が開かなかつたことはない。

このときも、いつものように扉は開き、そのまま廊下が続いていた。

白い壁と天井に、黒い床。

飾り気の全くない風景だが、オフィスなのだからこれでいいのだう。

両側にドアが並んでいるが、アヤはそこにどんなオフィスがあるのか知らない。

自分の仕事以外のことに関心を持つたり、他人を干渉することは政府機関内ではタブーである。

一区画ほど行くと、左に折れる。

そこからは、壁や天井の色が濃い茶色に変わり、ライティングも床に光を流す間接照明になる。

リラグゼーションエリアである。

食堂はその一角にある。

今日はおじさんに会いに行けるだらうか。

会談場に展開する兵士や政府役人の素行調査なんて、意味はないのに。

物見遊山気分で同行する連中もたくさんいるのに。

あれ。

スキヤナーエリアを出て、アヤは違和感を持った。  
んん？

いつものように、白い廊下が続いている。

見慣れた光景だ。

が、誰もいない。

昼食時なのに、誰も前を歩いていないのだ。  
スキヤナーエリアは順番待ちしていたのに。  
先に通つて行つた人は？

おかしいな。

アヤは思わず振り返つた。

あ！

そこにあるはずの、スキヤナーエリアの扉がなかつた。  
白い壁があるだけ。

行き止まりだ。

えつ！

どうこうこと？

鳥肌が立つた。

まずいことになったのかも。

アヤは立ち尽くし、自分の体を調べた。  
何も持つではない。

規則を破るような点はない。

じじはどこ？

じう見ても、いつも通る廊下だ。

アヤは歩き出した。

この先に、リラグゼーションエリアがあるはず。  
食堂に行けば、人がたくさんいるはず……。

しかしアヤは、そこに食堂なんてないし、あつたとしても入つ子  
一人いないのではないか、と思い始めていた。  
でも、確かめなくては。

何が起きたのだろう。

ええつ？

廊下は進めど進めど、ただの一本道で、左右に折れるといひはな  
い。

うわあ……。  
やばいかも！

アヤは走り出した。

廊下を走るのは珍法度である。

足音がかなり響く。

しかし、そんな悠長なことは言ひておれなかつた。

何とかしなくちゃ！

背後が気になり、後ろを振り返つた。  
うわわわあ！

さつさと回じよう人に、突き当たりだ！  
私、あれだけ走つたのに！

アヤは走るのを止め、今度はその突き当たりに近付いた。  
あわわわっ！

突き当たりが、綾の歩みに連動して後退していく。

じじ、じつすれば……。

また前を振り返つて、アヤは仰天した。

やめて！

とうとう叫びだしてしまつた。

さつきまで続いていた廊下はなくなり、そこも突き当たりになつてゐたのだ。

まさか！

閉じ込められてしまった！

前後十メートルほどの廊下に。

左右にドアも何もない。

もう廊下ではない。

真っ白な、細長い部屋の中に。

誰か、誰か……。

た、た、助けて！

生駒は会談の一部始終を見ていた。チョットマの肩に堂々ととまつて。

「ねえ、パパ。どう思つ?」「

ハクシユウから、まだ命令はない。

シリー川の岸に集結したユーローキーツの軍勢は、それぞれの部隊ごとに撤収を始めていた。

「サリのことかい

「うん」

パリサイドの地球への帰還をどうするかではなく、チョットマはサリのことを気にしている。

「お顔を拝借か」「

「どういふことなの?」「

「よくわからないな」「

「あの女がサリを殺したのかも」「

「うーん」

「あんなやつらに地球に渡すもんか!」「

チョットマは、武器をガチャガチャいわせた。

「彼らはそんなにバカかな。殺した相手の顔をつけて、僕らの前に現れるかな」「

「その程度なのよー」「

生駒は唸つた。

「でもねえ」「

「だつて、厚かましいとは思わない? 地球に帰りたいつてあいつらは言つたが、今更どんな面下げてのこの帰つて来たんだつてことよね」「

チョットマの鼻息は荒い。

なにしろ、サリのことなのだ。

「だいたいさ、教団がどうのこのつて、何だか知らないけど、あの居丈高な態度。ふざけるのもこい加減にしろ、よー。」

生駒は、あの連中と戦争になつたら、勝てない、と思つた。

なにしろ、弾は当たらないし、瞬時に姿を消すこともできる。大空を舞うこともできる。物資の補給さえ必要ないのだ。

それに、他人の顔を拝借することができるとなれば、手の打ちようがない。

JP01が女を抱えたまま対岸に消えてしまってからも、レイチエルはしばらくステージに立つたままだつた。

その間、ンドペキを含め全軍がぴんと張り詰めた静寂に包まれ、誰一人微動だにしなかつたが、遠くで雷鳴が聞こえたのを機に、レイチエルは相手から受け取つた書簡をンドペキに渡した。

ンドペキがそれを読んでいる間、レイチエルはハクシュウとふたことみこと話し、全軍撤収と命令を下した。

ンドペキから書簡を受け取ると、ふたりして飛空挺に乗り込んで飛び立つてしまった。

背中で全軍の動きを感じよつとしているかのよつて、ハクシュウは対岸を睨んだまま、まだ突つ立つていた。

「私達、今日はこゝで野営かな」

チョットマは心配そうに顔を向けた。

「僕のことなら心配いらないよ。この田ん玉のエネルギーが切れても、ちよつとしたペナルティを受けるだけだから」

「送つて行かなくてもいい?」

「いいよ。気にしないで。ずっと君と一緒にいるから」

ニュー・キー・ツのほとんどの部隊は、撤収を終えた。

「スジーウォン、コリネウルス。全軍が撤収したかどうか、俺たち以外に誰もいないか、確認してくれ」

「了解」

ハクシュウの命令に、スジーウォンとコリネウルスの部隊が上流と下流に分かれて、散つていった。

チョットマはカートの中身を確認している。野営用の備品や食料などだ。

「よし」

チョットマがどことなく寂しげな溜息をついた。

「ンドペキの分も持つてきたんだけど、必要なかったみたいね……」

スジーウォンとコリネウルスから、報告が入った。

稜線から川原にかけての一帯には、ハクシュウ隊だけとなつた。

「よし。今日はここで野営する。全員、ステージのところに集まつてくれ」

作戦会議はできぱきと進んだ。

ハクシュウはすでに考えてあつたのか、各部隊の配置と万一一の場合の対処を伝えた。

「ンドペキの部隊は、俺の部隊から切り離しスジーウォンの部隊に編入する。ただしチョットマは、俺の部隊に残つてもうつ。各々の部隊内のことば、各伍長がやってくれ」

現時点まではハクシュウ隊に組み込まれていたが、スジーウォン隊になつたからといって、誰も不満はない。

気難しいパキト・パーク隊だったら、げんなりした顔をするものも

いただらうが。

「チヨットマにはやつてもらいたいことがある」

「ハイ！」

「おまえは、一旦街に帰つて、ンドペキに会つて欲しい」

「ハイ！」

「JP0-1を撃つたものは誰かを聞いていい。それから、ここ数日中にあつたことを。どうも、あいつと俺との間の通信は、ほとんどチャンネルが遮断されている」

「ハイ！ で、合流するように伝えるんですか？」

「いや、それはしないほうがいい。きっと、あいつにはレイチエルから「えられる任務があるだろ」」

「ハイ！」

「できるだけ一緒にいて、情報を収集しろ。おまえもここに戻つて来なくていい」

「ハイ！」

ハクシュウがどつかりと地面に腰をおろした。

「さて、昼飯にするか」

対岸の連中が敵だとすれば、大胆な行動だ。

「今日は動いてこないだろう。それに、相手さんの能力を考えると、逃げ隠れしたつて始まらないからな」

そして、なんとヘッダーまで外す。

「ここは大気の状態がいい。この間、お互いの顔を見せ合つていてよかつたな。ちゃんとした会食ができる。スコープだけはつけておいてくれ。おおおお警戒抜かりなく、だ」

ほとんどの隊員はすぐそれに従つたが、何人かは突つ立つたままだ。

「おおおい、見張りはしなくていいぞ。見張りは全員で」

敵前で武装を解いてまで会食をしようとした提案に面食らったが、反発があるのだろう。

しかしハク・シュウは、あえて命令口調ではなく、誘うような口調で言つ。

「や、一緒に飯を食おう」

結局、全員が三々五々集まって、弁当を広げるペクニックのよくな光景になつた。

それぞれ、配られた食料チップを口に運んでいる。

「おい、チョットマ、鍋でも持つてきていのいか」

「えつ、えつと、鍋ですか？」

「鍋を知らんのか」

「知りません」

「大昔、流行つた会食手法だ。仲のいい連中がみんなで料理を作りながら、それを囲んで食べたらし」

「はあ

「今度、それ、やつてみるか。面白やつじやないか

「はあ、そうですね……」

ハク・シュウが部隊を和ませようと話している。

勝ち田のない相手に、これからどのよつた展開になるか、不安感だけがのしかかるような場面である。

レイ・チャエルの回答如何によつては、血がこの川を汚すことになる。あるいは全世界の街の代表がどんな態度に出るか、わかつたものではないのだ。

「」数百年間、まともな組織だつた戦争は誰も経験していない。

生駒は、彼らの気持ちがよく理解できた。

黙りがちな会食が進んだ頃、ハクシュウが口を開いた。

「伝えておきたいことがある。スジーウォン、もう一度周囲を見渡してくれ」

スジーウォンが立ち上がりつた。

「じゃ、ざつと一回りしてきます」

「すまんな。声が聞こえる範囲だけでいいぞ」

「了解！」

スジーウォンは笑つて、カロリー・チップをまとめて数粒口に放り込んでから、駆け出していった。

チョットマが誰に言つともなく、声を掛けた。

「あれ、サリだつたの？」

明快なことは言えないのだろう。誰もが首を捻るばかりだ。

それでもいくつかの考えが披露された。

あの人物がサリを殺し、顔を拝借した。自分たちは変装もできるんだぞという我々に対する恫喝だという考え方。

サリを殺したわけではなく、たまたま見かけたサリの顔が気に入つて、拝借した。ただ、我々に対する示威行為である点は同じだ。

そういうた考えに混じつて、驚くべき考え方も出された。

パキトポークは、思い付きだと断つてから、

「サリはもともとあの連中だつたんじゃないか」と言つのだった。

「ええええつ！ そんな！」

叫んだのは、もちろんチョットマだ。

「そんな、つてなんだ？」

「失礼しました。でも、そんな！」

「だから、そんな、つてなんだ？」

「いえ、その」

生駒は、そんなバカなことがあるか！と叫びたいチョットマの気

持ちはよくわかる。

本当は、ふざけるな！とビンタのひとつも飛ばしたいところだが、微妙に険悪なムードが漂つたが、ハクショウがさらりと雰囲気を変えた。

「そんな場合も、可能性はゼロではない。大の仲良しのチョットマには受け入れられないだろうけどな。しかし、単に思につきレベルの話だ」

チョットマが頬を膨らませている。

「ちなみに俺の意見を言つと、サリに限つて、それはないと断言できる。なぜなら、彼女が入隊したときのことを覚えているから」ハクショウに視線が集まつた。

「彼女の入隊を勧誘したのは俺とンドペキだ」

チョットマがパキトボーケをまだ睨みつけている。

「ある日、ハイスクールの卒業生が晴れて街に出てくるのを見計らつて、俺とンドペキは入隊者の勧誘を行つた。門からぞろぞろ出てくる連中の中から、品定めをする恒例のあらだ。そのとき、彼女は

青いバッヂを付けていた。どういう意味か、わかるよな」

ハイスクールでは、メルキトの子供達が育てられている。

マトとマト、あるいはマトとメルキトの間に生まれた子供達だ。

制度上はホメムとの間の子も同じハイスクールへ行くことになつているが、その例は無きに等しいといわれている。

ハイスクールに入るメルキトにはふた通りあつて、胚の段階から管理されて育てられた子供と、母親が生んで物心付かないうちに預けられた子供だ。

胚から育てられているメルキトの子供達は、青いバッジを付けて

街に放たれる。

優秀で従順な一部のメルキトは街に出ることなく政府機関に引き取られ、専用の教育を受けることになるが、多くは街に出て自力で生きていくことになる。

母親が生んだ子供は赤いバッヂだ。

母親が迎えに来ることもたまにあるが、それはごく少数で、ほとんどが青バッヂと同様に勝手に生きていくことになる。

その新人達を、様々や会社や商店や、あるいは個人が勧誘に行くのである。

的を絞りきれずに社会に放り出された子供にとつては、厳しい試練の場だ。

勧誘といえば聞こえはいいが、その場で自分の将来を決定しなくてはいけないのだから。

もちろん勧誘する側も、その場に参加するためには、政府の許可が必要だ。ただ、怪しい者達もいるのは周知の事実である。

ハクシユウたちのような軍は、その特権で常に最前列で新人達が出てくるのを待つことができる。

「再生された人間ではなく新しい人間を選ぶ場合、俺たちは、いや、ほとんどの隊がそうだが、青いバッジのものの中から仲間を選ぶ。俺たち部隊の仲間も、たいていはそういう人だ。知っているのは本人と、選びに行つた数人だけだがな」

チョットマが、小声で言つた。

「パパ、私もそうよ。だからサリとは仲良しだったのかもしね

スジーウォンが帰つてきて、異常はないと報告した。  
「よし、じゃみんな聞いてくれ」

ハクシュウがキュー・トエフで文字データを送つてきた。

キュー・トモードは特定のひとりにしか送れないが、キュー・トエフなら部隊内のメンバーには同時送信が可能だ。

生駒には情報が送られてこないが、チヨツトマがキュー・トモードにして転送してくれた。

「書簡の内容はこうこうことだ。ンドペキが伝えてくれた」  
ンドペキがレイチエルから手渡された書簡を読みながら、その場でキュー・トモードで逐一伝えてきたのだといつ。

「口外無用で頼むぞ」

概略は以下のとおりである。

- ・ 地球への帰還を望んでいるパリサイドは十万人程度である。
- ・ 先遣隊として、すでに三万人ほどが地球に降り立っている。願いが認められれば、残りは順次帰還していく。
- ・ 地球人類と交じり合つて暮らすことを認めて欲しいが、それが無理なら隔絶されたところで独自の街を作りたい。
- ・ 独自の街を作る場合も、地球政府の一員として認めて欲しい。
- ・ 街の規模は、既存の街の人口密度に照らし合わせた適正規模でよい。
- ・ 街を造る場合、最低一万人以上のまとまりとして欲しい。また、三箇所以上として欲しい。
- ・ 居住地は、地上であれば、いかなる気象条件のところでもよい。
- ・ 街以外に少しの生産用地が欲しい。
- ・ 土地以外には、なんらの物質的援助は求めない。
- ・ 地球人類の一員として、地球政府の運営に参加させて欲しい。

最後に、

「我々は同じ人類として、地球に生まれたもの同士として、平和に

生きていこうことを望んでいる。袂をわかつた五百三十一年間があつたとしても、それは諍いの上に生まれた断絶ではなく、思想の違いによつて生まれた離別であつたことを思い出していただきたい。我々を、同じ思想を持つものとして地球に迎え入れてくことを希望する」

締めくくりには、希望が聞き入れられた暁には、地球人類にとって有用な様々な技術を提供する用意がある、と結んであつた。

そして、回答期限。

「一週間後か……」

「リネウルスが呟いた。

「けつ、脚元をみやがつて」

部隊の誰もが沈み込んでいた。

パリサイドの書簡は、読みよつによつては居丈高で身勝手だといえる。

小さな面積とはいえ、庭先の土地をよこせと言つてゐると同じだ。

世界中の街に同じ文章を示しているというのだから、足元を見ているというコリネウルスの指摘は正しいのだろう。

わずか数日で、足並みを揃えた結論が出るとは思えないからだ。

生駒は、暗澹とした気持ちになつた。

今、世界は六十七箇所の街で構成されている。

それぞれの関係はゆるい繋がりで保たれ、独自の統治が行われている。

上部機関はあるが、単に地球政府と呼ばれているだけで、実態は誰も知らない。

レイチェルはニューキーツの街の行政長官だと名乗つた。

彼女がそのベールに包まれた地球運営機関の一員なのだろうか。

それとも、単なる現場所長みたいなものだらうか。

一週間後に出る返答は……。

いずれにしても、今の平穏な暮らしに何らかの変化が起きるだらう。

最悪の場合は、一気に戦争に突き進むことになるかもしれない。  
少なくとも、この部隊の空気を見る限り、パリサイドを喜んで受け入れようといつ氣分ではないことは明らかだつた。  
ハクシュウも自分の考えを言おうとはせず、隊員が様々な想像を膨らませるに任せていた。

「無理だ……」

隊員のひとりが呟いた。

「何がだ」

「どう転んでも……」

一種の絶望感が、その言葉を吐かせたことだけは確かだろひ。

ただ、ハクシュウはがばりと立ち上がつた。

隊員を奮い立たせるように、陽気な声を出す。

「さあ、そろそろ取り掛かるか。明日の朝、十時には交代の部隊が来る。それまで、何も見逃すな！」

そして、命令を下した。

「全員、持ち場につけ！」

よく訓練された部隊だつた。

無理だと呟いた隊員も含めて全員が、機敏な動きで一瞬のうちに散つていつた。

「チヨットマ。街へ戻れ！」

「ハイ！」

「お客様をちゃんと送り届けろよ」

「ハイ！」

### 33 心地よい色

シリー川から帰還する間、レイチエルもンドペキも、飛空挺に乗つた者たちに言葉はなかつた。

街の上空に差し掛かり、朝、ンドペキを乗せた地点に向かつて高度を下げ始める頃になつて、レイチエルがようやく口を開いた。

「今日はありがとうございました」

そして、一緒にいてくださつて、心強かつたです、と頭を下げた。

「いえ」

上面にそのようにされて、ンドペキは困惑した。何を言つべきかも知らなかつた。

ストンと地面に降り立つた飛空挺がモーターを止める「」となく、ドアがスパンと開き、ンドペキは降りようとした。

「あの」

後ろからレイチエルの声が追いかけてきた。

「今日はご自由に過ごしていただき結構です。ですが、街の外には出ないでください」

「はい」

「明日はお話したいことがあると思います。できましたら、『』や宅にいてくださいませんでしょうか」

レイチエルは無表情だったが、どこか懇願している調子があつた。

「」は、「かしこまりました」と、応えた。

「解、といふのもばかられるようで、とつせに出たのがその堅苦しい言葉だつた。

レイチエルは少しだけ微笑んでみせたが、その笑顔は閉まり始めたドアに隠されていった。

上面に対し、話とは何か、とは聞けるものではない。

これから任務は、まだ決まっていないことだらう。

そう判断して、ンドペキは直立したまま、飛空挺が飛び去るのを見送り、一直線に自分の部屋に戻った。

装備は解かず、ハクシュウと連絡を取りりつとした。  
しかし、相変わらず、応答はない。

ハクシュウはおろか、部隊の誰とも連絡は取れなかつた。  
それどころか、誰の現在地も把握することができなかつた。  
彼らはまだ公式な任務についているはず。現在地はオープンになつてゐるはずなのに。

ンドペキは疲れを感じて、ベッドに寝転んだ。  
天井を見上げる。  
ん？

微妙な違和感を持つた。

見回してみても、部屋は出て行つたときのままだ。  
しかし、何かが違う。  
留守中にスクリーニングされたのかもしれない。  
そんな感触だ。  
ンドペキは装備を解こうとした手を止めた。

今日中は自由にしていてよいと言われたものの、出かけていくあてがあるわけではない。

有名人になつたわけではないが、どこの隊の隊長にでも声を掛けられて、今日の出来事の経緯など聞かれても面倒だ。

それに、違和感はあるものの、自分の部屋の方が安全だ。

そう考えて、装備を身につけたまま、ンドペキは物思いにふけった。

サリを殺して、自分が削除されることを望んでいたのは、そんなに前のことではない。

サリがだめならチョットマを、といつは想に至つては、つい昨日のことだ。

いろいろなことがありすぎた。

単調なだけの毎日が数百年も続いた後に、この連續的な奇妙な出来事の数々。

パリサイドの出現は、自分とは関係なく起きたことだ。

しかし、シリー川の支流で見知らぬ女と出会つたことから、この不思議な事件は続いているように思つ。

パリサイドの使者JPO-1が例外的に自分を交渉相手の一員に選んだこと。そして、個人的に会いたかったからだと言つたこと。空から降りてきたパリサイドの女はサリの顔を持ち、JPO-1が謎の女に撃たれ……。

その女と北の洞窟に行つたのは昨夜のことであるが、もうすこぶん前のことのように思えた。

そもそもサリは……。

謎は深まるばかり。

ンドペキは考えようとした。

あの洞窟の女はだれだ。

依然として、何も思い出せそうにない。

ＪＰ０－１とは？

会つてみたかったとは？  
以前の知り合いだろうか。

大昔、地球を後にした集団がいたことは龍に覚えているが、その記憶の断片にＪＰ－０－１はあるか、ひとりの女も出てこない。個人的に、と言われるような相手であるうとなからうと。

そしてレイチエルの微妙な態度。

上官としての態度ではなく、どことなく馴れ馴れしい。

こちらはレイチエルと会つたこともないし、名も失念していたほどだが、向こうは以前から知っていたかのように。

ただ、それは単に、彼女がそういう人間だからかもしれないが。

そして、洞窟の女はＪＰ－０－１を撃つた。

相手は好戦的な人種ではないと言つておきながら。

女、あるいはその背後にある集団は、パリサイドと敵対関係にあり、自分はたまたまその間に挟まつたゴマ粒のようなものだろうか。何らかの形で利用されつづあるのだろうか。

小一時間が過ぎたころ、チョットマからメッセージが入った。

なるほど、キュートモードなら通信可能なのか。

「よかつた！ 連絡がついて！」

チョットマがはしゃいだ声を出している。それがわかるような、文面だった。

「隊長が心配しているよ！ 連絡が取れないからって

「こっちもだ。今、部隊はどこにいる？」

「シリー川で警護中。連中を監視しているわ。明日の朝までだつて

「そうか。で、おまえは？」

「ンドペキの様子を見て来いつて」

「そうか、慰めてくれるのか。それとも監視されているのか？」

「だから心配しているんだって！」

「俺の身を案じて心配しているのか。それとも俺が何かしでかす、と心配しているのか？」

「もうー、変なことを言わないのー！」

「おまえを信用するよ。俺はいつでももうだ

「ハイハイ。ンドペキ、ちょっと機嫌悪い？」

「いいはずがないだろ」

「でも、隊長の言いつけだから、もうちょっと付き合つてね

「何でも聞いてくれ。どうぞ」

ンドペキは、さつき感じた部屋の違和感を思い出して、ここでの会話はまずかもしれない、と思った。

文字、データのやり取りではなく、生の声の方が安全か、と思つたが、それではチョットマを部屋に入れることになる。

「いや、少し待つてくれ

「いいよ」

ンドペキは、女に案内されたあの洞窟なら、誰に聞かれる」ともな」と思つたが、さすがに遠い。

「いずれ使うことがあるだろ」と言つていたが、それはまだ昨夜のことだ。

しかも、チョットマに話すことは、それほど重要で緊急性のあるものでもないはず。

あそこを秘密のアジトと呼ぶなら、まだ誰にも知られてはいけない場所だらう。

しかも、女はすでにパリサイドに捕らえられている。

自分にあそこを利用する権利があるとは思えなかつた。

クソ！

ええい！

仕方がない！

なるよつになれ、といつ気持ちになつた。

「入れ」

「えつ」

さすがにチョットマは度肝を抜かれたのだろう。男の部屋に入るとこゝにとま、いきなりのプロポーズに、せつと裸になつてオーケーと声をよつたなのだ。

「今、開ける。誰もおまえに注目していいか？」「うん、大丈夫みたいだけど……」

「よし」

ンドペキは扉を開けた。

躊躇するかと思ひきや、チョットマはわざと身を翻して部屋に入つてきた。

「ふう！ 誰にも気づかれていないと思つわ」

チョットマは、シリー川で見たときの装備をそのまま身につけていた。

ンドペキは誤解されないよつて、上官直じに言葉遣いで事務的に言つた。

「こゝなら安全だ。生声で話そつ。いいな。では、ハクシュウの伝言を聞く」

チョットマは、きょきょきょと部屋を見回していたが、直立する

と、

「ハイ。JAP01を撃つたのは誰かといつことでした。それから、

「この数日あったことを報せよ」とこいつとした」と、早口に言った。

チョットマの生の声を聞くのは初めてだ。

彼女にしても、生の声で誰かに話すのはそつかもしれない。

いや、サリの搜索の前に、顔を見せ合ったときに聞いただらうか。

こずれにしろ、チョットマは緊張しているのか、これが彼女の声なのか、異常なほど金属性で高い声だった。

再生時のミスだな、とソドペキは思つたが、チョットマ自身も気がしているかもしないことを、指摘はしなかつた。

ソドペキは知つてゐる限りのこと話をした。

たいして話すことはなかつたが。

ただ、女と洞窟に行つた時に感じた自分の心の動きだけは伏せておいた。

もちろん、サリやチョットマを殺そうと考えていたことも。

「それで、その洞窟の女といつのは、誰なんですか？」

チョットマが不満そうな声を出した。

「わからない。知らない女だ。少なくとも記憶にない

「わかりました。それで、これからどうされるんですか？」

いつものよつとつに友達同士といつ話し方ではなく、チョットマも少し氣を使って言葉を選んでこらみよつだ。

「予定はまつたくない。明日も、レイチエルからのお呼びを待つだけだ。なんなら、今からシリー川で合流しようか？」

「その必要はないと思います。私と一緒にするのもどうかと思つますが、隊長の指示は今日は街で待機せよといつとしましたので

「そりや」

ンドペキは、チョットマなら何か感じるかも、と思つて聞いてみた。

「チョットマ、この部屋、どう思ひへ？」

明らかにチョットマはたじろいで、一步後ずをつした。

「どうとおしゃられましても……」

「報告は終つた。もつと樂にしてくれ。こつものよひ」

「はい……」と、また一步後ずをつた。

「おい、勘違いするな。さつき帰つてきてから、どうも違和感があるんだ。誰かに入られたよくな」

チョットマは、チラリと部屋に目をやつてから、

「私が勘違いって、どうこいつですか？」

「いや、だから、その」

チョットマが、けたたましい笑い声を上げた。

「あつ、すみません。私の声、変でしょ。大声で笑うと、人をバカにしたような声になつてしまふんです」

「そうみたいだな」

「すみません。でも、すみません。私が部屋に入れつて言われて、かなりビビリましたよ。それで、この部屋はどうかなんて言つんだから！」

まるで、新居の感想を聞くみたいに！」

そうじつて、チョットマはまたけたたましく笑つた。

友達に話すような言葉遣いに戻つていた。

「あつ、じめん。別にバカにしているわけじゃないです。私の声だから気にしないでね」

ンドペキも笑つた。

久しぶりに感じた心地良さだった。

「それはもうわかつたよ。で、なにか感じる？　この部屋」

「うーん、そうですねえ」

チョットマは、またチラリチラリと部屋に目をやると、「インテリアは殺風景過ぎて冷たすぎ。刺々しい感じ。私の趣味には合わないよ、うな」

「おー！」

「ハハハ！」

結局、チョットマは何も感じない。

四時間おきに、お互いの部屋を行き来して連絡を取り合つ、と決めた。

「行き来しあうのは期限付きだからな」

「そんなこと、しつこく言わなくてもいいのにね」

「明日、ハクシュウたちが帰つてくるまでだ」

「はいはい」

「ハクシュウに誤解されたり困る」

「隊長じゃなくて、スジーウォンにでしょー。」

「は？ おまえ、とんでもない考え方をしていいのか？」

「そう言こと合ひながら、ソドペキはドアを開けた。

じや、四時間後にまた、と書いて、そしてなんとなくウインクするような目を見せて、チョットマはするりとドアを抜けていった。

生駒はすでに、レイチエルのことを調べてあった。共用のデータベースには掲載されていなかつたので、探偵に頼んだのだった。

「ニュー・キーツの街を治めているホメムだ」

二十一歳。女性。

世界中のホメムの中で、最年少である。

行政長官就任は十八歳のとき。

街の代表者ということになつてゐるが、実に多様な肩書きを持つ。軍はもちろんのこと、数々の政府系企業の代表であり、研究機関や生産拠点等の代表でもある。

父、母ともに不詳。

「不詳といつては、亡くなつてゐるといつてだ」

「ニュー・キーツの出身か？」

「いや、カイロニア」

「オセアニア大陸か。その出身者が北アメリカ大陸のニュー・キーツを治めているのか」

「おい、あんた何も知らないんだな。出身地なんて関係ないよ。まともな人間はもうわざかしかいないんだから、どこへでも出張しなくちゃ」

モニタの中の探偵が、苦虫を噛み潰した顔になる。

「ニュー・キーツの街に、他にホメムはいないのか？」

「何を寝ぼけているんだ。いつまでも女の子を追いかけ続けて、世捨て人になつてしまつたのかい。日本人はこれだからいけない。島国根性つて言葉があるんだろ。あんたの祖国には。そろそろ、ちい

とはその心根を変えてみたらどうだい

「やかましい。早く教えろ」

「教えてやる。これはもう常識だから、この情報の代金はいらん。現時点で、世界にいくつの街があるか、知っているか？」

「六十七」

「そう。その数だけホメムがいるということだ。それ以下ではなく、それ以上でもない。万一、ホメムがひとり死ねば、街もひとつ減る。ひとり生まれれば街もひとつ増える。そういう決まりだ。いつ誰が決めたのか、知らないがな」

「なんと」

「驚いたのか。そう。太古の昔、地球で生まれた俺たち人類という種は、もう絶滅同然なんだよ。あんた、日本人だろ。責任取らなきやな」

人口減少化傾向が如実だった日本。

先進国の一員であると自負してはいたが、世界中のお手本になるどころか、まともな対策を講じることなく、高齢者のみに手厚い政策ばかりを繰り返していた日本。

その日本が考案出した窮余の策。

人がアギとマトとして生きながらえていき、かるうじて人口を維持していくというプラン。

他の国々から、悪魔に魂を売ったのかと批判されましたが、結局は全世界がそのプランに飛びついた。

プランに魅了されたのではなく、先進国各國はそれぞれの富裕層に突き上げられてのことだつたし、日本だけが人間の種と数をコントロールしていくことに、危機感を持ったからだった。

日本のそのプランに、スタートから数年で各国が追随したが、当初の危惧どおり、それは悪魔のプラン以外の何ものでもなかつた。

若者として再生されるとはいゝ、マートはやはり基本的には「元高齢者」だったのである。

中には一から人生を始めるべく、新しい生を最大限發揮して精力的に活動する者もいたが、多くは高齢者であつた間に染み付いた習慣から抜け出ことなく、体を動かそうとはしなかつた。

生産人口はそれほど増えないのに、消費する人間だけが増えていつた。

そして、文句だけはつけたがる集団と化していった。

しかも、アギはまだしも、マートの製造には莫大なコストが掛かつた。

文明を培つてきた科学の分野はあらゆる場面で歪み始め、やがて完全に停滞した。

人類の英知のひとつともいえる民主主義や資本主義経済は行き詰まり、社会構造は崩れ始めた。

地球人口の膨張に食糧生産が追いつかない。

本来なら最優先で食料を手に入れるべき、母の腹から生まれた子供に飢えが蔓延した。

単種に偏つた農業や牧畜の脆弱性は、かねてから問題視されていたが、世界はその問題に向き合おうとはせず、一部の富める者の欲求を満たすためだけの生産が続けられていたのだ。

食料をはじめとする資源やエネルギーの偏在は、プランスタートからますます極端なものになつていつたのである。

ジャパニーズニーサンスと呼ばれた悪魔のプラン。

各国が協調して廃止されたのは必然だつたが、遅きに失した。

最初のアギとマトが生まれてから、悠に二百年が経つていた。  
しかも、その廃止は骨抜きだった。

新たなアギとマトの製造は中止されたが、その再生は継続され、  
しかもその子孫であるメルキトの再生も継続されたのである。

親より早く子供が死ぬのは耐えられないという理屈ではあった。  
人類は遠からず滅亡するという状況に至つてなお、現実には、既  
得権を有する者からの圧力に抗いきれるものではなかつたのだ。

もはや、地球環境の変化に伴つ自然災害や疫病、いざれかひとつ  
でも起きれば、地球人類は壊滅的な打撃を受けるだろう。

そんな状況下で、大規模な戦争が頻発した。

極限の破壊。

荒廃しきつた世界。

そうして遂に生まれた新しい社会。

世界はひとつになつた。

各国が争う戦争はなくなつた。

ただ、生まれたのは極度に管理され、生かされている人間の集団  
という社会である。

もうどんな活力も残されていなかつた。

脆弱な構造ゆえに、強化の一途を辿る相互監視。

自由という言葉が、極めて矮小化されて語られる社会だった。

監視の目から逃れようと、悪あがきだとはわかつていとも、顔を  
隠し、皮膚を覆い、声さえも電波に変えて伝え合うマトたち。

その裏では、完全な人造人間であるアンドロが支配する巨大な集  
団の存在。

探偵は、こんなことになつたのは日本人のせいだと、いつも生駒を追求するのだった。

自分はイギリス人だと言つ。

先進国の中で、唯一、アギは作つたがマートは作らなかつた国である。

「今日は、説教は要らないぞ。で、レイチャエルはどんな考え方の女性だ？」

「普通の女の子だよ」

「普通とは？」

「だから、普通だよ。今の常識に照らせば、かなり変わつていて言えるだらうがな。俺やあんたが知つているような昔の女の子、つて意味だ」

「例えば？」

「あんたはまだつこじいな！ それで、理解しろよー。」

「いや、だめだ。我々には言葉とこうものがある。言葉こよつて理解し、記憶する」

「ふん。まあいい。例えばこうのことだ。レイチャエルは人間の女の子らしく、悩んだりするし、友達を欲しがつたりする。誰かに自分を投影して寂しさを紛らわせたりする。そして結婚願望もある。かわいいお母さんになりたいと思つていて。そういうことだ」

「行政機関の長がそんなことを考えているのか？」

「おー！」

探偵が皿を吊り上げた。

「あんた、それはどういふ意味だ！ 二十二歳のレイチャエルは、そんなかわいいことを考えたらいけないのか！」

「そうじゃない。あまりに……」

「無邪気すぎるって言いたいのか！ あんた、彼女の気持ちになつてみたことがあるのか！ 重責を担わされているんだぞ！ 助けて

やる肉親もないのに！」

「行政長官の仕事は厳しいだろう。恋をしている時間もないだろう。そんなことはわかっている」

「……だめだな、あんた。……見損なったよ」

探偵があからさまに溜息をついた。

「女の子を追いかけて生きているだけのあんたにや、わからんどう。レイチエルの重責とは、なんとしても子孫を残さないといけないということだ！ わかったか！」

探偵が去つてから、生駒は感慨にふけつた。  
衝撃を受けたともいえる。

人類の数字のことではない。

多かれ少なかれ、そんな数字になることは言られて久しかったからだ。

生駒が衝撃を受けたのは、レイチエルが担わされている責務だった。

探偵が言うように、彼女はホメムとして子供を生なくてはいけないという責任を感じているのだろう。

しかし、相手をどうやって探す？

ホメムの子を産むためには、ホメム同士の結婚が必要だ。  
彼女を含めて、ホメムは世界中にわずか六十七人。そんな中に、  
彼女が気に入る相手はいるのだろうか。

それとも、好きでもない人の子供を生むことになるのだろうか。

好きな人がもしいるとして、それがマトやメルキトなら、生まれた子はメルキトになる。

真性の人類とは認められないのだ。

真性の人間。

そのことに、大きな意味があるのだろうか。

生駒は、そんなことを考えてしまっぽじ、自分がアギとして生きてきた時間の長さを思つた。

データと回路を電気エネルギーで動かしているアギでさえそう感じるのでから、生身の肉体であるマトはどう感じているのだろう。ホメムと自分たちの違いを頭でわかつていたとしても、通常、ホメムを見かけることはない。その存在をどう感じているのだろう。

「さつきは頭に来て、言い忘れたことがある」

「探偵からのアクセスが再び繋がつた。

「なんだ」

「レイチエルには兄がひとりいる。中央アフリカの街を治めている男だ。しかし、仲は悪い。兄は、自分は王だと思っているような男だ。行政の長官ではなく、君主だと思っているんだ。レイチエルは、これに反発している」

「なるほど」

「ホメムは、地球のために、人類のために全員仲良く知恵を出し合ひ、慈悲深くそれぞれの街の運営をしていくというわけじゃない、つてことだ」

「うーむ」

いつの世も、人間は己の業を捨てきれないということである。特に、支配欲は。

「それぞれのホメムは、どんな考えを持つていいんだ?」

「それはかなり高額な情報料になるぞ。それに、一言で伝えられる

ようなことじやない。今、どうしても聞きたいんなら、教えてやつてもいいが、その前にレイチエルのことを想つて、復習しておけ」「わかった。では、いすれ

「レイチエルのことについて、もう一冊

「うむ」

「出身地はカイロニアだと言つたが、それは彼女の母親のホメムが治めていた街だ、という意味だ。彼女の祖先、つまり俺たちがアギになつた頃、彼女の何世代か前の先祖が住んでいたのは、ロンドンだ」

「イギリス人か」

「彼女が認識しているかどうか、それはわからんがな。おい、ロンドンって都市を覚えているか？　だいたい日本人つてやつは

生駒は、最後まで聞かずに通信を遮断した。

探偵のしつこい追求には慣れた。重宝する男だし、口ほど悪意はないことはわかっているが、うんざりすることもある。

確かに自分は、コウとアヤを探すことだけを目標に、五百年を生きてきた。

今、その一方は報われた。アヤと再開してからの数日間は、まるで夢のようだ。

コウを見つける。その目標が実現する日もさう遠くはない。なんの根拠もないが、そう思えるのだった。

そう、政府の情報機関に勤めるアヤの協力があれば。

アヤの協力。

へまをすればアヤさえも失いかねないが、少なくとも田はふたつになつた。

それだけで、希望を大きく膨らませる思いだつたのだ。

ふと生駒は、今日もまだアヤの訪問がない、と思った。  
ニユーキーン時間では、すでに夜の六時を回っている。アヤの就業時間は過ぎていた。

その同じ時刻、生駒のもうひとつ思考体は、フライングアイに乗って、ンドペキの部屋の前で待っていた。  
チョットマの部屋に向かうために、部屋を出でくるはずだ。  
彼女にはすでに伝えてあるが、念のため、本人にも直接話しておこうと思つたのだった。

ンドペキは部屋を出た。

チョットマの部屋はそれほど遠くはない。

わすか四時間前に会つたのだ。自分の方から話すことは何もない。しかし、「何もない」ということを話さなくてはいけない。

ハクショウから新たな情報や指示があるかもしれない。それをチョットマから聞くのは癪に障るが、仕方がない。

部屋を出るなり、いやなものに出会つた。

フライングアイだ。

やけに近接して飛んでいる。

しかも話しかけてくる！

イライラさせてくれるやつだ。

叩き落とそうかと思つたが、自分の今の状況を考えると、ここはトラブルに巻き込まれるのは得策ではない。

無視するに限る。

「チョットマのパパです。娘がいつもお世話になつてます

はあ？

なんだ、この田た玉親父は。

ンドペキは、相手にせずに通り過ぎようとした。

「お話を伺いたいことがあります。実はあなたの部屋こは  
ンドペキは思わず足を止めた。

「立ち止まらないで。歩きながら話しましょ。あなたは話さない  
で」

田ん玉親父は「イコマ」という名だと名乗った。

「手短に話します。ハクシュウ隊長にも、了解を得た上で、今日のシリーズの会談を、チョットマの装備にもぐりこんで見物させていただいておりました。街に帰ってきて、チョットマは一直線にあなたの部屋に向かいました。そして、私もあなたの部屋を拝見することになりました」

「ンドペキは、怒りがこみ上げてくるのを感じた。  
あいつ、こんなやつを連れていやがったのか。

「あなたの部屋には、情報収集機器が取り付けられています。微細な電波が判別できました。奥の壁、あれ一面が盗聴器だと思います」

「クソ！」

もう、厄介」とに巻き込まれているのか。

「ンドペキは平静を装つて往来を歩いているが、付かず離れず一メートルほど後ろをふわふわとついてくる田ん玉親父自身が厄介者のようを感じた。

「あなたは賢明でした。あの装置は生の音声を拾うタイプのものじゃありません。電波化した信号を拾うものです。もちろん電波化した声も」

「いつ、本音」と言つていいのか。

部屋の違和感を感じたのは事実であるし、盗聴器の存在を疑つてみたことも事実だ。

現に、チョットマが帰つてから、心配になつて調べてみたが見つからなかつた。

簡単に見つけられるものではないのだろう。  
そう思つたし、いつの間にか違和感も消えていたのである。

「「」のことはすでにチョットマには伝えてあります。」「してあなたの耳に入れるつもりだ」と「」も、  
ンドペキは自分のイライラした気持ちが、爆発しそうになってしまった  
るのを感じた。

ここ数日のすべてのことが、その原因だった。  
わからないことだらけで、面白くもない。  
くそつたれの洞窟に、くそつたれの会談。  
なにがパリサイドだ！

レイチャエルがどうしたというのだ！  
それなんだ！ この田ん玉親父は！  
ひそひそと背後から咳きやがつて！

ゴーグルの中の顔は怒りで膨張していたが、幸いに道往く人には  
見えない。

短剣の柄に手が触れたが、無理やり握りこぶしを作ると、「」の田  
ん玉親父を切り付けたい衝動を抑えた。

「では、今日のところは「」の邊で。以後、お見知りおきくださいま  
すよう」

そういうてフライングアイはすーっと舞い上ると、どこかに飛  
んでいった。

「イライラは抑えて」

フライングアイが消えると同時に、また声がした。

「わたし」

ンドペキの横を、ひとりの女が追い越していった。

「さつきのフライングアイと同じように、歩きながら話すわよ」

洞窟で会つたあの女だった。

もつパリサイドのコロニーから開放されたのだった。

「ちよつとゆりへじめに歩いて。追い越したり抜かれたりしながら歩くわ

「すばり言ひわよ

「こゝは危険

「抹消される

「事態は切迫している

「すぐにそのまま洞窟に向かって

「部屋に帰つてはだめ

「私を信じて

「追いかけていくから

そして、女も街角に消えた。

チョットマの部屋はもつ田の前だった。

ンドペキは迷つた。

チョットマに助力を頼むか。

しかし、そのドアの前にフライングアイが浮かんでいた。  
ちよつとゆりへじめに歩いて。追い越したり抜かれたりしながら歩くわ

「すばり言ひわよ

「こゝは危険

「抹消される

「事態は切迫している

「すぐにそのまま洞窟に向かって

「部屋に帰つてはだめ

「私を信じて

「追いかけていくから

「すばり言ひわよ

「こゝは危険

「抹消される

自問してみても、答えが簡単に出来るわけでもない。  
街を歩きながら、考え続けた。

ふん、イライラするなつてか。  
これでイラつかずにおれる人がいるなら、お目にかかりたいもん  
だ。  
そんな思いを聞に挟みながら、ンドペキは結論を出やうとした。  
いつまでも歩き回っているわけにはいかない。

女の言つことじが正しければ、今この瞬間にも俺の肉体は消えうせ  
る。

それに、チョットマに会つた後、どこに行けばいいことじのだ。  
監視されている部屋に帰るというのか。  
肉体が消えうせる緊張感にさいなまれながら。

女の指示通り、洞窟に行けばどうこうじとしなるのか。  
レイチャルの命令に背いたことになる。  
しかし、だからどうだというのだ。  
部屋に盗聴器を仕掛けさせたのは政府機関に違いない。  
その長官がレイチャルなのだ。  
相手が政府機関であるなら、俺には逃げる道はない。  
スイッチひとつだ。  
俺の命を消すことなど。

もし女が嘘をついているのだとしたら?  
どうなるというのだ。

洞窟に連れて行かれて、拷問でもされるとでも云つのか。

「んー」

「むー」

とうとうンドペキは、これから自分の行動に、結論を出した。  
もう自分の部屋に帰る気はない。  
そして女を信じる。

ンドペキは歩調を速めた。

走りたいが、街中では目立つすぎる。

城門を抜ければ政府機関はキャッチするだろ？  
行動を継続的に監視しているな。

城門を抜けて荒野を進むことになるが、今は街歩き用の軽装備だ。  
移動のための補助装備はない。  
自分の足で走ることになる。

洞窟まで、体力勝負だ。

夜通し走つても、明日の朝でも行程の半分はおろか、十分の一も  
進んでいないだろ？

三日三晩走つて到達すればいい方だ。

しかも、万一殺傷機械に出くわしたら、今の装備で逃げおおせることは難しい。

しかし、女は追いかけていくから、と言った……。

迷っているときではない。

ンドペキは城門を目指した。

私を信じて、とあいつは言った。

その言葉を自分に言い聞かせた。

あいつは昔の俺の恋人だ。

そう思おつとした。

「この道をこのまま行けば、自分の部屋の前を通り過ぎることになる。

部屋に戻る気はない。

何が待ち受けているかわかつたものではない、といつ『気がした。

ん！

部屋の前に誰かい！

ドアをノックしている！

女だ！

濃紺のワンピースを着ている。

サンダルを履いている。

肩から大きなバッグを提げている。

な？

レイチエルか？

あの仮面はつけていないが……。

見ない振りをして通り過ぎよつとしたが、遅かった。

振り返ったレイチエルと目が合つた。

くつ！

俺だとは『氣づくまい。

顔は見えないのだ。

この装備は知らないはずだ。

そうあって欲しい！

しかし、ンドペキの希望ははかなくも潰えた。

レイチエルが手を振ったのだった。

そして、笑つて、ンドペキ！と呼んだのだった。

万事休す。

自分の部屋の前を無視して通りすぎる不自然さを取るか、レイチエルに近づいて次の展開を待つか。

あるいは、ここでレイチエルを刺すか……。

ンドペキは瞬時にめまぐるしく頭を回転させた。  
もう後数歩の間に決めなくてはならない。

が、決められなかつた。  
立ち止まつてしまつたのである。  
部屋へと続く数段の階段の下で。

レイチエルが駆け下りてきた。

そしてまたにこりとすると、にこやかに言つたのだった。  
「ダンスのお稽古に行つた帰りに寄つてみたの」

「…………」  
　　ンドペキは突つ立つていることしかできなかつた。  
「行政庁の中では、そんなレッスンしてないから  
「…………」

レイチエルは、少し顔を曇らせた。

「迷惑だつた？」

「いえ……」

「よかつた。でね、私それなりに素質があるんじゃないかつて、自

分では思つてゐるだけだ

「はい」

「ね、んどペキ。今は上司として話をしているんじゃないんだから、もつ少し普通にしてよ」

「……」

ンドペキは、それならそれで、早く立ち去ってくれ、と念じた。

「そんなレッスンが街にはあるよつて、同僚の子が教えてくれてね。彼女、親友なんだけど、その子も通つていたんだつて」

ダンスのレッスンがどうした！

そんな話にどんな意味があるとこつのか！

今にも自分を殺そつとしてこゐ組織の長だとこつの一元の無邪氣さはなんなのだ！

完璧な芝居を打つてこつもりなのか！

俺を油断させよつとこつ手なのか！

「こんな時代だけど、いろんな楽しみつて見つけられるものなんだ。人間つてすゞいよね！ ね、そう思わない？」

まつたく意味不明だ！

「あんな会談があつた日なのに、街はいつもと変わらない。ダンスのレッスンもいつもどおり。これって、すゞくない？」

ンドペキは、悟つた。

こいつを帰らせるには、平然と普段どおりに相手をして、や、そろそろ寝るよ、とやりげなく別れを告げて部屋に入る振りをするしかない。

今に「」で、「」を刺す「」とができないなら。

「はい、そうですね」

「また、そんな言い方して」

レイチエルが頬を膨らませる。

「恋人みたいにしろとは言わないけど、もうちょっと、やせじへで  
きないかな」

「す、すみ、いや、ごめん」

「なんだかなあ」

レイチエルのエメラルドの瞳が見つめてくる。

「そろそろ寝るよ。気をつけて帰つて」

「は？ まだ八時よ。今日の「」、そんなに疲れたの？」

「はい」

「じゃ、肩、揉んだげよ」

「えつ」

ンドペキは絶句してしまつた。

部屋に入るところのか、「」の女は！

いつたいどうこう神経をしているんだ！

政府機関の娘、いやこいつはホメムだ。ホメムはこれが普通なの  
か！

それとも、部屋に入つたとたん、バッグから武器を取り出すとい  
うのか。

ンドペキがたじろいで、後ずさつたのを見て、レイチエルは口調  
を変えた。

「「」めんなさい。やっぱ迷惑だつたみたいね」

「……」

レイチャエルが背を向けた。

ンドペキは身じろぎもせず、レイチャエルの後姿を見送った。  
俺は部屋には入らない。

レイチャエルよ。

早く消えてくれ。

しかしレイチャエルは振り返つて立ち止まつた。

「じゃ、また明日」と、手を振つた。

ンドペキも手を振つた。

「はい。よろしくお願ひします」

そのまま、レイチャエルは立ち去りつとはしない。  
お見送りにならないではないか。

ンドペキは心を決めた。

部屋に入つてやる。

ドアノブを回して、部屋の中を覗き込んだ。  
レイチャエルの視線を背後に感じながら。

不自然に見えない程度に、慎重に。

明かりつけた。

変化は感じられない。

振り返ると、レイチャエルがまた手を振つてきた。

ドアを閉め、スコープを覗くと、レイチャエルの姿はなかつた。  
ンドペキは、急いで装備を身につけると、再びドアスコープを覗

いた。

人影はない。

けつ、下手な芝居を見せやがつて。  
あれじや、いかれた娘じやないか。  
なにが、肩を揉んだげようか、だ。

ンドペキは部屋を出、後ろを気にしながら城門まで来た。  
いつもの夜の城門だ。

人の出入りは禁止されていない。

衛兵も、いつもどおり、退屈そうに外を睨んでいる。

「狩か」

衛兵が声を掛けてくる。見知った顔だ。

「そうだ。行つて来るよ」

「気をつけてな」

城門を抜けると、ンドペキは一気に走り出した。  
街を出るのには手間取ったが、そのおかげで装備は身につけることができた。  
早ければ洞窟に夜半には着くだろう。

ンドペキは走りながら、これまでのことを反射したが、すぐに考  
えることをやめた。

何度も考えたつて何も始まらない。

それより、一刻も早く洞窟に着くことが先決だ。

そして、スイッチひとつで肉体を消滅させられる事態から逃れる  
ことだ。

そう思つたのだった。

しかし、洞窟の女が言つた「抹消」とはどういふことなのだろう。  
サリの時と同じだろうか。

通常、刑罰は六段階に分かれている。

今社会では、刑罰は極めて簡素化されている。

社会的な経費負担を減らすためである。

最低のレベル？からレベル？まで。

レベル？は単純な刑罰で、罰金刑だ。金を払えない者は一定期間の強制労働。

次のレベル？は重罰金刑だ。払えなかつたらレベル？と同じ刑となる。

レベル？は強制再生と財産没収。

レベル？はレベル？プラス記憶の完全な抹消。

再生はされるが、ほとんどの記憶は消滅する。

レベル？は、いわゆる死刑。肉体と記憶の消失である。

瞬時に消え失せ、再生されることはない。

そして最高刑のレベル？は、ヘブンズゲイトと呼ばれる牢獄送りである。

この刑に処せられる囚人は多くはない。人を殺したからといって、この刑に処せられるものではない。それほどの重罪なのだ。

ヘブンズゲイトは、別名、ペインズベッドとも呼ばれている。

言葉にできない激痛が全身を駆け巡り、耐え切れずに死ぬ。数分後に思考と神経のみが再生されるやいなや、またその苦痛が襲つてくる。その繰り返しだ。しかも無期限。いつ終るとも知れないのだ。

ただ、たとえそれが数十年間続こうとも、刑期が終わつたときに正氣を保つていたなら社会復帰は可能だ。

開放時には廃人となつていようが、再生時にはまた若者の姿となつて生き返るのだから。

しかし耐えられる人間は万人にひとりもいない。一応、希望の光はあると見せかけてあるということだ。

ンドペキは、サリを殺してレベル?の普通の死刑を狙つていたわけだ。

ただ、もうひとつ、ほとんどの者は存在さえ知らないが、ベールに包まれた刑があると言われている。

レベル?のヘブンズゲイトに替わる刑といわれている。  
閉じ込められるのだ。何も与えられず。

そのうち、人は死ぬ。

再生されることはない。

重要な政治犯や、社会的影響力の大きい犯罪人が処せられる刑だといわれているが、実態は不明だ。

しかも、この刑に処せられる事例は極めて稀だといわれている。  
ちなみに、その刑が行われる街はニューキーツだけである。  
世界中の街から、その囚人はこの街に搬送されてくるらしい。

「抹消」がレベル?の死刑のことをいつのなら、元々望んでいたことではないか。

ンドペキは、今こうして荒野を走りながら、刑を回避しようとしている自分がおかしかった。

やれやれ。

いつたい、今まで自分は何を考えていたんだらう。  
死にたいなんて。

単に暇だったから、生きていく希望が見つけられず、妄想を膨らませただけではなかつたのか。

今もイライラは募るし、腹も立つ。

しかし、死にたいかと問われれば、今なら生きていきたいと応えるだろう。

死が怖いわけではない。

それは明確に言える。

なんとなく……、心に灯が灯つたとでも言つのだらうか。

それに、謎が多すぎるのだ。

その答を見ずに死ねるものか、という氣もするのだった。

謎を解くことが生きていく目的だとまでは言わないが、少なくとも、今を生きる心の張りをもたらしてはいる。

洞窟の女の素性を知りたい。

彼女は俺の、なんだつたのだ。

それに、チョットマにももう一度会いたい。会えるものなら。

そして、冗談を言つて、彼女を笑わせたい。

あの金属的で異常に甲高い笑い声を、もう一度聞いてみたい。

そう思つのだった。

殺傷マシンも現れず、快調に飛ばしていった。

十キロほど来たところで、待つてゐる者があつた。

「待たせたな」

確かめるまでもなく、洞窟の女だつた。

「ンドペキ、信じてつて言つたのに、あなたつて人は」

「ンドペキがフル装備に着替えてきたことを非難してゐるのだ。

「いや、事情が」

「もういい！」

女は猛然と走り出した。

ンドペキはついていくのがやっとで、事情を説明するどいりではなかつた。

どうしよ~。

私、おうおうじている?  
しつかりしなくちや。せや。

私は、あなたの子分なんだから。  
ね、ンドペキ、やうでじょ。

それにしても……。

どうして?

なぜ、私に何も言ひてくれないの?

「ノドペキが荒野を駆けてこる」、「チヨシトマはハクシユウ」と連絡を取っていた。

「ノドペキ伍長がトラブルに巻き込まれてゐるみたいです」

チヨシトマは城門の外にいた。

「北に向かつて全速力で走つて行つたところです。フル装備で

!」

「こつだ!」

「半時間ほど前です!」

約束の四時間が経つてもノドペキが現れず、痺れを切らして様子を見に行こうと部屋を出ると、ちよび生駒のフライングアイと出合つたのだ。

パパが言つたは、ノドペキはチヨシトマの部屋の前まで来たもの、そのまま通り過ぎていつた。

不審に思つて後をつけっていくと、自分の部屋の前でレイチェルと会い、一言二言交わしてから着替えて出て行つたといつた。

「すぐに私も装備をつけて追いかけましたが、彼はGPSのスイッチを切つていいみたいで、どこにいるのかわかりませんでした。それで、街に戻つて伍長の部屋を訪ねましたが、やはり誰もいないみたいで」

チョットマは、盗聴装置が取り付けられているンドペキの部屋の前で通信するのをためらつて、城門の外まで移動してきたのだった。

それに、ここならあなたが帰つてきたらわかる。  
きっと、戻つてくる。  
信じてる。

でも、不安もあるのよ。  
このまま、いなくなつてしまつよう。  
サリもいなくなり、あなたまでいなくなつたら……。

「うむ。盗聴装置とは？」

チョットマはパパから聞いたことを話した。

「もしかすると、私の部屋にも仕掛けられているかもと想うと、家に帰る気がしません」

「じゃ、パパに見てもらえ。でも、パパはなぜそれがわかつたんだ？」

「微細な電波を感じたそうです。普通の家電や武器や通信装置から発せられるものではなく、明らかに暗号化された信号だったそうです。私達が使う電波は、政府が内容を把握するために、暗号化することは禁じられているそつなんです」「なるほど」

チョットマは身震いした。

こんな経験は初めてだった。

恐ろしい相手との死に物狂いの戦闘も経験していた。

しかし今回は、身包み剥がれて簾巻きにされ、往来に放り出されたような、先の読めない恐怖が背中に張り付いていた。

「私、どうすればいいでしょうか？」

ハクシュウはしばらく黙り込むと、「ここに来るか？」と、言ったてくれた。

「はい、できれば」

「いや、ちょっと待て。ンドペキの動きも気になる」

「はあ……」

「悪いが、城門付近で見張つてくれ。衛兵や街の人には怪しまれないように、どこかに隠れて」

「……わかりました」

「一旦、城門を出て、どこかに潜んでいるのがいい」

「了解です……」

不安そうな声をしていたのだろう。

「心配か？」

「はい……」

「でも、気にするな。レイチエルから何か指示を受けたのだろう」

「でも……」

それならそれで、話してくれてもいいのに。

なにも黙つて行つてしまわなくともいいではないか。

「確かに、北へ向かつたというのは気になるけどな」

「でしょ。だいたい」

チョットマは言葉を飲み込んだ。

ハクシュウに不安をぶちまけてもどうなるものでもない。

「応援に「リネウルスを寄越す」

「はい、ありがとうございます！」

ハクシュウもやはり疑問には思つてゐるのだ。

もとより、ンドペキと戦闘になると考へてもみなかつた。

しかし、万一千衛兵や見回りの兵に誰何されたときに、リネウルスと一緒に夜の狩に出るなどと、かわしてくれる。

「リネウルスなら、ンドペキから上手く話を聞きだせるだら、  
チョットマはがつかりした。

ハクシュウは自分の身を案じてリネウルスを寄越してくれるのだと思つたのに、ンドペキと話ができるからとこゝのだ。

それじゃ、私の立場はないじゃない。  
ンドペキの部下なのに。

それに、勝手に、一の子分だと自負もしてこゐるの。

「万一千の時には、リネウルスに守つてもらひ。彼は衛兵連中や治安部隊にも顔が利く」

ハクシュウにそう言われて、チョットマは少しだけ気が治まつた。  
では作戦にかかります。すでに城門を離れてゐます」

「よし」

すぐにリネウルスから連絡が入つた。

「そつちに向かつてゐる。君の位置は確認済みだ」

「はい！ ありがとうございます！」

「礼を言つな、これは作戦だ」

「はい！」

「北へあと一百メートル行けば、小高くなつた所がある。そこは灌木が生えていて、見張りには好都合だ。ソドベキが帰つてくるなら、その丘の下を通るだらう」

「さつと、もうすぐ帰つて来ます！」

「ああ。そう思つよ

「はい！」

「そこに、希少金属を含んだ石ころがたくさん転がつてゐる。もし誰何されたら、それを集めていふと言えばよい。毎晩は暑いから、夜にしているんだと」

「わかりました！」

「薬になる植物も生えているけど、兵士がまさか薬草を探つていますといふのもおかしいからな」

チヨックトマは笑つた。

「コリネウルスは下手な冗談を言つてくれていいのだ。

チヨックトマは、来てくれるのがコリネウルスでよかつたと思つた。スジーウォンやパキトポークは、苦手と言つてもいい。

スジーウォンは刺々しいし、巨漢のパキトポークとふたりきりは威圧感がある。

ふたりに比べて、コリネウルスはしつとりした人物だ。

ミッショソの目的などをきちんと説明して、部隊を納得させてから行動に移すリーダーだ。

「コリネウルスはマトだということになつてゐるが、他のほとんど兵士と同様、過去を語らない。

真偽はわからない。

ただ、根っからの兵士ではないようで、戦闘そのものに興味がなく、むしろ地形や風を読んだり、星を見たりするのが好きな男だ。背もかなり小さく、戦闘能力は高くないが、言動の信頼度は高い。

もちろんハクショウの命令は絶対視しているし、部隊を率いる能力にも秀でている。

「リネウルスから教えられたことがある。

リーダーにはいくつかのパターンがあり、ンドペキは仲間型、スジーウォンは大型型、パキトパークは人情型、そして自分は参謀型だというのだった。

「リーダーなのに、参謀型っていうのも変だけ？」

「そうですか？」

「自分は常に準備万端で物事を進めたい。考え方抜いた上で正しいことを実行したいからな。そしてそれを部下に説明する。だから参謀型なんだ」

「コリネウルスは、単なる一兵士であるチョットマと話すときも、このようにしてきちんと説明してくれる。

チョットマは、そんなコリネウルスが好きだった。  
私にも分かるように説明してくれるから。

「隊長はどうなんでしょう？」

「ハクショウは、すべてを備えているリーダー。俺よりずいぶん年下だけど、彼に惚れているのさ。彼に、といつより彼の手腕に、と言ったほうが正しいかもしないけどね」「理屈っぽい面はあるが、安心できるのだ。

「生意気を言ひますが、そのとおりですね」

「生意気はいいことわ」

「はい。でも仲間型っていうのは、どういうタイプなんですか？」

「ンドペキの評価を聞いてみたい。

「部下を仲間だと思っている。個人の力を認め、協調と信頼の中で

最大の力が発揮される。それが最も大切なことだと思つてゐる人だ

な

「それ、わかりますね！」

「ハハ、君はまだリーダーといつもの意識していないだろ？けど、自分なら何型になるとと思つ？」

ンドペキは仲間型。

それなら私も、もちろん。

「仲間型です」

チョットマは張り切つて答えたものだ。

「んー、そうかなあ。僕は、君はたぶん人情型になると思つよ」

「ええっ、人情型ですか！」

パキトポークと一緒にではないか。

チョットマは少しがつかりした。

「型といつても、どれが優れているという意味じゃないよ」「はい……」

そしてコリネウルスは、いつも言つた。

「世の中には、リーダーの資質がないのにリーダーぶつてゐるやつがたくさんいる。人を型に嵌めて見るのはよくないけど、こういう分類の知識があれば、腹を立てないでいいところで腹をしてしまう、つてこともなくなるだろ」

チョットマは、自分がよくスジーウォンやパキトポークに腹を立てて、突つかかっているところを指摘してくれてゐるのだと思った。「それに、自分がどんな類型に当てはまるのかを知つていると、部下を選んだり、上司を選んだりするときに少しほは役にたつよ。誰だって、敵の行動パターンや弱点を見極めようとするだろ。それなのに、自分や自分の仲間のことはおざなりなものぞ」

チョットマは、「コリネウルスに言われた數に身を隠しながら、丘の下や城門の監視を続けた。  
そして、ンドペキのことと思つた。

いつたい、なにを指示されたのだろう。

仲間型なのに、なにも言つてくれないなんて。

しかも、自分がンドペキを監視する任務につくことにならうとは  
……。

ハクシユウもコリネウルスも、見張るといつ言葉を使つた。  
ンドペキを見張れと。

見張れではなく、待てと言つてくれたらよかつたのに、と思つた。

「コリネウルスのいう石ころがどれなのかわからなかつたが、それ  
らしきものをいくつか証拠品としてバツグパックに入れた。

時々移動しながら、ンドペキがコリネウルスが現れるのを待つた。

街へ帰つてくる兵士が城門に近づくたびにハツとしたが、いざれ  
もンドペキではなかつた。

月が出ていて、あたりはかなり明るい。

生暖かい風が、草を揺らしている。

見慣れた荒涼とした景色。

街を取り囲む土色の城壁。

時おり舞い上がる塵が、城壁から漏れ出す青白い明かりに照らさ  
れて、白いもやのように流れ去つていった。

チョットマは歌を口ずさんだ。

大昔に流行つた、アグネスチャンという大歌手の「白い靴下は似

合わない

私の心に住んでたあなたが、誰かと腕ぐみ遠くへ行つてしまひ…

…。

その部分が好きだつた。

失恋の歌よね。

でも、この歌しか知らないの。

もう、世界には「歌手」なんて職業はないうらしから。

ねえ、ンドペキ。

今は君だけしか見えない、なんてこと、言つてくれたことはないけど、私はさ。

あなただけしか見えない、つて何度、心の中でつぶやいたことか。ホント、もう、早く帰つてきてよ。

待たせたな、とか言つて。

ハクシユウから連絡が入つた。

「どうだい、そつちの様子は」

「伍長はまだ帰つてきません」

「そうか。ところで君のパパは、もう帰つたかい？」

「はい。娘さんが来る予定があるし、調べものもしたいからつて」

「そうか。聞きたいことがあつたんだが。じゃ、明日のことにして

う

ハクシユウが通信を切りそつたので、チヨットマヌケな早口で言つた。

「聞きたいことって、どうこうことですか？ ようしければ教えてください」

ハクシユウと、もう少し話をしていたかった。

心細かつたのだ。

自分のリーダーの不可解な行動を確かめるため、荒涼とした台地で身を隠しているという状況が。

「レイチャエルのことや」

「はあ？」

「彼女は何を考えているのか、君のパパなら知っているかも知れないし、調べてくれるかもしないと思つてね」

ハクシュウの疑問に、もちろんチヨットマは答えることはできない。

ただ、ハクシュウとの余話を長引かせるネタはある。

「パパの娘さんで、バードというマトがいるらしいんですが、その人はニューキーツの政府機関に勤めているそつなんです。その人なら、情報を持つていてるかも知れませんね」

バードに会つたこともないし、どんな仕事をしているかも知らなかつた。

かるうじて話題を繋ぐだけのネタだ。

「そうか、期待できるかな。まあ、それを知つたからといって、どうなるものでもないんだが、作戦の全貌は知つておきたいんですね」

「じゃ、頑張れよ、と通信を切られそうで、チヨットマはあわててまた言つた。

「隊長、パパは思考体を二つも持つていてるそつなんです。それつて、すごいですか？」

「普通は、ひとつだからね」

「一体は私とシリー川に行つていて、一体は調べもの。そして本体は、誰かとおしゃべり。つまり、おしゃべりしながら、シリー川の会談を見つめていられるなんて、すごいですよね！」

「彼らの頭の中は記憶と情報の塊だ。それを組み立てては潰すの繰り返し。それが彼らの思考。感情さえ失つてしまつた人もいる

「ええ。聞いたことがあります」

「君のパパは別格だけど」

「はい！」

「前を向いているから。いい人だと思つよ」

「ありがとうございます！ そう言われるとうれしいです！」

チョットマは本氣でうれしかつた。

今まで担当してくれたアギは数人。

誰とでも仲良くしてきたかというとそうでもない。

どんなに、娘として愛情と親しみを込めた話をしようとも、感情のない顔で相槌を打つだけの男もいたし、怒りだけが生きがいのような女もいた。

しかし、生駒は特別だった。

何がパパをそうさせているのか、チョットマにはわからなかつたが、心から「娘」とのひと時を幸せだと思つてくれているようだつた。

「隊長は、パパの新しいお部屋をご覧になりました？」

「一回しかお会いしていないから、新しいかどうかは知らないけど、狭い部屋だつたよ」

「あ、そこ！ そこです！ この部屋つて、どこなのつて聞いたたら、自分が家族と一緒に実際に住んでいた部屋なんですつて」

「そうだね。僕もそう感じたよ」

「えつ、そなんですか！ それがわかるつてことは、隊長もあいつお部屋に住んでらしたんですねか？」

「まあね。さてと、俺は一個しか脳を持つてない。もつと君とおしゃべりしてみたいけど、切るよ。そろそろコリネウルスが着くだろ？ もう少しの辛抱だ。彼にお話を聞かせてもらひなさい」

ハクシュウが通信を切ってしまった。

お話を聞かせてもううつて、子供扱いされてしまった。

でも、それはそれでよかつた。

どんなときでも冷静さを失わないハクシュウの声を聞けたから。  
チョットマは、いつのまにか自分が涙を流していたことを知つて、  
驚いた。

ゴーグルの中で泣くなんて、初めてのことだった。  
コリネウルスの位置を示すポイントが、もうすぐそこまで来てい  
た。

早く来て！

参謀型のリーダー！

チョットマは、心の底からうつ思つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8460j/>

---

ニューキーツ

2011年12月27日19時50分発行